満蒙と満鉄

南満洲鉄道株式會社

滿蒙と滿鉄

南滿洲鉄道株式會社

滿蒙と滿鉄

南滿洲鉄道株式會社

目次

今日の滿蒙

今日の滿鐵

附

(イ)鮮滿支旅程と費用概算

(ロ)南滿洲鐵道株式會社鐵道線路及委任經營鐵道線路略圖

今日の滿鐵

附

(イ)鮮滿支旅程と費用概算
(ロ)南滿洲鐵道株式會社鐵道線路及委任經營鐵道線路略圖

今日の満蒙

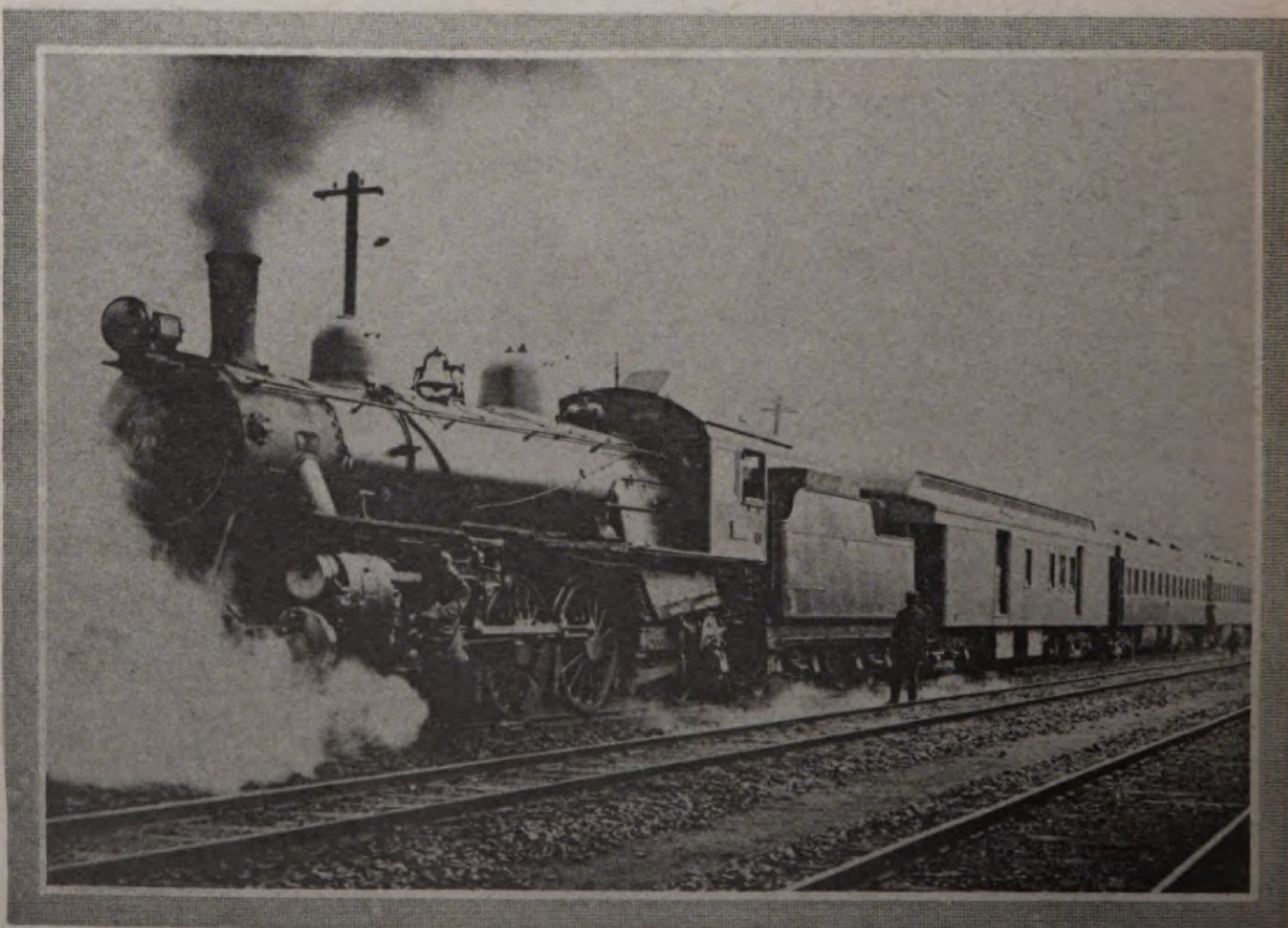


今日の滿蒙

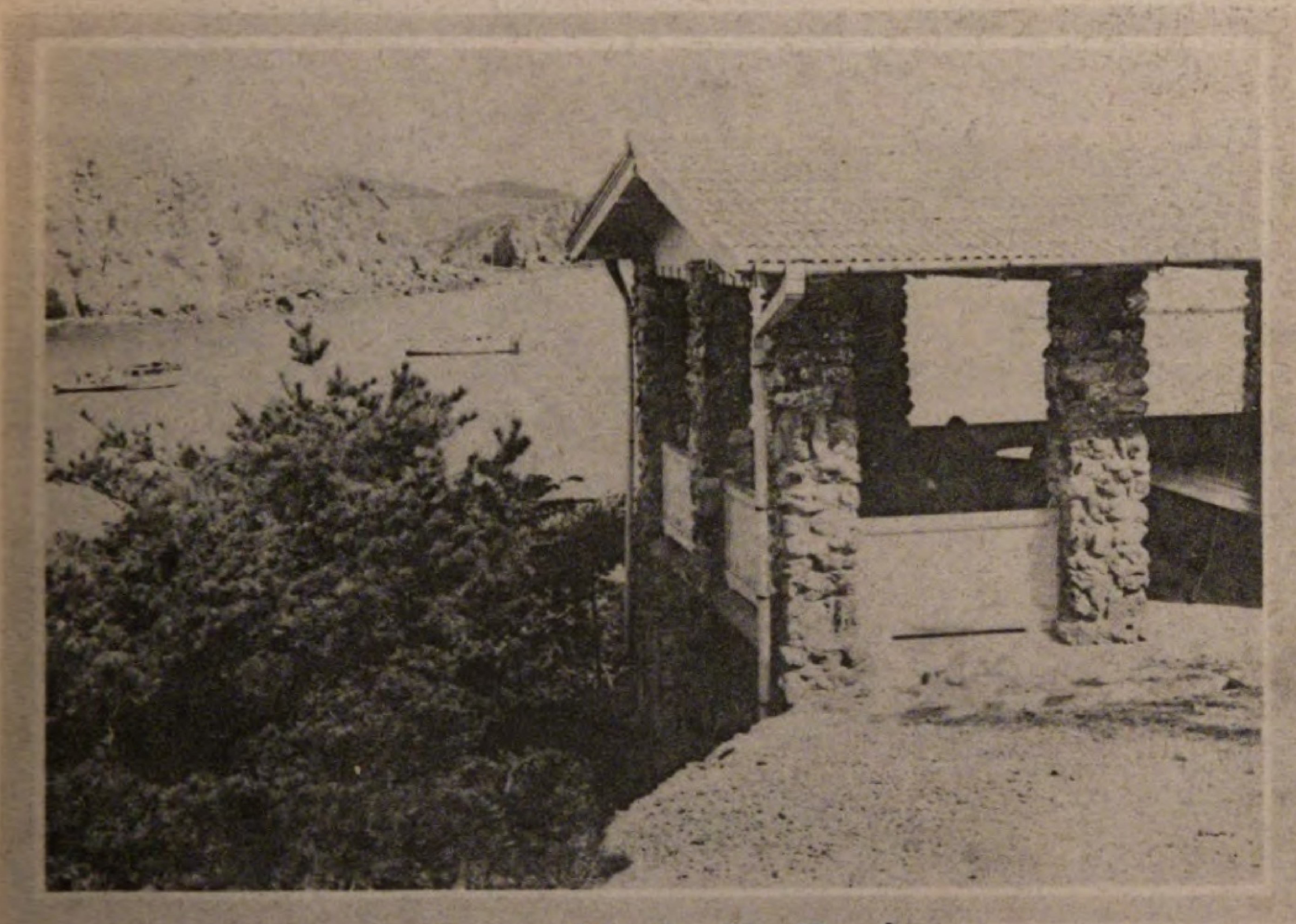




満鐵本社



満鐵の汽車



大連郊外老虎灘



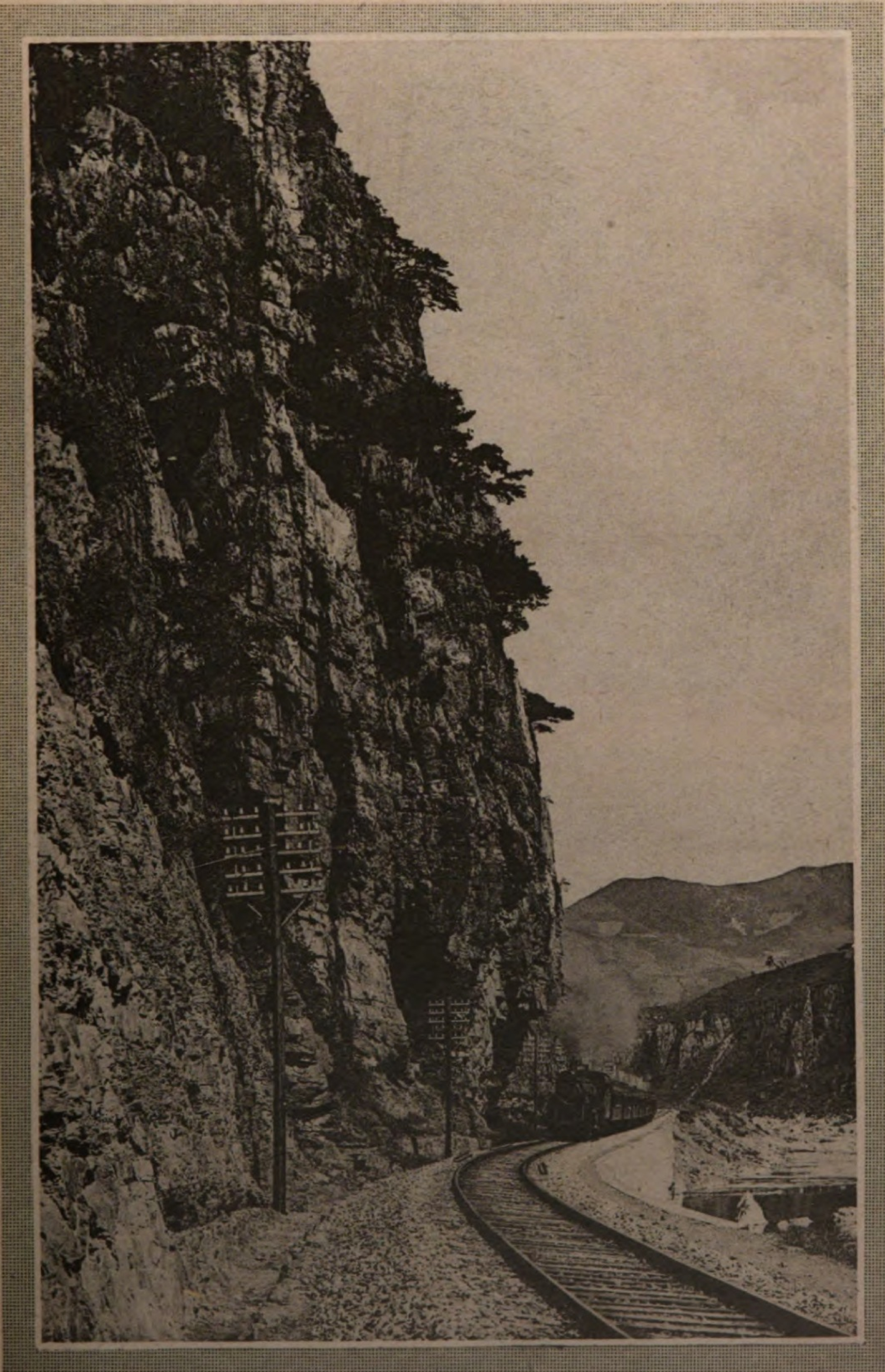
大連西公園



遼陽白塔



奉天北陵



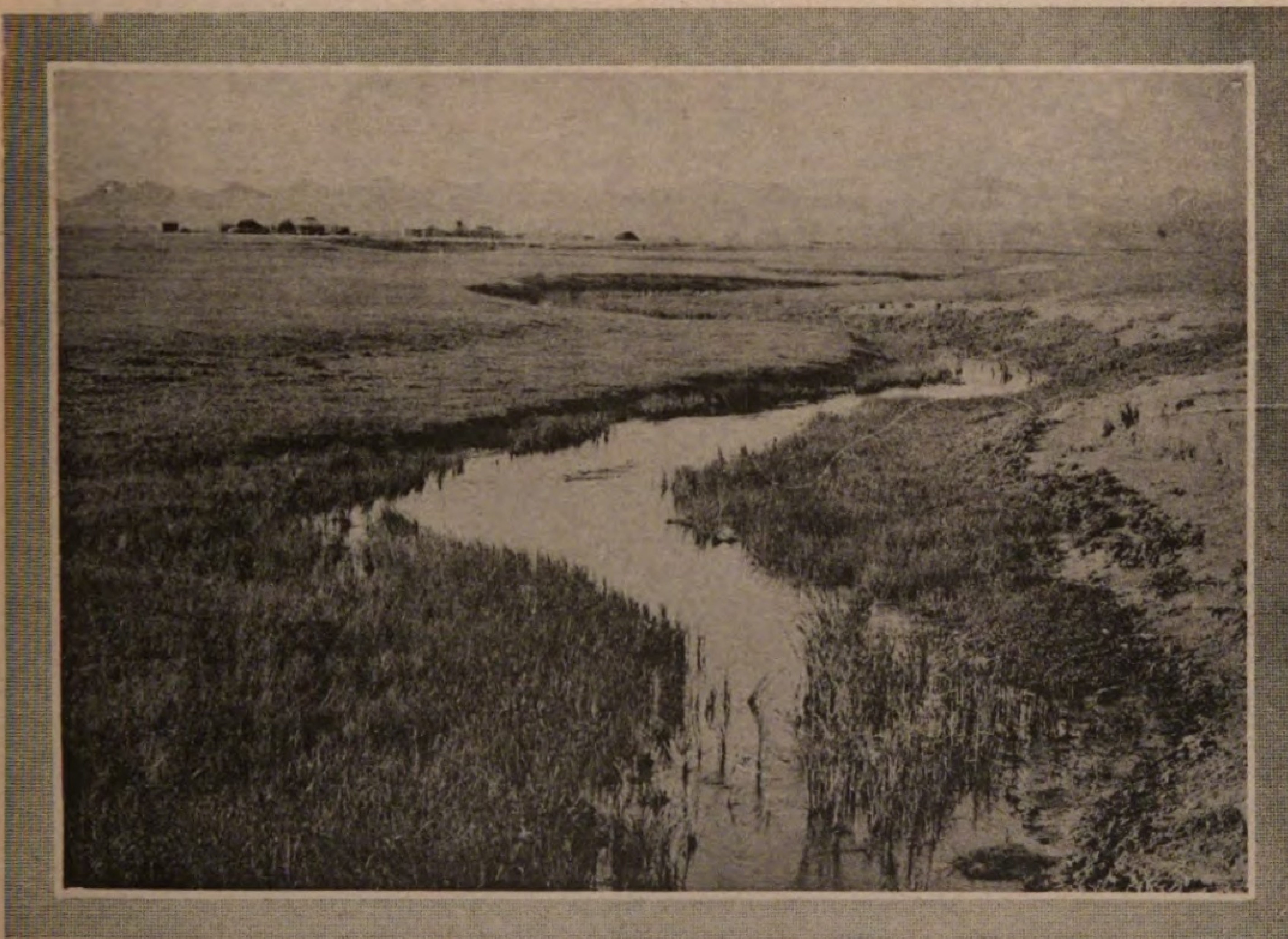
釣魚臺の絕景



パインタラ南大街



長春西公園



洮南附近の平原



哈爾賓松花江岸

今日の滿蒙

一、沿革

滿蒙とは滿洲と蒙古を併稱したもので、その範圍は大體奉天、吉林、黑龍江の所謂東三省と東部内蒙古とを指してゐる。滿洲の歷史を顧ふに古代北方は肅愼、濊貊、扶餘などの諸族が勢威を振ひ、其後高勾麗、渤海、遼、金から元、明、淸などと約三千年の興亡隆替を經て今日に及んでゐる。此の地が國際文明と接觸するやうになつたのは西曆千六百八十九年の有名な露支間のネルチンスク條約締結以前からのやうである。然し眞の國際文明接觸ともいふべきは千八百九十六年露支間に締結された露淸同盟密約及東淸鐵道會社設立に關する條約批准後卽ち我が明治二十九年頃からとみるべきであらう。露國は之等の條約に依つて盛に東方經營に努力したものだが、明治三十八年以來我が國が之を踏襲するやうになつてからは極力産業、文化の開發に努力を拂つた。爾來其の業蹟は著々と擧り之が進步の

跡は今日内外人の均しく驚異とするところである。されば玆に滿蒙の產業竝商業、交通の狀態から行政方面の大要を記し以て其の全豹を窺ふ事とする。

二、地　理

地勢　滿蒙の東部は一帶に山地が多く、烏蘇里江、豆滿江、それに長白山脈鴨綠江などを境として露領沿海州竝に朝鮮に連つてゐる。西部はたゞ一望涯しない大平原の蒙古を過ぎて興安嶺に遮られ、北は黑龍江を隔てゝ露領黑龍州に隣り、南は黃海及び渤海に臨んで其の一部は萬里の長城を界して支那本部と接壤してゐる。蒙古の平野にはそここゝに波狀の起伏があつて奇觀を呈してゐる。河川には遼河松花江本支流の外、嫩江、鴨綠江、豆滿江、烏蘇里江等と著名な大河が流れてゐる。其の流域一帶は滿蒙を通じての最も豐饒肥沃な土地で、殆ど農耕地として開發され、滿蒙農產品の大部分は實に此の方面から生產されるのである。尤も山地帶と云つても今後開拓さるべき所は隨分と多い。

面積人口　支那行政機關不備の爲確數を得るは困難であるが、本社最近の推算に依れば滿蒙の面積人口は左の如くである。

	面積	人口
奉天省	一五、一五一方里	一三、四七二、〇〇〇人

吉林省	一三、六〇五	六、四二九、〇〇〇
黒龍江省	三五、四九七	三、五五八、〇〇〇
東部内蒙古	一〇、一六八	四、三六六、〇〇〇
計	七四、四二一	二七、八二五、〇〇〇

氣象　滿洲は非常に寒い處といふ感じを一般に與へてゐるが内地で想像してゐる程の酷寒ではない。殊に内地と違つて家屋が悉く煉瓦造りで煖房設備が完全してゐるから、どんな住宅でも屋内に居れば恰も春のやうである。又暑熱の度に於ても殆ど内地とかはらないばかりでなく其の期間の如きは七、八月の二ヶ月位で極めて短い。

農業上より滿蒙の氣候を觀れば夏期に於て日本内地の關東地方に劣らない程の高溫を示してゐる事と秋期には滿蒙を通じて暴風、暴雨の絕對にない事が特に幸とするところである。

三、産業

農業

耕地及未耕地面積　現在滿蒙の可耕地面積は約二千餘萬町歩もあるが、内既に耕作されてゐる土地は約一千百萬町歩で、殘りは未開地として今だに茅草の繁るに任せてある。之等未開地の年々の開墾

は平均約二十萬町歩にして、先づ此の速度で進むとせば未開地を耕作地となし農産品を出すまでには裕に五十年の歳月を要するのであるが、豫定鐵道が敷設せらるゝの曉には開墾の速度は著しく増大するものと思はる。

農作物　滿蒙農作物の主なるものを擧ぐれば左の如くである。

（イ）**大豆**　滿洲産大豆は大別して黄豆、青豆、黒豆となすが、猶二百餘種に細分する事が出來る。最も普通なのは黄豆で、元豆とも稱し含油量多く食用、搾油用何れにもよろしい。最近之が肥料として日本内地の需要を喚起し以來驚くべき數字的發達を來した。將來化學の進歩につれて豆油の需要激增するに於て大豆の價値は益々加はるであらう。滿洲大豆の年産額は約二千八百萬石（四百米噸）と推測されるが、尚毎年增殖を見、擴張の餘地も充分である。今是が消費の内譯を記せば次のやうである。

大豆のまゝ輸出さるゝ數量	一、三一九、〇〇〇米噸
主要油坊消費數量	一、九〇〇、〇〇〇
地方消費量	六一二、〇〇〇
播種用消費數量	一八四、〇〇〇
計	四、〇一五、〇〇〇



大豆出廻りの盛況

大正十二年度南滿三港よりの輸出總額は九十一萬米噸、四千二百萬兩、大正十三年度のそれは八十九萬米噸、四千萬兩にして、尙大正十二年度には東支鐵道により烏蘇里線を以て輸出されたもの四十萬米噸で、結局全滿洲からの輸出總額は約百三十萬米噸(八百九十萬石)に達した、其の内の一半は日本に向けられてゐる。

(ロ) **高粱** 高粱は大別して糯及粳の二とし、粳は更に品種が多い。我が國に於ける米と同じく北支那地方の主食料品であるから、其の作付は最も多く、年産額三千六百萬石と稱せられる。用途は食用



高粱の收穫

の外家畜の飼料、高粱酒の原料となり、更に其の稈は燃料、建築材料、アンペラの製造材料となり、又パルプの原料にも利用される。

大正十三年に於ける南滿三港の輸移出總額は約十三萬米噸、五百五十八萬兩にして其過半は支那諸港へ移出せられて居る。

(ハ) **粟** 粟もなか〳〵品種が多い。高粱と竝んで重要な食料品であり、又黃酒の原料ともなる。藁は牛馬の粗飼料として缺くべからざるものであり、糠は豚の飼料として重寶がられる。大豆と共に隨處に栽培せられ其の年産額は二千五百萬石と註せらる。大正十三年に於ける南滿三港の

輸移出總額は約二十七萬米噸、一千五百六十萬兩に達し朝鮮に輸出せらるゝもの其過半を占めて居る。

(ニ) **玉蜀黍** 包米と通稱する、黄包米、紅包米、老來皺の三種を主とし、主に南滿の南部及北滿の一部に栽培せられ、また重要なる食料品である。北滿では燒酒の原料となり、莖は燃料とし、葉は牛の飼料とする。年産額約一千萬石にして大正十三年の南滿三港の輸移出は六萬八千米噸、二百萬兩、支那への移出を主とする。

(ホ) **小麥** 小麥は叙上の各農産物に亞ぐもので、製粉業は油坊と共に滿蒙に於ける重要工業である。北滿を主産地とし年産額六百五十萬石と稱せられて居る。黑龍江省の開拓と共に將來を期待せられて居るが、然し現在にては殆ど輸出能力を有つて居ない。

(ヘ) **米** 米は支那農民にとつては貴重な食料である。陸稻籾約百萬石、水稻籾約百萬石の生産がある。水稻は本社の農事試驗場成績に徴しても甚だ有望で、殆ど移住鮮人に依つて作付せられ、其の面積は年々急激に増加しつゝある。現在の水田は僅に五萬町歩に過ぎないが、將來の可耕水田面積は五十萬町歩乃至百萬町歩と推測せられてゐる。

此の他普通作物には、小豆、吉豆、黍、蕎麥、燕麥、稗、馬鈴薯等がある。

特用作物 特用作物には大麻(線麻)、莔(青麻)、煙草(於)、胡麻(芝麻)、蓖麻(大麻子)、荏(蘇子)西瓜の種子等がある。線麻及青麻は年産四千萬斤に達し、煙草は吉林省を主とし年約五千萬斤を産するが、其の需要は甚だ多く別に九百萬兩の輸入をなしてゐる。猶新しい農作物としては製糖原料たる甜菜栽培の有望なる事分明し、亞麻の栽培も有望と目せられ、紡績事業の發達に伴ひ、滿洲の南半部には棉の栽培も有利とせられる。關東州から奉天附近迄は果樹の栽培も亦將來あるものであつて、苹

果、梨、葡萄等は近年優良種の普及に伴つて見るべきものが尠くない。

耕作法 滿洲の農法は一見極めて粗放の樣であるが、氣候風土に適應發達した巧妙なものである。耕作には牛、馬、騾等一二頭宛使役して犁丈を用ひ、輥子、耙磱等を以て整理する事は歐米の風と似巧妙に家畜を利用し、人力を節することゝ我國の方法とは大いに異るものがある。肥料は主として家畜糞、人糞を肥土に混積せる土糞であつて普通三年に一回施用し化學肥料は未だ知られて居ない。穀物は穗を刈り採り家畜を利用して脫穀し、市場に出す時は麻袋若くは木綿袋に入れ馬車で搬出するを常とする。精白、製粉等にも家畜を使用する。病蟲害は歲により相當多いが土人は天災と同一視して何等の驅除豫防法を講ずることがない。幸に氣候の自然的驅除がある爲大流行を見ないのである。

經營法 之は自作、小作の外、分益小作法、請負法等に分ち得る。大、中、小農の區別は南北によつて差があるが、大農には百町歩以上を一戶で自作するものがあり、中農は二三十町歩—五十町歩、小農は五六町歩—二十町歩にして二三町歩位の小農も尠くない。猶滿洲には農業勞働者といふ一階級がある。此の多くは山東及直隸方面から農業其他の勞働に從事する爲め出稼ぎに來るもので、一箇年の出稼數は四十萬人內外と稱せられ、其大部分は春來秋歸の勞働者である。

農業施設 農業に對する施設としては支那側に於ては、奉天、吉林、齊々哈爾に農事試驗場が置かれてあるが、本社は公主嶺と熊岳城とに巨費を投じて農事試驗場を設けてゐる。公主嶺試驗場では嘗

迺農作物の試驗の外、甜菜、煙草、亞麻等の新作等の栽培を研究し、傍ら大豆の品種改良には特に努力し同じく畜産科では羊の改良試驗を行つて居る。又熊岳城では、繭蠶、果樹、園藝、林業の試驗をしてゐる。猶得利寺には煙草の試作場を設け、鄭家屯其の他にも小規模の試作場を置いてゐる。之等は皆將來益々滿洲農界の爲めに貢献するものとして期待せられてゐる。

畜産

家畜の種類　滿洲の農家では、牛、馬、驢等の役畜を少くも三四頭有せざるはなく、豚、鷄を飼はざるはない。支那人は家畜を愛すること必ずしも邦人に勝るものではないが、之を馴致同化する技能に於ては邦人の及ぶ處ではない。蒙古人に至つては元來遊牧の民であるから家畜は其の生活の唯一の資料である。卽ち彼等は衣食住の爲め、牛、馬、羊等を牧し、其未開地方にあるものは今も尙牧草を追ふて移動するのである。今滿蒙の家畜につき簡單に述べること、

(イ)　馬　滿蒙の地は良駿を出す日然の產馬地である、其の產馬は全部蒙古系であつて、體高四尺二寸五分、體長四尺六寸、體重七十貫を平均とする。體軀矮小であるが各部の均整良好である。體質は極めて强健であつて粗飼粗管理に堪へ持久力に富み、普通側對步をするものが乘用に、其の他のものが輓用に使はれて居る。本社最近の調査によれば、滿蒙に於ける馬匹の頭數は約二百五十萬頭で、奉天省七十五萬頭、吉林省五十萬頭、黑龍江省五十一萬頭、東部內蒙古八十一萬頭である。

(ロ)　騾　騾は牝馬と牡驢の交配によつて產する雜種で、歐洲及支那に於ては古くより知られてゐたが、我國には

全く之を見ない。騾の體軀は交配種の大小によつて異るが、概ね馬よりも大形である。夫れは騾の蕃殖に用ゐる驢が大驢と稱するもので、四尺五六寸から五尺餘の體高を持つて居るからである。騾は耕作運搬に使用せられ、堅忍よく重役に服し、役用期間長く、粗飼少食加之粗管理に堪へ、價額も馬より高い。其の頭數は奉天省二十萬頭、吉林省二十三萬頭、黑龍江省十二萬頭、東部內蒙古七萬頭、計六十二萬頭を註せられて居る。

（ハ）驢　普通に飼養するは小驢である。體高三尺位であるが、體質强健で粗食に堪へ、力量、體軀に比して割合に大なるが爲、農耕用のみならず家內勞働及駄用として適當である。滿洲に五十萬頭、蒙古に十萬頭と推測せられる。

（ニ）牛　牛は朝鮮牛系統、山東牛系統、滿洲牛系統及蒙古牛系統であるが、前二者は其の數尠く大部分は蒙古牛と滿洲牛である。支那人は力役の爲に、蒙古人は乳を取る爲に飼養し、肉は副產物として居る。滿蒙の牛は後軀の發育不良であつて各種經濟的能力は劣るけれども、堅忍從順にして粗飼粗管理に堪へ、力役用として必要である。體量は最大百四十貫、普通八十貫位で從つて肉量が少く、且つ肉味は朝鮮牛、山東牛に及ばず。乳量も甚尠少であるから馬と共に將來改良の餘地がある。牛畜頭數は奉天省五十八萬頭、吉林省九萬頭、黑龍江省二十一萬頭、東部內蒙古百十二萬頭、計二百萬頭と報告せられて居る。東蒙には牛皮の產出も尠くないが、皮質の惡いのと牛蠅の寄生の爲に主要部に多數孔損があるのを缺點とする。

（ホ）駱駝　駱駝は蒙古に產するのみである。雙峰種で體五尺五寸餘を普通とする。寒氣に抗する力强く力役、騎乘に適するが爲に蒙古に於ける重要なる旅行機關である。頭數約四千。

（ヘ）緬羊及山羊　共に蒙古種であつて、從來は肉用及毛皮用として飼育せられ、羊毛及絨毛は副產物として取り扱はれて居た。緬羊の體量は牝が七八貫から十貫、牡が最大十五貫位で、養分を貯藏する脂肪尾を持つて居るのが特徵である。山羊は緬羊より小さい。產毛量は甚だ少く、緬羊の毛量は一頭三封度を超えず、毛質亦不良

であるから從來我國では顧みる者なく、大部分米國へ輸出せられて居た。山羊の絨毛は品質良好であるが、產毛量は一封度餘にすぎぬ。何れも近年我國毛織工業の發達に從つて少からざる日本向輸出を見るに至つた。牧羊は南滿洲の支那人は山羊を本位とし、蒙古に於ける蒙古人は緬羊を本位とするが、共に皆多少の混牧をなして居る。支那人は副業的に飼育するのみであるが、家畜を以て生活資料の供給者とし唯一の財產としてゐる蒙古人にとつては其重要なるものである。羊毛及絨毛の產額より其の頭數を推測するに奉天省四十萬頭、吉林省十萬



公主嶺農事試驗場の牧羊

（ト）

頭、黑龍江省六萬頭、東蒙二百萬頭、計二百五十六萬頭である。近年羊毛輸出の途開けてより保守的な蒙古人及支那人の間にも緬羊改良の經濟的に有利なるを感ずる者あるに至つた。

豚　豚肉は支那人の最も重用する處で、農家は肥料と畜產收入を目的とし、每戶必ず數頭多きは十數頭を養つて子豚の生產をなし、其糞は肥料とする。頭數甚だ多く奉天省三百五十五萬頭、吉林省百二十五萬頭、黑龍江省四十九萬頭、東部內蒙古百萬頭、計六百二十九萬頭と稱せられる。滿洲豚には大型種と云ふ二箇年

牛で三十五貫位になるものと、小型種と云ふ一箇年で十八貫位になるものと、中型種と云ふ中間のものと三種ある。何れも頗る多産種であつて一腹十頭乃至二十頭を産む。其の鬃毛は粗剛で長く刷子用として優良であつて大部分大阪へ輸出せられる。

家畜管理法 滿洲では役牛馬騾は粗末なる小屋又は庭内露天に繫ぎ、飼料は一般に粟稈を主とし、包米稈、麥稈野草、豆稈莢を與へ、濃厚飼料として高粱、豆粕、麬等を混へる。蒙古人は元より厩舍を造らず殆ど放牧のみである。支那人も縱し厩舍を造るも特に褥草を與ふることがない。豚は農家では晝間は放牧し夜は豚舍に入れ粟糠を煮て朝夕與へる。羊は滿洲では晝間は放牧し夜は棚又は小屋に入れる。冬は貯へた野草を與ふることもあるが多くは冬も放牧する。蒙古人の牧羊は夏は旱魃を患へて牧草を追ひ低地に移り、冬は積雪を恐れ胡砂吹く風なき高丘を覓めて其の居を移すのである。其の皮を以て衣とし其の乳肉を以て食となし其の毛氈を以て屋を包む等彼等の衣食住は一に羊群に依らねばならぬのである。

畜產物輸出額 以上の如く各種の家畜に富む滿蒙は隨つてまた多くの畜產品並に其の加工品を出すが、技術幼稚にして總て家內工業の程度にすぎない。此方面の製造工業は將來十分改良發達の餘地がある。

南滿三港輸出額（大正十三年）

豚毛	五九二、四七九兩	獸骨	三三二、四七八兩
羊毛	六一五、一四五	家畜	九〇、二一七
其他毛	一八〇、二八〇	家禽	四、〇七五
皮革	一、〇七二、七〇三	獸脂	一二、八九七
角牙	、二一〇		

林業

森林の分布　滿蒙の森林としては松花江、牡丹江及豆滿江上流地一帶の地域竝に鴨綠江及渾河上流の一圓地、東支鐵道東部線の海林地方及吉林省三姓地方のものを其の尤とする。蒙古では唯興安嶺山脈中に見るべき森林があるけれども未だ全部の調査はなし遂げられて居ない。

主要樹種及混淆歩合　滿蒙の樹種は既に知られたもの約三百餘種であるが、其の内有用樹種として多く見らるゝものは二十種内外である。就中針葉樹ではテウセンマツ、テウセンモミ、テウセンタウヒ、エゾマツ、ダフリカ、カラマツ、テウセンカラマツ、タウシラベ等、濶葉樹ではカウライミゾナラ、モンゴリカシハ、アムールシナノキ、マンシユウシナノキ、オニメグスリ、マンシユウカヘデ、ヤチダモ、イタヤカヘデ、ハルニレ、キハダ、マンシユウクルミ、テウセンヤマナラシ、ドロノキ、シラカンバ等である。是等の混淆歩合は、元來が天然林であるから勿論一定しないが、針葉樹四割、

濶葉樹六割と見て大差がない。各樹種中ではテウセンマツが針葉樹中の過半を占め、モミタウヒ類が三割、其の他は鮮少である。濶葉樹ではナラ、カシハ類、シナノキ類、ハルニレ、ヤチタモ、ヤマナラシ、ドロノキ等大宗をなして約七割を占め、クルミ、キハダ等も尠くない。黒龍江省の西部大興安嶺の森林はカラマツ類、オウシウアカマツ及シラカンバ類を主とし、此の他優良樹種は殆どない。

面積及蓄積　充分なる調査がないので不明であるが、各方面の調査を綜合するときは、滿洲に於ける主要森林面積と其の蓄積は凡そ左の如くである。

（イ）鴨綠江流域右岸竝渾河流域は六十六萬八千町歩、三億四千七百六十五萬五千石で、一町歩平均五百二十石。

（ロ）松花江、牡丹江及豆滿江等上流々域地方は本社調査の結果、毎町蓄積三百石以下の散生地を除き、森林面積百九十六萬四千町歩、材積十三億一千五百五十一萬九千石、一町歩平均六百七十石である。



興安嶺の森林

(ハ) 東支鐵道東部線沿線は二百四十三萬五千町歩、九億二千四百六十九萬六千石と報告せられ、卽ち一町步平均三百八十石である。

(ニ) 三姓地方は約五百二十九萬一千町步、材積二十六億一千八百六十萬二千石、一町步四百九十五石である。

(ホ) 興安嶺の森林は主として東支鐵道西部沿線にあるものゝ代表であつて、其の調査された範圍では、約二百四十一萬二千町步、三億六千萬石である。是は單に日露支人が伐採權を獲得した面積であつて、其の半分强は無立木地なるにより、事實森林面積に對する一町步當蓄積は五百石內外である。

木材事業 現今滿蒙の木材事業を約言すれば針葉樹の伐採利用であつて、建築材料として天津方面に輸送せられるものが多いが、枕木、電柱、棺材として地方的消費量も亦尠くない。濶葉樹は枕木、杭木、薪炭として利用する外未だ多くの工藝的利用を見ない。木材市場は吉林、安東の產出市場が第一で、哈爾賓、長春、奉天、大連等の消費市場之に亞ぐ。吉林及安東は古來南滿に於ける木材の集散地であつて、日支人が各種の組織の下に伐木事業を營んで來たが、最近各個分立の弊を悟り、合同事業を畫するに至つた。運搬法は吉林及鴨綠江材は水運により、北滿材は陸運である。北滿材は主として二十一尺物、吉林材は皮付丸太の二十四尺物、鴨綠江材は丸太の兩側面を削つた十六尺乃至二十四尺物の流送材である。

木材業者 事業の性質上採木を營むものは形式的乃至實質的に日支合辦のものが多く、安東の鴨綠

江採木公司、長春の豐材公司、吉林の共榮起業株式會社、哈爾賓の札免採木公司、中東海林實業公司、慶雲製材公司等は其の主なるものである、其の他木材關係會社に至つては、鴨綠江製材無限公司、鴨綠江製紙會社、鮮滿杭木株式會社、三井物產等優に數十を算し、個人經營のものも尠くない。

森林行政　滿蒙の森林行政は、林務局があつて種々の法令規則を



吉林松花江の運材

發布して居るが、未だ殆ど林政の實なく、山火、濫伐相踵ぎ、森林の荒廢は年一年と烈しくなる。關東州内は別として南滿鐵道沿線に於ては、夙に荒廢して山に一木をも留めない狀態は、甚だ遺憾なことであつて、是が爲に苦しむものは單に支那人のみではない。唯最近支那官民に於て所々に造林を實行するものがあると聞く。又吾が滿鐵に於ても是等支那人に對しては無償で苗木を頒與する等大に滿蒙の將來の爲

に圖つて居る。

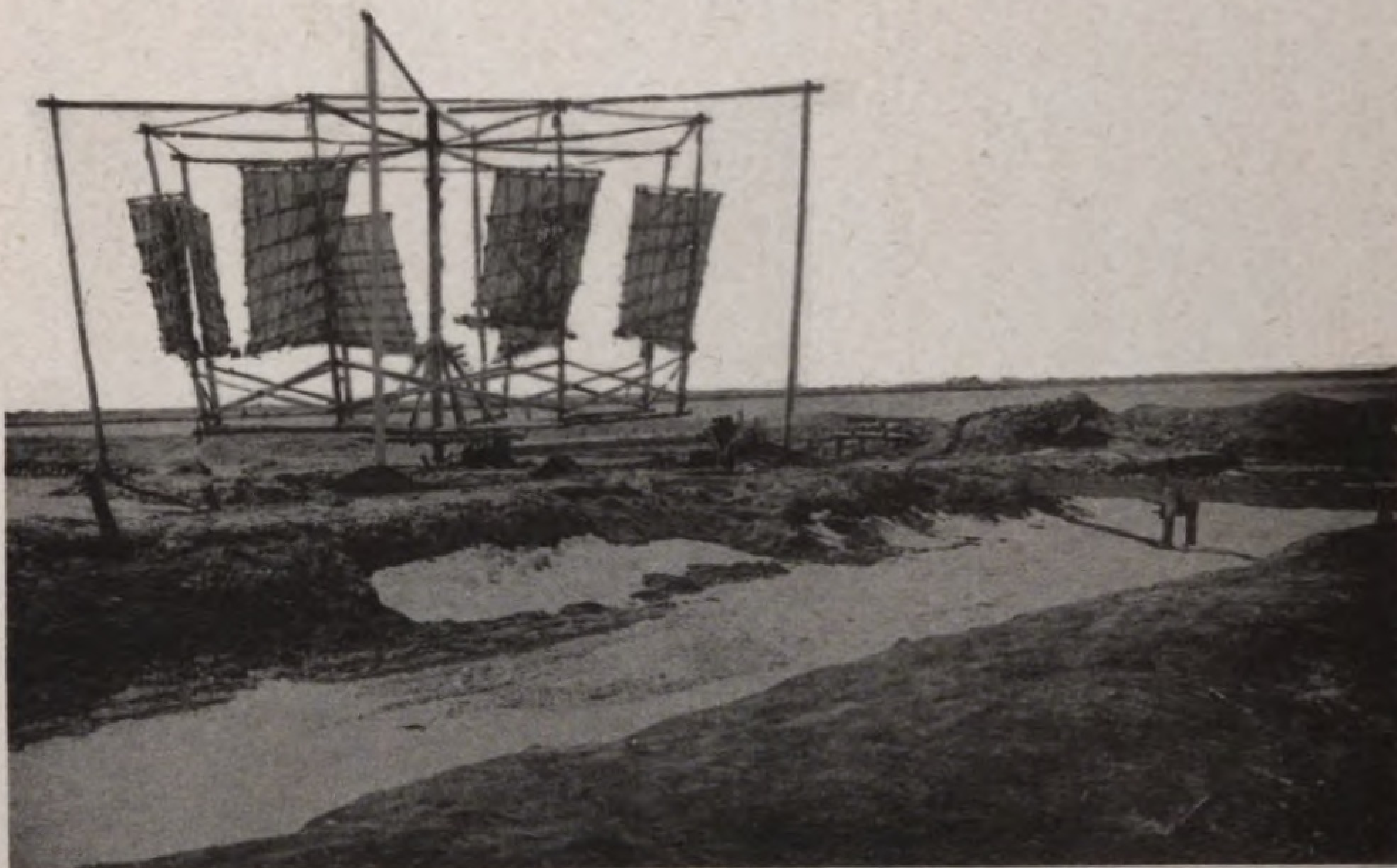
水産

滿洲の魚族　南滿洲海岸線の延長は約八百浬で甚だ短いが、黄海及渤海は各種の魚族に富み、其の沿岸の漁業は盛大なるものがある。關東州沿岸に於ける重要魚貝、海獸類を記せば左の如くである。

タヒ、タラ、タチウヲ、グチ、エイ、サワラ、ヒラメ、カレイ、スズキ、ボラ、サバ、フカ、ニベ、イワシ、ヒラス、アナゴ、イシモチ、コノシロ、カナガシラ、ホウボウ、サヨリ、メバル、アブラメ、コチ、ヒラ、イカ、タコ、ナマコ、カキ、アワビ、エビ、カニ、イタヤガイ、クヂラ、アザラシ。

關東州内漁業者　關東州の漁業者は支那人と日本人であるが、日本人は愛媛、熊本、香川、大分、廣島、岡山方面よりの出稼者で、春來り秋に入つて去るが、目下漁船二百數十隻、人員千五百名を算する。支那漁夫は一萬四千、主なる漁獲は日本人は鯛、支那漁夫は大口魚、黄花魚、大刀魚で、大正十二年中の水揚高は二百八十八萬三千七百三十七貫、百六十四萬三千八百三圓である。鯨は殆ど東洋捕鯨會社其の他邦人の獨占に係り、凡て馬關方面へ輸送せられる。アザラシは毎年解氷期流氷の上で之を捕獲する。北黄海、北渤海孰れにも獲られ、年七八百頭多きは一千頭餘にも及ぶ。

水產製造業　關東州内にのみ行はれ、タラ、グチ、サバ、ニベ、カレイ等の鹽藏、ナマコ、アワ



普蘭店鹽田の風車

ビ、貝柱、クラゲ等の加工である。大正十二年に於ける其の産額は八十九萬九千五百十四貫、六十二萬六千三百九十六圓に上つて居る。

内地淡水漁業　滿洲内地河川、沼湖も亦淡水魚を豊富に産する。鴨綠江では安東縣地方、松花江では上は烏拉街附近、降りて三家溝附近、下は三姓地方最も盛で、呼倫池は近年開始の新漁業地である。滿洲の淡水魚族は其の種類多く、主なるものとしては鯉族、鮒族、鮭族、鱒、鯰、鱸、鯇(ヤマメ)、鱮(グナゴ)、鰉(ヒゲヒ)、鱘(カワフカ)等である。夏季は地方の市場に搬出せられ、冬季には凍結の儘遠く西比利亞等の内地にも輸送せられる。其の他松花江の本支流は古來眞珠の産地として聞へ今尚ほ多數の産出を見る。

鹽業　黄海及渤海は雨少く蒸發盛なる爲海水の鹽分濃く鹽業に適する。營口、蓋平、復州の沿岸には支那政府官營及民營の鹽田連り天日製鹽をなして居る。而

して鹽は支那政府の專賣品で、我專賣法に倣ひ各地に送り一定價格に賣下げて居る。又滿洲以外の鹽の輸入を許さず、且つ滿洲產鹽は滿洲及熱河、蒙古の地以外に搬出を許さない。我租借地關東州も鹽業盛なるものがある。州内に於ける產額は年によつて異同あるが、年產額平均約三億斤である。產鹽地は貔子窩、雙島灣、普蘭店等にして大正十二年現在面積四千八百餘町歩であるが、尙優良鹽田造成見込地だけにても約五千町歩ある。大日本鹽業會社、東洋拓殖會社等之が開發に努めつゝある。蓋し本邦及朝鮮に於ける需要狀態より見て將來益々有望であらう。

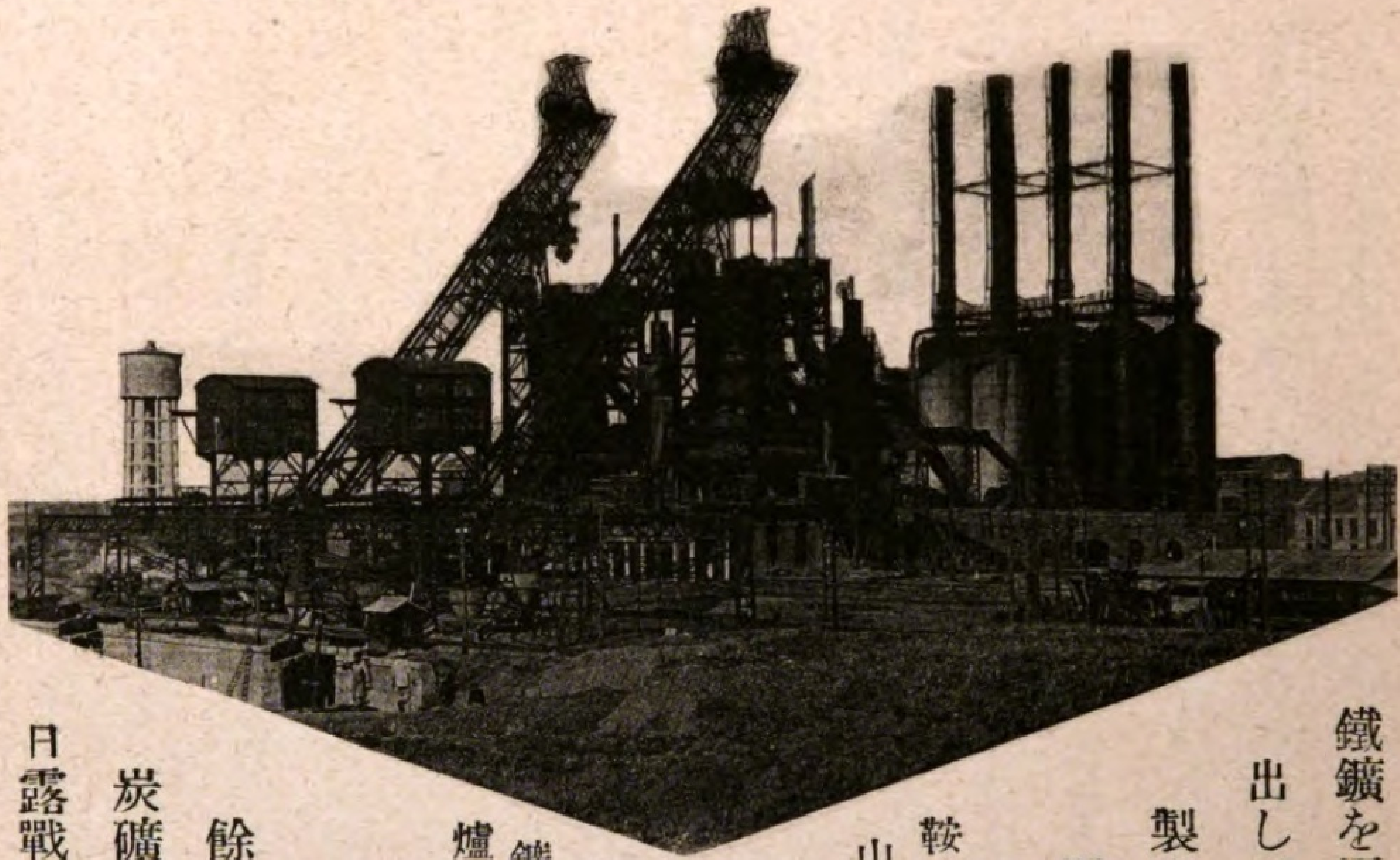
鑛　業

滿蒙の鑛物　滿蒙鑛物の現出狀態は矢張大陸式であつて種類は左程多くはないが、一度發見されると大規模のものが多い。金屬鑛物では金鑛及鐵鑛が主要なるもので、非金屬鑛物では石炭、菱苦土(マグネサイト)鑛、苦灰石(ドロマイト)、滑石、石綿、重晶石、長石、耐火粘土及び天然曹達等がある。交通の便開くると共に最も將來を有するものは石炭にして稀少金屬等の存在も亦重要視せられて居る。

金　滿蒙の金は砂金が主で金鑛脈より來るものは甚だ少い。產金額は不明であるが、黑龍江省のみにても年二千萬圓に達すと稱せられる。

鐵　鐵の埋藏量は莫大なるものである。工業的に製鐵事業を經營してゐるのは本溪湖煤鐵公司と本社鞍山製鐵所の二あるのみである。前者は日支合辦の製鐵所であつて本溪湖の石灰石及石炭、廟兒溝の

鐵鑛を原料とし、大正四年熔鑛爐の火入を行ひ一日二百噸の銑鐵を製出し、後大正十年九月出銑鐵を休止したが、今日ではまた低燐銑の製出の爲め作業を開始しつゝある。鞍山製鐵所は這般歐洲戰亂に鑑み鐵材自給の急務を認め本社が之を創立したもので、其の鑛區は同製鐵所を中心とし、北東より西南に向ひ畫ける約半哩の半圓形内に點在し原料鐵鑛は豐富である。骸炭原料としては撫順炭、本溪湖炭を併用して居る。本製鐵所は將來年百萬噸の銑鐵若くは八十萬噸の鋼鐵を供給せんとする豫定にて已に第一期計畫として二基の熔鑛爐完成した。本鑛に對する貧鑛處理方法の決定と共に大規模の操業が計畫中である。



鞍山製鐵所熔鑛爐

石炭　石炭は滿蒙鑛產中最重要地位を占め、炭礦數五十有餘、推定埋藏量十五億噸と稱せられ、世界的に知られて居る撫順炭礦の外、本溪湖、煙臺、新邱及大疙瘩炭坑等がある。撫順炭礦は日露戰爭の結果我有に歸したもので、奉天の東約十里、礦區二千萬

坪、炭層の厚さは七十八尺より四百八十餘尺あり、平均百三十尺乃至百七十五尺に達し、實に世界無比と稱せられる。埋藏炭量十餘億噸、最新式の採掘法により其八割以上を稼行出炭し得る設備を整へ、目下一日一萬四五千噸を出して居る。煙臺炭礦亦本社の所有で、可採炭量四千萬噸、目下一日五百噸を出しつゝある。本溪湖炭は火力強く製鐵用骸炭製造に最もよく適する半無煙炭で、埋藏炭量二億噸、炭層の厚さ三尺乃至九尺、一日出炭量千五百噸である。新邱炭礦は夙に其の名を知られて居るが兩三年漸く開坑するに至つた。運炭鐵道の出來ぬ限り重きを爲すに至らないが、相當なる埋藏量を有して居る。其の他炭礦は各處に在るが、何れも支那人の手掘法によつて地方的需要に應ずるのみである。

苦土鑛　滿洲には石灰岩多く、其の石灰岩は普通多少の苦土を含有して居る。大石橋驛の附近には菱苦土鑛の



撫順炭礦露天掘

稀有の大鑛區が發見せられて耐火煉瓦用として好適の爲、八幡製鐵所及鞍山製鐵所等に需要せられ、又ソーレルセメント及リグノイド等の床敷材料が製造せられて居る。

天然曹達 東部内蒙古は天然曹達の產地である。低濕の草原沿湖及び其の附近一帶は春秋の乾燥期に至り一面に降霜の如く發生し壯觀を呈する。採集加工の盛なのは哲里木盟で有名な大布蘇と云ふ曹達湖、玻璃山甸城子と稱する西遼河上流沿岸の曹達平原を始め數多の產地がある。

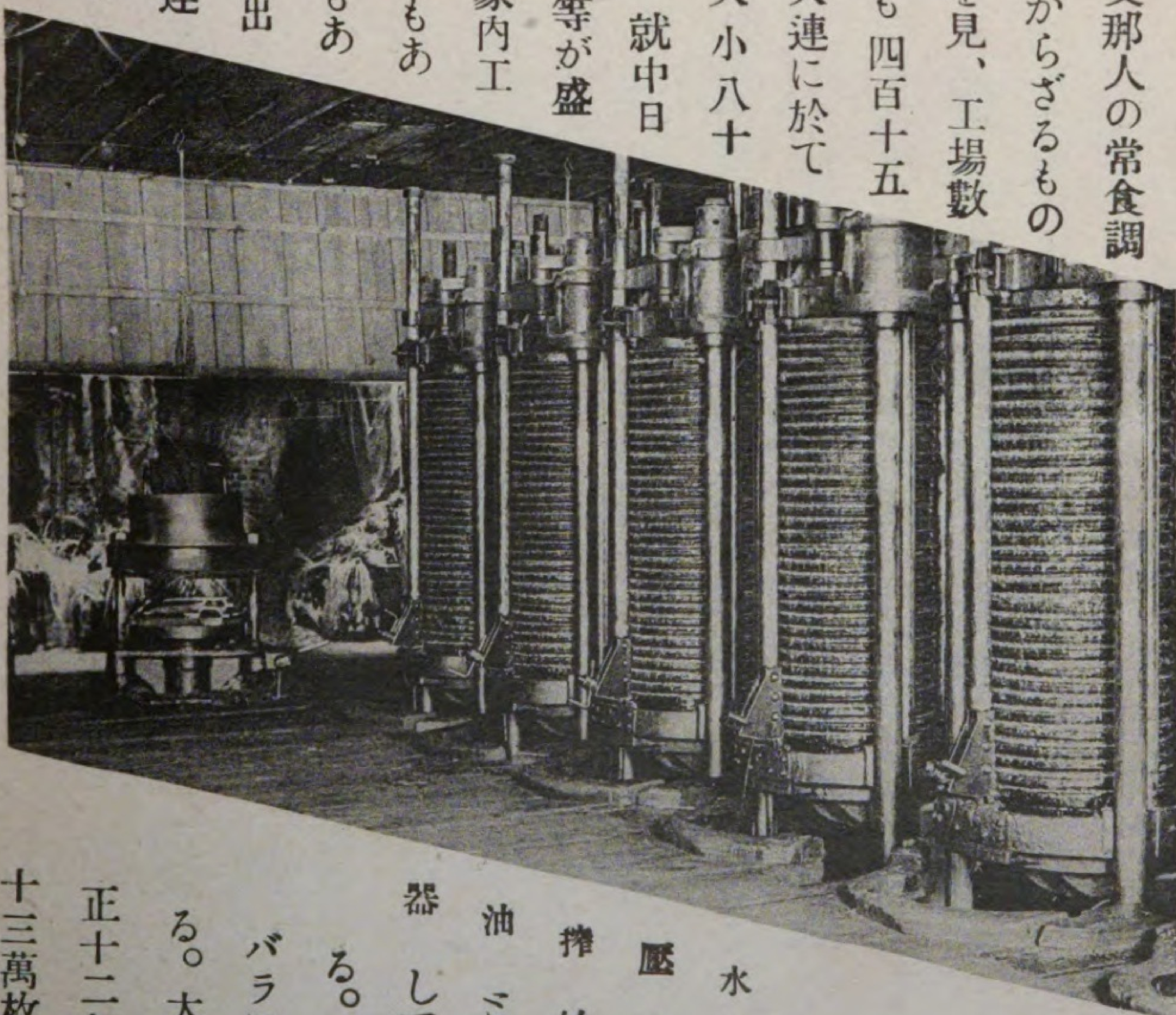
日支協約と鑛山 大正四年日支協約に依りて邦人に試掘又は採掘を許すべく約せし九鑛山中炭礦としては牛心臺、田什付溝、杉松崗(輝南縣)、鐵廠、暖池塘、缸窑、杉松崗(和龍縣)、鐵鑛としては鞍山站一帶、金鑛としては夾皮溝である。

工業

滿蒙の工業 滿洲は農產物、畜產物、林產物、鑛產物等の工業原料及燃料に富み、勞力亦低廉なるに拘らず、從來支那人の技能幼稚なる爲め、搾油、製粉、酒造業(卽滿洲の三大工業)の外、窯業、繰絲、染職及鞣皮等を除けば他に見るべきものなく、日常の需要品さへ多くは海外よりの輸入に俟つて居たのである。處が輓近邦人の進展と共に豐富なる原料及燃料と低廉なる勞力とを利用して各種の工業勃興し、漸く工業的植民地としての光明を認むるに至つた。

油 坊 滿洲工業中第一に位するものは油坊である。大豆を壓搾して豆油及豆粕を製出する工場の謂

であつて、豆油は支那人の常食調理用として缺く可からざるものなるが爲到る處之を見、工場數は鐵道沿線のみでも四百十五を算する。油坊は大連に於て最もよく發達し、大小八十五工場を有するが、就中日淸製油、三泰油坊等が盛である。奥地には家内工業的幼稚なる油坊もあるが大規模のものもある。又ベンヂン抽出法によるものに大連の鈴木油坊がある。油を搾つた圓板狀



水壓搾油器

の粕は普通四十六斤を定量とし、油は粕一枚に付約五斤の割合で採れる。大正十二年中日本への豆粕輸出額は南滿より四千四百五十六萬枚、北滿よりの露領經由約八百七十五萬枚を加へると合計五千五百萬枚、金額として八千九百八十四萬圓である。ベンヂン抽出法による粕はバラになつて居て其儘使用し得る。大連及滿鐵沿線各地油坊の大正十二年度産額は豆粕約六千七百十三萬枚、時價一億一千四百萬圓、

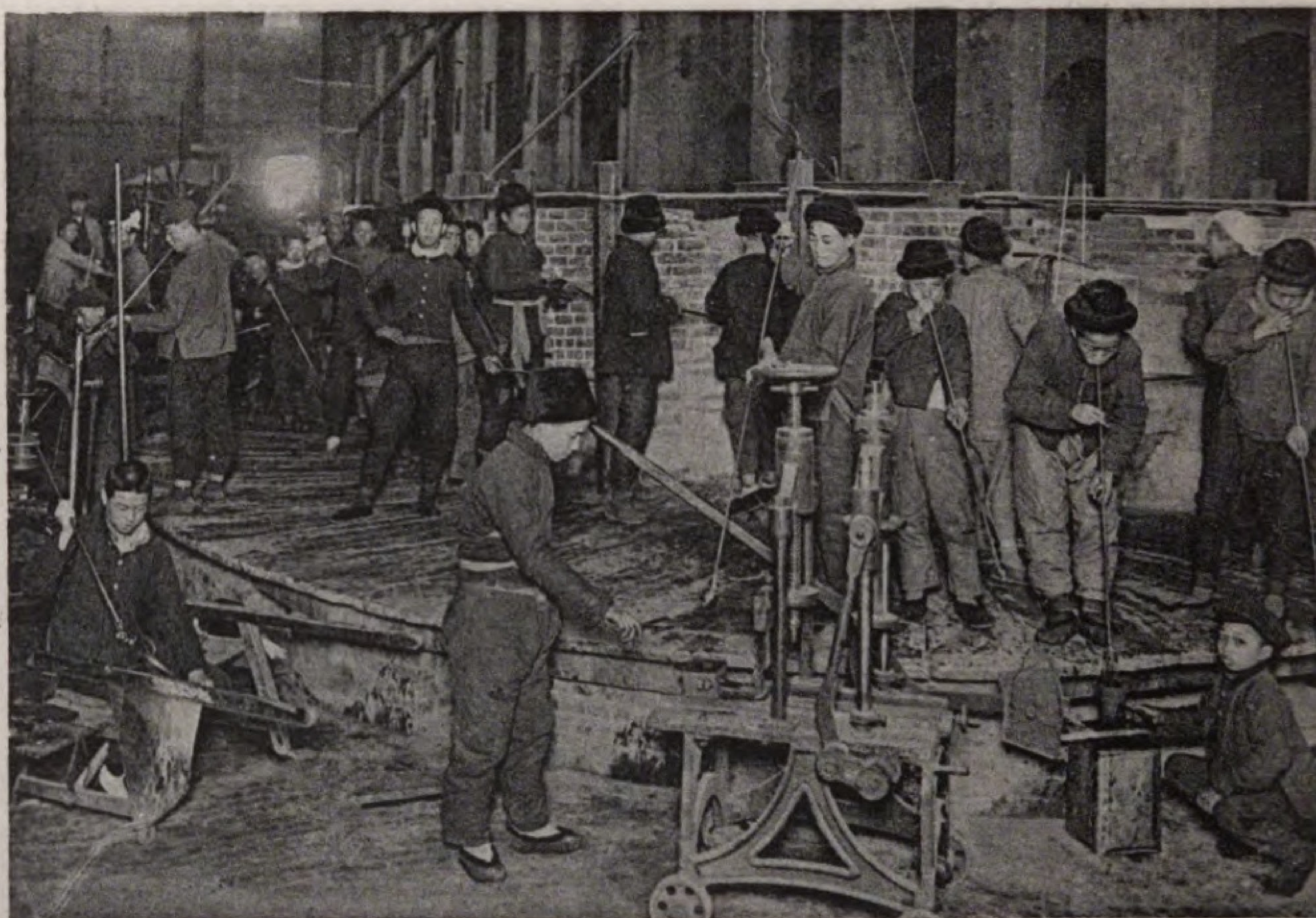
豆油約三億萬斤、時價四千五百萬圓に達する。豆油は主として歐洲諸國に於ける人造バター、塗料、石鹼等の原料として需要せられ、粕は肥料として使用せられ日本を最大輸出先とする。

製粉業 麥粉は支那人の日常主食料であるが故に小麥の栽培及製粉は古より行はれ、就中原料小麥が南滿に尠き爲哈爾賓を中心として北滿に發達した。其製法は舊式土法に依るものと機械力に依るものとの二種ある。滿洲に於ける製粉業は一九〇二年以來北滿に發達し、漸次增加して其餘波南滿地方に及び殊に歐洲大戰後外國品の輸入杜絕に伴ひ異常なる活況を示し、南北滿洲の機械製粉工場は邦人の經營になる滿洲製粉を初めとし、哈爾賓、長春、鐵嶺、奉天、大連等の各地に總計四十餘（內南滿十一）を算し、一箇年約一千五百萬袋の生產能力を有したのであつた。然し大正十二年度は北滿小麥の不作にて原料の買付に苦しみ、一方多量の米國品の侵入するあり、全滿洲の製粉工業は大打擊を受けたが此恢復は至難ではあるまい。次に滿洲には澱粉の原料たる綠豆（吉豆）、高粱、包米等が豐富であるが其の製造は從來甚だ振はず、僅に支那人の間に支那素麵（粉條子）製造者があるのみであつた。近年南支及南洋に於ける粉條子の需要の增加に鑑み、邦人の手によつて二三の澱粉會社が設けられた。猶間島地方に馬鈴薯澱粉の製造を見ると云ふ。

釀造業 油坊、製粉業と共に滿洲三大在來工業と稱すべきは釀造業である。在滿支那人の需要する酒は主として高粱酒、黃酒の二種であるが、大部分は高粱酒であつて恰も我國燒酎に似てゐる。該釀

造所卽燒鍋は、吉林省、奉天省、黑龍江省、熱河特別區域內の各地に散在し、其の年產額二千萬圓こ推測せられ、毎年支那本部へ輸出せらるゝ額も少くない。輓近邦人の需要に應ぜんがため、淸酒、味噌、醬油等の釀造を企てる者多く、將來支那人の需要を喚起し得るものこ觀察せられて居る。尙本社中央試驗所の發見に係る粕麴利用の改良醱酵法及高粱酒粕よりの乳酸石灰の製出法がある。

纖維工業　近來本邦企業家の眼を惹きつゝあるものに柞蠶製絲業がある。滿洲の柞蠶飼育は山東地方、遼東半島到る處に之を見るべく、南滿諸港よりの柞蠶絲輸出金額は大正十二年一千五百五十四萬兩、大正十三年八百三十三萬兩に達した。而して邦人の之を經營するものは安東の興東公司、富士瓦斯紡績安東工場(柞蠶屑絲紡績)の一二に止り、殆ご全部支那人の家內工業によつてゐる。繭は年々芝罘方面へ多量に輸出せられ、大正十二年度二百三十四萬九千兩、大正十三年度一百二十六萬兩輸出を見た。次に滿洲に於ける麻類の產額五千萬斤の多きに上るのこ、穀類、大豆等の包裝に用ゐらるる麻袋の需要多きに鑑み、大連に滿洲製麻、奉天に奉天製麻の二會社が設けられた。從來麻袋の大部分が印度より神戶、支那諸港、香港等を經由して輸出せられ、大正十年中大連輸入額四千萬枚に達した。が大正十一年は一千四百萬枚、大正十二年には二千萬枚に激減してゐる。更に最近紡績が勃興の氣運にあることは著しい事實であつて、日本側には遼陽の滿洲紡績株式會社、金州の內外棉花分工場を主こし福島紡績其他の計畫もあり、支那側では奉天に奉天紡紗廠を設立した。これは滿洲が綿絲布の大



硝子工場の坩堝

需要地にして南滿三港よりの年輸移入額は最近年平均四千萬兩に上り、總輸移入額の二割五分内外を占むる狀態にあること、諸工業條件が内地に比し有利なるに依るもので、從て其將來も有望とせらる。尙滿蒙産羊毛を原料とする目的で滿蒙毛織會社が奉天に設立されたことは後述の如くである。次に北滿及鴨綠江上流に豐富なる木材を以てする製紙業が有望視せられてゐる。

窯業　次に滿洲に於て發達し又は發達せんとするものの一は窯業である。滿洲の地質は良く斯業に適する。大連に大連窯業、大陸窯業、東亞煉瓦等ある外、營口、鞍山、開原、長春、安東、遼陽、旅順等に各窯業會社あり。普通煉瓦及耐火煉瓦を製出し、其の他支那人の小規模のものは枚擧に遑なき程である。セメント原料たる石灰岩の多いことも前述の如くであるが、其工場

は大連市外周水子の小野田セメントを始め數工場あり、年輸出額約二十五萬樽に達する。硝子の原料たる硅岩も亦多く、大連昌光旭株式會社を主とし沿線にも小規模の工場がある。猶戰時中鐵工業の勃興に伴つて坩堝會社の出現を見た。而して陶業にありては大正九年十月以降大華窯業公司が本社窯業工場陶器工場を讓り受けて經營し居る外、支那側では吉林省烏拉街が古來有名な陶業地である。

其他化學工業 化學工業は燃料たる石炭とモンド瓦斯利用による電力との低廉なる關係上撫順に發達すべき運命を有し、現に同地に本社經營のモンド瓦斯發電所の附屬硫酸工場にては製造の硫酸を作用せしめ硫安を盛んに製造しつゝある。其の他大連にはバリウム工業、カリウム工業、大豆蛋白を原料とするソーライト製造工業等があり、安東には滿洲礦山藥株式會社等がある。たゞ豐富低廉なる關東州產鹽を利用しての曹達工業が屢々調査研究を重ねられながら、今尙實現を見ないのは遺憾である。油脂工業としては大連油脂工業株式會社があり、又優良ペイントを製する滿洲ペイント株式會社もある。其の他大連には滿洲石鹼會社があり、主要各地に存在する小工場と共に滿洲產豆油、牛脂等を利用して石鹼或は洋蠟燭の製造に從事してゐる。更に燐寸工業は長春の日清燐寸、吉林、長春、奉天等に工場ある吉林燐寸の二邦人會社は支那側多數の小會社と共に一箇年二十六萬函内外即ち滿洲需要額の三分の二の產出を見てゐる。

食料品工業 滿洲では南滿北部以北の氣候風土が甜菜の栽培に適するところから砂糖の製造を目的

こして夙に露人の阿什河工場及支那人の呼蘭工場が設けられ、近來奉天にも南滿洲製糖株式會社が邦人によつて創立せられた。南滿洲製糖會社は現在十月より二月迄甜菜を處理し、餘は輸入蔗糖を精製して居る。製糖こ相竝んで有望なるものは煙草製造業である。滿洲にも年約五千萬斤の煙草の產出があるが、猶年々一千八百萬圓の製造煙草及原料煙草を米國、日本、朝鮮、南方支那より輸入しつゝある情況である。英米煙草會社のトラストは東洋に於ける煙草界の覇を握るものであるが、滿洲に在ては營口に工場を有する東亞煙草會社が之こ拮抗して邦人の爲に氣を吐いて居る。其の他奉天、大連に二三の煙草會社がある。因に本社は公主嶺及得利寺に於て支那種、日本種等の煙草の試驗を行つてゐる。最近肉類加工業が注目せられつゝある外、食料品工業こしては清涼飲料水製造、製氷業等が相當の成績を擧げつゝある。

畜產品工業 滿洲は畜產物の豐かなる割合に畜產工業は不振にて支那人蒙古人の土式製革及製絨等の外は近年奉天に滿蒙毛織、大連に滿蒙殖產等の諸會社が出來、漸く此の天惠を利用して毛織物、骨粉、肥料等を製造せんこする氣運に向ひ來つたに過ぎぬ。而して從來皮革、牛骨、羊毛等は多く原料の儘輸出され、皮革の年產額二百萬圓こ稱せられてゐる。尙最近肉類加工業が注目されつゝあるこごは注意すべきである。

製鐵及鐵工業 製鐵業は本社鞍山製鐵所及本溪湖煤鐵公司の二つであるが、鑛業の部に略說したか

ら茲に重ねて述べない。鐵工業には本社沙河口工場及遼陽分工場が其の尤なるもので、鐵道、車體、車輛其の他各種器械の工作、修理を行ふ。就中沙河口工場の規模は頗る擴大にして東洋有數のものである。又大連、旅順には滿洲船渠會社があつて船舶の修理及小汽艇の建造をなしてゐる外、大連機械製作所、滿洲器械工業、東亞板金工業の諸工場があり、猶旅順鐵工業、安東鐵工業等の諸會社は夫々地方の需要に應じて居る。

電氣瓦斯事業 電氣事業は水力の利用すべきものが無い爲全部火力發電によつて居る。本社は大連、長春、奉天、安東、撫順、鞍山に發電所を有し電燈電力を供給し、大連、撫順に於ては電氣鐵道をも經營しつゝあるが、之は滿鐵より分離し新會社の經營に移る計畫がある。又瓦房店、大石橋、四平街、公主嶺等の各電燈會社は本社之を後援し居り、同じく出資關係ある營口水道電氣會社は水道電氣の外電話事業をも營む。哈爾賓の北滿電氣會社は露人より買收したもので、開原なる滿洲電氣、范家屯電燈會社亦邦人の經營するところである。日支合辦事業としては遼陽及鐵嶺の兩電燈局を擧ぐべく、吉林電燈廠、哈爾賓傅家甸電燈公司、齊々哈爾電燈公司等は支那側の經營に屬する。電化工業としては高速度鋼の製造を目的とする日支合辦大華電氣冶金公司が大連にある。瓦斯事業は最近滿鐵より分離した滿洲瓦斯株式會社によつて營まれ、大連、鞍山、奉天、安東、長春にその供給をなしてゐる。撫順に於ける瓦斯の供給は滿鐵によつて行はれて居る。

以上の外邦人の工業として、印刷、染色、製布、杞柳加工等を擧げ得る。

四、商　業

貿易　滿洲が外國貿易の爲に開放せられたのは一八六二年營口を通商港として開放せるに始り、其後露國の東方經營が實現せられ、大連を自由港とし哈爾賓、大連間の鐵道を敷くに至つて營口は昔日の勢力を失墜し、我國が露國に代つて關東州を租借するや鋭意大連港の修築を計れる結果、滿洲の物資は翕然として大連に集るに至つた。爾來安奉線の改築、鴨綠江の架橋竣成と共に安東が著々として發達して來た。而して本社鐵道附屬地は對內市場として物資の集散を司り、就中奉天、長春及東支線の哈爾賓は將來益々發達すべき運命を有して居る。大連、安東開港當初の一九〇七年に於ける南滿諸港の合計貿易額は四四、七七八、七一八兩に過ぎなかつたが、其後の發達經過を見るに一九一七年二四四、三四五、一七四兩、一九二四年三九五、七六七、六二九兩の如く異常なる進展を示してゐる。之が重要輸出品は大豆、豆粕、豆油を始め、高粱、小麥、柞蠶絲、石炭及木材等の原料品を主とし、輸入品の重なるものは綿布、綿絲、砂糖、煙草、石油、鐵及鋼、機械器具、紙類、衣服附屬品等である。貿易對手國は日本、朝鮮、香港、北米合衆國、支那諸港で此等諸國の中日本は地理的、經濟的の關係上尤も優越せる地位を占めて居る。

滿洲貿易の關門としては大連、營口、安東、浦鹽の四吞吐港を擧ぐべく、特殊貿易地としては哈爾賓がある。右の内大連港の數字的發達は顯著なるもので、一九〇八年には支那開港中最下位に在りし其貿易額は一九二一年には上海に次ぐ巨額となり、一九二三年には其貿易額は尙二億五千九百九十五萬海關兩を示すに至つた。左に大連、營口、安東三港の最近三箇年の輸出入表を掲げる。



大連港の一部

南滿洲三港最近輪移出入表 (單位海關兩)

年度	港別	輪移入額	輪移出額	計
大正十一年	大連	九四、五三六、七六八	一五四、五〇四、四〇九	二四九、〇四一、一七七
	營口	四三、二〇五、八九九	二九、三〇四、〇四五	七二、五〇九、九四四
	安東	三七、五九〇、九九〇	三六、一二一、〇九三	七三、七一二、〇八三
大正十二年	大連	九七、四四〇、七三一	一六二、五一八、九六一	二五九、九五九、六九二
	營口	五五、三八二、七〇四	三一、二六七、八二四	八六、六五〇、五二八
	安東	三五、二一八、九一三	五二、九六一、二七〇	八八、一八〇、一八三
大正十三年	大連	一一〇、四〇一、二七七	一五三、五六五、五六六	二六三、九六六、八四三
	營口	四三、八四八、一一三	二〇、五三七、八七四	一六四、三八五、九八七
	安東	二八、〇七七、五三七	三九、三三七、二五二	六七、四一四、七八九

貿易商としては三井物産、鈴木商店、古河、大倉、三菱の各商事會社、日清製油、日本棉花兩株式會社、日陞、堺力、福昌、永順の各洋行等を數へ得る。

會社 滿洲には日本商法に依る會社及日支合辦會社がある。前者は企業熱と相俟ち逐年增加の傾向を示し、大正十一年末合計八百三社、拂込資本金五億九千九百萬圓に達した。後者も滿洲の經濟事情上極めて緊要に屬する爲め比年其數を增し、十一年末には州內外合計百四社、拂込資本金六千六百萬圓を示し、其中銀資本を以てするもの六社で他は悉く金資本である。

銀行 滿洲に於ける邦人銀行の數は本支店及出張所合計其總行數八十九行に及び、內滿洲に本店を有するもの二十行、其支店出張所四十八行、公稱資本金八千十萬圓、拂込三千百六十九萬餘圓に達し滿洲以外に本店を有するものは朝鮮、正金の二銀行にて其在滿洲支店は二十一行を算する。銀行所在地は大連を主とし滿鐵沿線主要地は勿論、吉林、哈爾賓、鄭家屯にも及ぶ。而して朝鮮、正金の二行は其數に於てこそ在滿洲本店銀行に及ばざるも、朝鮮銀行は日本人間に强制通用力を有する兌換金票を發行し、正金銀行は滿洲固有の通貨と金との爲替任務を目的とする兌換銀券を發行して各々特殊金融機關として本邦銀行の牛耳を把持して居る。尙滿洲に於ける不動產金融の樞軸機關として東洋拓殖株式會社があり、大連、奉天、哈爾賓に支店を置く。滿洲には尙其他に支那側銀行及外國側銀行がある。今其主なるものを揭ぐれば左の如くである。

(一) 本邦銀行名

（大正十二年九月末現在）

本邦銀行名	本店所在地	公稱資本	拂込資本	支店出張所々在地
正隆銀行	大連	二〇、〇〇〇千円	九、五〇〇千円	營口、奉天、旅順、長春、開原、撫順、鄭家屯、四平街、公主嶺、哈爾賓、天津、青島、大連二ヶ所
滿洲銀行	同	三〇、〇〇〇	八、七二〇	大連市内三ヶ所、普蘭店、金州、貔子窩、瓦房店、鞍山、奉天二ヶ所、安東二ヶ所、本溪湖、撫順、鐵嶺、公主嶺、范家屯、長春、吉林、新義州
龍口銀行	同	一五、四〇〇	六、〇九七	龍口、哈爾賓、青島、公主嶺、旅順、瓦房店、松樹、安東、鞍山、大連磐城町
大連商業銀行	同	二、〇〇〇	二、〇〇〇	—
振興銀行	營口	一、一七五	五〇〇	營口
南滿銀行	鞍山	一、五〇〇	三七五	—
日華銀行	鐵嶺	一、〇〇〇	一、〇〇〇	開原
開原銀行	開原	一、〇〇〇	五〇〇	—
長春實業銀行	長春	一、〇〇〇	四〇〇	—
協成銀行	安東	一、〇〇〇	二五〇	—
平和銀行	吉林	一、〇〇〇	三〇〇	大連
哈爾賓銀行	哈爾賓	二、〇〇〇	五〇〇	—
朝鮮銀行	京城	八〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	大連、奉天、長春、開原、營口、安東、吉林、旅順、哈爾賓、哈爾賓傅家甸、遼陽、鐵嶺、四平街、鄭家屯

横濱正金銀行	横濱	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	大連、奉天、開原、長春、哈爾賓、牛莊
東洋拓殖株式會社	東京	五〇、〇〇〇	三五、〇〇〇	大連、奉天、哈爾賓

（二）

支那銀行名	本店所在地	公稱資本	拂込資本	支店出張所所在地
東三省官銀號	奉天（大洋）	二〇、〇〇〇 千位	七、〇〇〇 千位	營口、遼陽、鐵嶺、開原、長春、安東、公主嶺吉林、哈爾賓、齊々哈爾、黑河、天津、上海等
奉省商業銀行	同（小洋）	二、〇〇〇	二、〇〇〇	東豐、遼陽、哈爾賓
吉林永衡官銀號	吉林（兩） （吊）	三〇 一、五〇〇	三〇 一、五〇〇	吉林、長春、哈爾賓
益通銀行	長春（金）	一、〇〇〇	二五〇	—
黑龍江廣信官銀號	齊々哈爾（兩） （吊）	五〇〇 四〇五	五〇〇 四〇五	哈爾賓
中國銀行	北京（大洋）	六〇、〇〇〇	一九、七六〇	長春、奉天、吉林、齊々哈爾、哈爾賓、黑河、綏化、海倫、營口、大連、安東、開原、洮南、公主嶺、通化、臨江
交通銀行	同（同）	二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	奉天、哈爾賓、長春、黑河、吉林、齊々哈爾、開原、四平街。
浙江興業銀行	上海（同）	二、五〇〇	二、五〇〇	奉天、哈爾賓
金城銀行	同（同）	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	哈爾賓

（三）

外國銀行名	本店所在地	公稱資本	拂込資本	滿蒙の支店出張所所在地
露亞銀行	レニングラード（留）	六五、〇〇〇 千位	五五、〇〇〇 千位	哈爾賓

西比利商業銀行	同（同）	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	同
極東借款銀行	哈爾賓（同）	四〇〇	一二〇	——
極東共和國銀行	知多（同）	二、〇〇〇		哈爾賓
香港上海銀行	香港（弗）	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	大連、哈爾賓
花旗銀行	紐育（米弗）	六五、〇〇〇	三二、五〇〇	哈爾賓
中華商業銀行	北京（同）	一〇、〇〇〇	五、〇〇〇	同
麥加利銀行	倫敦（磅）	一、二〇〇	一、二〇〇	營口

以上の外支那側には票莊（票號）、錢莊（銀號）、錢舗、銀爐（銀號）等の舊式金融機關がある。票莊は爲替業務を主とし、錢莊は商業銀行の性質を帶び貨幣の兩替をも營み、銀爐は銀錠を鑄造し預金及貸付を行ふ一種の銀行である。輓近支那經濟界の發達に隨ひ新式銀行の創設相踵ぐと共に、是等舊式金融機關漸次淘汰せられつゝある。

通貨　滿洲内通貨の多種多樣なるは左の一覽表を見ても明であるが、後說各地取引所に於ける錢鈔取引は乃ち斯の通貨の種類の多きと其れ等相互間の相場の變動著しきとに因り自然に發達したところのものである。而して輓近我が朝鮮銀行の金票が漸次勢力を得つゝあるは注目に値する處で、大正十二年末滿洲流通高は三千萬圓に達した。

滿洲通貨一覽表

通貨別	本位	種類	單位名稱	摘要
固有通貨	銅本位	制錢	吊	奉天省にては制錢百六十箇、吉黑兩省にては五百箇を一吊とす、通貨として其價値を認めざるも物價の制錢建尙廣く行はる
		官帖	分	吉林省及黑龍江省内に於て流通す、初は制錢を基礎としたる兌換券なりしが現今は不換紙幣なり
		銅元	吊	我一錢銅貨に倣ひて鑄造せるものにて、品位を九百五十位とし當制錢十文及二十文の二種あり
		銅元券	枚	銅元を基礎とせる兌換券にして江省券、奉省券の兩種あり
	銀本位	銀錠	兩	銀の重量、成分及其他諸慣習により各地其内容を異にす、例へば營口の兩は品位九九二の銀の營平兩純銀五五二・〇六七八四グレインなるが如し
		過爐銀	兩	營口にて行はるゝものにして營平銀を基礎とせる振替勘定なり
		大洋錢	元	一元を量目庫平七錢二分、品位銀九〇〇位と規定すれど各省鑄造の銀元は自ら一律を缺く
		大洋票	元	大洋錢を基礎とせる銀行券なり、國幣券、滙兌券等の名稱あり
		小洋錢	角	一角は重量庫平七分二厘、品位八二〇位と規定すれど實際は一律ならず
		小洋票	角	小洋錢を基礎とする銀行券なり、滙兌券小券等の名稱あり
		私帖	角	小洋錢を基礎とする一覽拂手形なり
	銀	墨銀	弗	純銀三七六・〇三三グレイン流通多からず

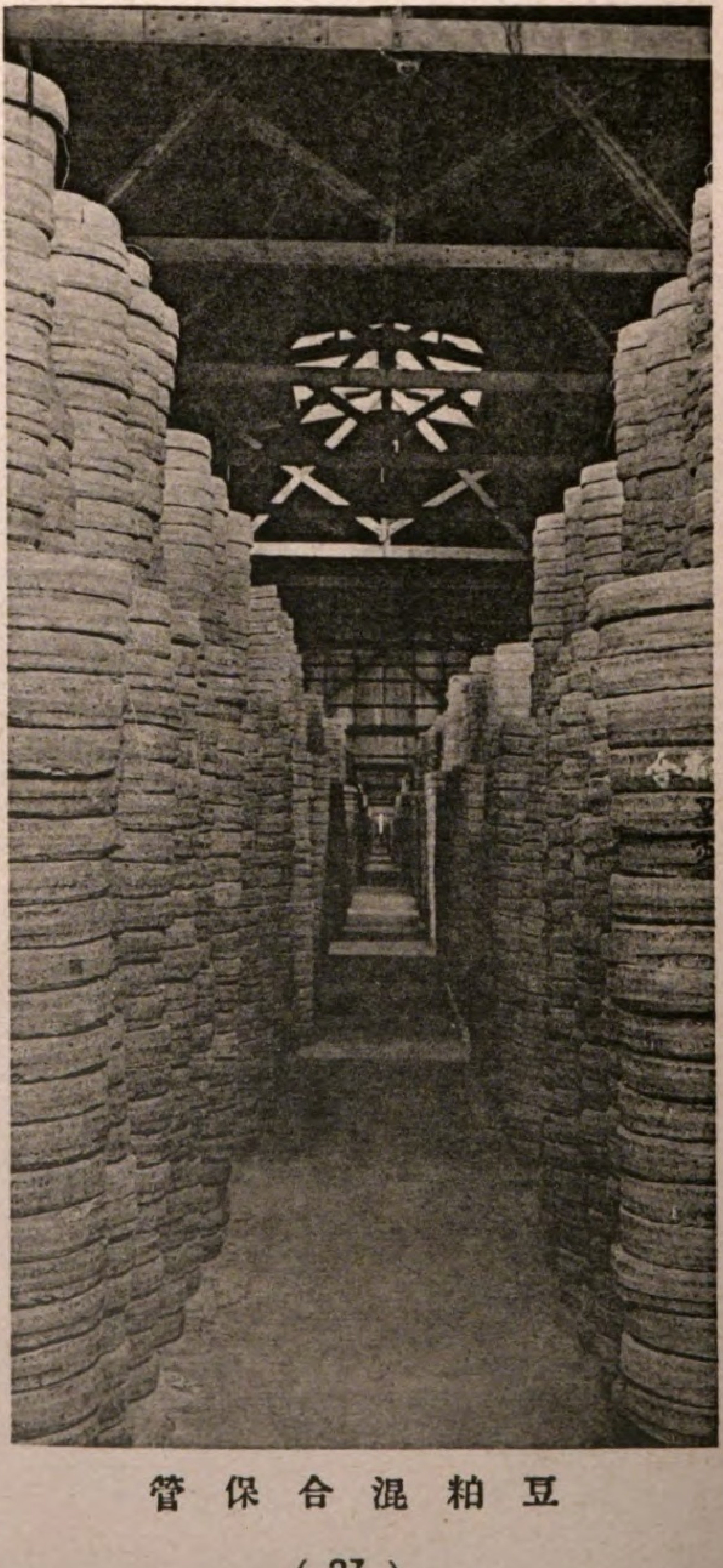
外來通貨			
本位	正金銀行銀券	圓	我舊一圓銀貨を基礎とせる兌換券にて、大正十二年末發行額百二十萬圓餘なり
金本位	日本銀行票	圓	日本内地に限り流通するものなるも、滿洲地方にも相當流入通用を見る
	朝鮮銀行券	圓	日本銀行券を基礎とする兌換券なり
	日本補助貨	錢	日本金貨に對する補助貨にして主として日本人間の端錢計算に用ゐらる
	露國金貨	留	金貨留は大正七年迄は北滿に於て流通廣大なりしが爾後貯藏せられ流通少し

信託業　銀行以外の金融機關としては東洋拓殖會社、東省實業會社が各特殊の任務を有し、後掲大連、遼陽、鐵嶺、開原、四平街、公主嶺、長春、營口各取引所附屬の信託會社も亦特色あるものである。歐洲戰後事業熱旺盛時代に各地に簇出したる其他の信託會社は其の後自然淘汰的に可成り減少した。

倉庫業　本社は沿線主要驛及大連埠頭に於て倉庫業を經營して居るが、普通貨物の外發送、到著貨物の保管をなし、之等を普通預と區別して發送預、到著預と稱す。保管方法は倉庫保管と野積保管に分れる。大豆及豆粕に對しては混合保管制を採り本社、大連埠頭事務所及び沿線主要驛に於て之が取扱を爲してゐる。一般倉庫業は輓近の發達に係り大連に福昌公司、起業倉庫、大連倉庫、南滿倉庫建物會社、

奉天には南滿倉庫信託、奉天運輸倉庫、撫順に撫順倉庫、吉林には吉林倉庫金融、鄭家屯に遼源運輸倉庫、營口に營口倉庫汽船、貔子窩には貔子窩倉庫等の各會社がある。其他國際運輸會社の經營に係る倉庫が長春及哈爾賓にある。

保險業 滿洲に本店を有するものは大連火災海上保險會社のみであるが、他に夥多の内地保險會社支店、出張所若くは代理店がある。生命保險には帝國、千代田、明治、日清、第一相互等活動し、損害保險には明治火災、東京火災、横濱火災等が勢力を占めてゐる。尚歐米の保險會社も相當ある。茲



豆粕混合保管

に特筆を要するは本社の埠頭構内保管貨物に對する保險で、卽ち本社は荷主に代つて保險契約を爲し保險會社をして危險を保證せしむるのである。但し野積保管の場合は混合保管の大豆に對しては本社は保險料の一割を、其他の貨物に對しては二割を負擔し、保險會社は前者には九割、後者には八割を負擔する。

運輸業　滿洲經濟界の動脈とも見るべき本社鐵道の貨客運輸成績（自大正十三年四月至同十四年三月）を示せば左の如くである。

營業哩	六九五哩	乘車人員	八、七三二、七一八人
貨車噸數	一四、五八八、四三七噸	客車收入	一三、六四五、五三八圓
貨車收入	七七、〇一九、三六八圓	計（其他を含む）	九二、五六一、七三二圓

一般運輸業者には新設の國際運送株式會社を第一とし、其他大連に滿洲運輸、大連運輸竝に大連海運、大正海運等の諸會社があり、沿線には長春運輸、安東海運等の諸會社を擧げ得る。尚各信託會社にして斯業を兼營するものが多い。汽船會社其他は交通の項に讓る。

商業機關　滿洲に於ける邦人側の商業會議所には、大連、奉天、安東、長春、營口、鐵嶺、哈爾賓の七商業會議所がある。大連商業會議所發行の所報を初め爾餘の各商業會議所發行の各月報は斯界に益する所が多い。支那側では商務會又は公議會と稱する同性質のものがあり、重要都市には必らず設けら

れてゐる。取引所には關東廳の官廳にして之に先物取引の擔保清算機關たる株式組織の信託會社を隷屬せしめて居るものと、大正八年十二月以來設立を認められてゐる民營のものとがある。前者は現在大連、奉天、開原、四平街、公主嶺、長春に在り、其取引物件は大豆、豆粕、豆油、高粱、小麥、粟等の農產物及金票（朝鮮銀行金券）、鈔票（正金銀行銀券）小洋錢、小洋票等の貨幣で、大連取引所は特に重要物產部と錢鈔部とが別れて居る。後者卽ち民營のものは有價證券、砂糖、麥粉、綿絲布、麻袋を取引物件とする大連株式商品取引所及奉天の滿洲取引所と金銀、豆粕、有價證券等の取引を目的とする安東株式商品取引所及哈爾賓取引所がある。又支那側に於ても奉天、哈爾賓、長春、鐵嶺、范家屯、鄭家屯等に交易保證所なるものを設けてゐる。

以上の外安東、奉天、鐵嶺、長春、哈爾賓の各地には商品陳列館があつて日本商品の紹介に努め、又大連には滿洲重要物產組合、同取引人組合、大連錢鈔先物取引人組合、滿洲土木建築業組合等がある。

五、交通

鐵道　滿洲が世界の注目を惹く樣になつたのは露國の東方經營策として之に鐵道が布かれてからのことである。現在滿洲には左記の各鐵道がある。東支鐵道は露支合辦で運轉せられ其南部支線は吾が

南満洲鐵道と長春で聯絡し、其本線は満洲里に於て西比利線にボクラニーチナヤに於て烏蘇里鐵道に聯絡する。北満の開發は今後益々此東支線によつてなさるべき筈である。南満洲鐵道は大連を起點として北走し奉天に於て京奉鐵道と聯絡し四平街にては四洮鐵道を結び、長春に至りて東支、吉長兩鐵道と聯絡する幹線の外、朝鮮鐵道と安東に於て聯絡する安奉線を首め、旅順線、營口線等の支線あり、満洲の動脈をなし東支鐵道と共に歐亞聯絡世界交通路の一部をなし、且豊富なる農産物の輸送機關として満蒙開發の任務に從つてゐる。

今各鐵道を一括表示すれば左の如くである。

東支鐵道西部線	満洲里、哈爾賓	五八一哩	露支國
同　東部線	哈爾賓、ボクラニチナヤ間	三三九哩	同



安奉線橋頭を走る汽車

同	南部線	哈爾賓、寛城子間	一四七	同
同	扎蘭諾爾線	扎蘭諾爾、炭坑間	五	露國
計			一、〇七二哩	
南滿洲鐵道本線		大連、長春間	四三八哩	南滿洲鐵道株式會社
同	安奉線	蘇家屯、安東間	一六二	同
同	旅順支線	周水子、旅順間	三二	同
同	撫順支線	蘇家屯、撫順間（渾河、楡樹臺間を含む）	三三	同
同	營口支線	大石橋、營口間	一四	同
同	煙臺炭坑支線	煙臺、炭坑間	一〇	同
計			六八九哩	



滿洲の廣野を走る汽車

吉長鐵道	長春、吉林間	七九哩	支那政府
四洮鐵道四鄭線	四平街、鄭家屯間	五四	同
同　鄭白線	鄭家屯、白音太來間	七二	同
同　鄭洮線	鄭家屯、洮南間	一四一	同
京奉鐵道奉楡線	山海關、奉天間	二六一	同
同　營口支線	營口、溝帮子間	五七	同
同　虎濠支線	打虎山、八道濠間	一八	同
同　錦義支線	錦州、義州間	三一	同
計		七一三哩	

即ち滿洲には南北を通じ二千四百七十四哩の鐵道がある。右の外齊昂線(齊々哈爾、昂々溪間)、溪域線(本溪湖、牛心臺間)、通裕運炭線(女兒河、大窰溝)、天圖線(圖們江、天寶山間)等の輕便鐵道がある。猶將來日本又は其他の資本に依つて敷設せらるべき滿蒙四鐵道、吉會鐵道、濱黑鐵道竝に洮齊鐵道が完成せられた曉には之に約二千哩を增加する譯である。此等未成線は既設鐵道と相俟つて滿洲及蒙古の富源を開發する重大なる任務を有するものである。此中長洮、洮齊の兩鐵道は竣工の近くにある。

滿蒙四鐵道吉開線	吉林、開原間	二三〇哩
同　長洮線	長春、洮南間	一八〇

同	洮熱線	洮南、熱河間	四七〇
同	臨海線	洮熱線一地點より海港に出づる鐵道	—
吉會鐵道		吉林、會寧間	二七〇
濱黑鐵道		哈爾濱、黑河間、嫩江、齊々哈爾間	六五八
洮齊鐵道		洮南、齊々哈爾間	一六〇

尙目下奉天、海龍を結ぶ線が支那官民により、關東州の金州貔子窩間の鐵道が日支人により計畫され株式の募集を終つた。

海運　大連港は年六百萬噸の貨物と三千隻の汽船とを呑吐する。其設備は露國時代に一千萬留を投じ完成に至らなかつたのを本社更に修築し、大正十二年度迄に約三千九百萬圓を投じて居る。現在繫船岸壁の長さ約一萬三千五百尺で、五千噸級の汽船三十四五隻を同時に横付けにする事が出來、又埠頭構內には九萬九千坪、收容噸數五十萬の倉庫と面積三萬坪、收容噸數十萬噸の野積場とがある。定期航路は左記諸會社の航路が主なるものである。

大阪商船、日本郵船、近海郵船、東洋汽船、大連汽船、阿波共同、滿洲運輸、朝鮮郵船、政記公司、青筒汽船等

營口港は遼河河口を溯ること十四哩の右岸に位する。埠頭は卽ち一帶の河岸で水深三十尺であるが、下流に淺洲がある爲吃水十七呎以上の船は高潮に乘じて進むことになつて居る。河水減退すれば水運衰へ河水氾濫すれば河床變形するを以て永久的埠頭の建設は至難である。加之滿洲物資の輸送期たる

冬季は河水凍結して交通杜絶する缺點がある。大正十二年中の出入船舶(戎克を除く)は一千百十四隻、登簿噸數百十萬七千餘噸を數へ年々僅かの增加を示して居るが、大連の港灣設備が漸次完備さるるに對して到底大連の進展と競ふことは難事である。

安東港に臨める鴨綠江の水利は遼河程豐ではないが、其の歷史は古く現在に於ても其の上流地方に對する大豆、高粱、柞蠶及鴨綠江材は之によつて該港に來集する。

河運及鐵路 滿洲の道路は夏季降雨期に於て殊に惡しく殆んど交通杜絕の狀態なるを以て鐵道敷設以前は遼河、松花江、黑龍江は滿洲內地に於ける唯一の交通路であつた。現在遼河は之と殆ど竝行に敷設せられた滿鐵の爲め壓倒せられて其河運の價値漸次衰へて來たが、松花江及黑龍江は今尙物資の運搬に至大の貢獻を爲して居る。冬季の結氷期間は所謂滿洲の交通運輸の最繁期であつて、氷結した道路上には車馬の往來絡繹として絕えない。

通信 滿洲に於ける通信事業は支那政府の施設と關東州及本社鐵道附屬地其他重要地點に我國の經營するもので、後者は關東廳遞信官署其の任に當つて居る。支那の郵便局は各地に設けられて其の事務も一通り整ふて居る。電信には有線無線の兩者がある。有線は沿線各地間は勿論吉黑兩省の奧地を除けば大抵各縣衙門の所在地に通じ、海底電信は大連芝罘及大連佐世保、大連長崎間を聯絡する。無線電信は大連灣沙砣子及柳樹屯に設けられてゐる。電話は大連、奉天、營口、吉林、哈爾賓等の都

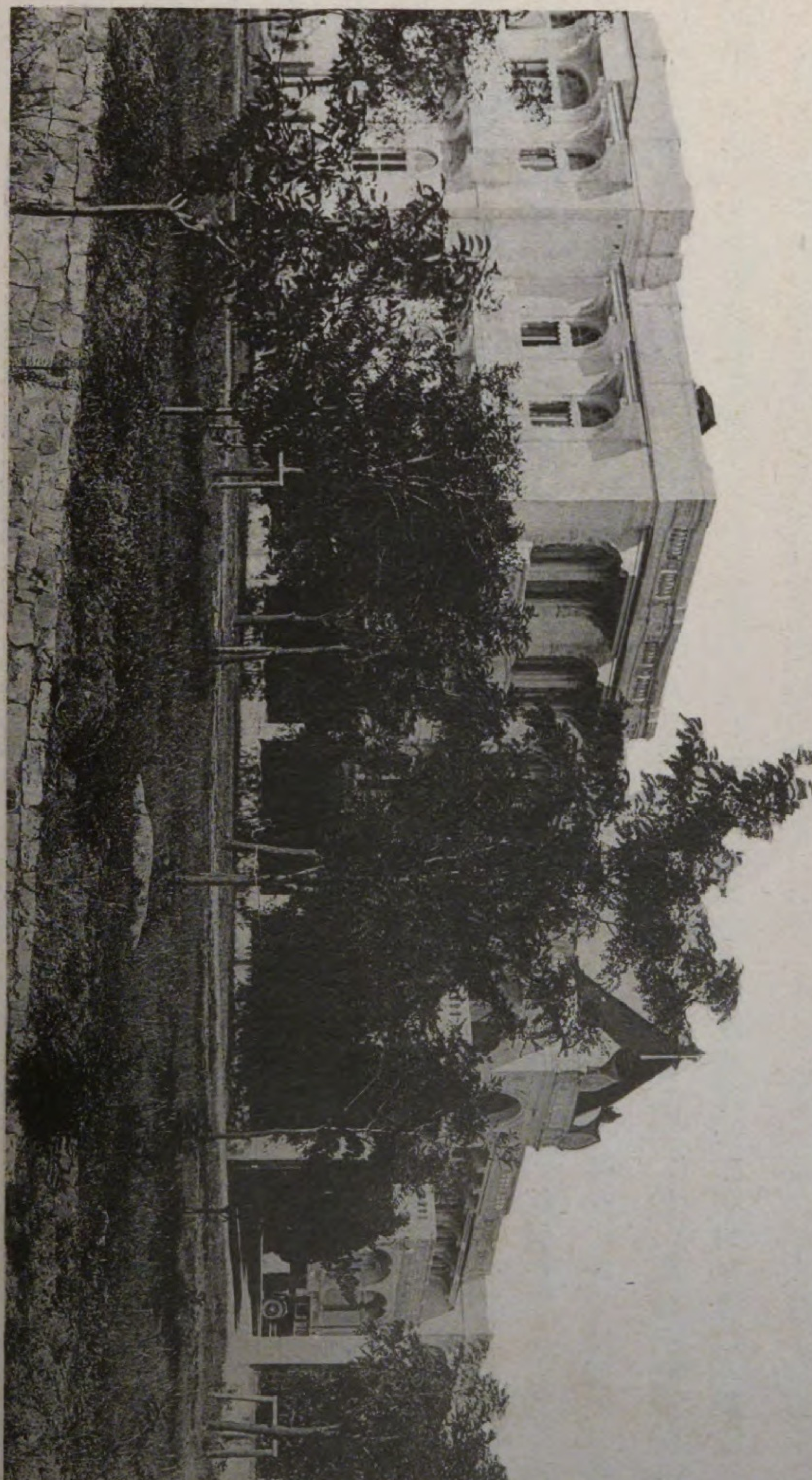
市は勿論重要の地方小都市にも大抵其設置を見る。

六、行　政

行政區劃　行政上滿洲は所謂東三省より成り奉天省三道五十七縣、吉林省四道三十九縣、黑龍江省三道三十縣、一呼倫貝爾區域に分れる。東内蒙古は蒙古王の領土たる哲里木盟、卓索圖盟、昭烏達盟、錫林郭勒盟の四盟三十八旗及察哈爾旗に區劃されるが、尙支那の官制こしては別に熱河、察哈爾の二特別行政區をも置いてゐる。而して其行政の系統は東三省に於ては軍民兩政を對立せしめ、特別區域に在りては軍政の下に民政を統轄する形式こなつてゐる。關東州及鐵道附屬地附帶事業地は日本側が其行政を統べてゐる。

東三省の行政　軍事行政の組織は省に督軍を置き各省に鎭守使を置き治安の維持に當らしめ、別に東三省巡閱使を置きて三省の軍政を統轄せしむるこゝ定められてあるが、現在に於ては省民の推戴に依る保安總司令副司令之に代りて軍政及民政を自治してゐる。省長は其下に於て民政を統べ警備、財政、司法、其他の諸政を管掌する。而して現在の東三省地域內には地理的に蒙地を含むも蒙旗に關する特別なる關係を除けば一般に省行政の統轄內に置かれる。

特別區域の行政　東部內蒙古に屬する各地域には舊旗制を布き、其內哲里木盟の區域は奉、吉、黑



關東廳

の三省に分屬するが、其他の三盟及察哈爾地方は熱河、察哈爾の兩特別區域こし各都統を置いて管下の軍民兩政を統轄せしめてゐる。

日本側の行政 日本側に於ては關東長官は關東州內全般の行政を統べ本社を監督するこ共に本社鐵道附屬地內の行政司法の警察事務を司り、本社は鐵道附屬地及び附帶事業用地內に於ける、教育、衞生等の行政の任に當つてゐる。而して領事は開放地及鐵道附屬地に對し領事裁判權を行ひ、且前者に於ける警察權を有し便宜上關東廳の事務官を兼ね以て警察行政の統轄を計つてゐる。大連及旅順は自治制こして大正四年市規則を定めたが、同十三年八月更に關東州新市制の實施を見た。

產業行政 產業に關する行政機關こして北京政府に農商部のあるここは誰人も知つて居る所であるが、部內に農林司、工商司、鑛政司、漁牧司の四司を置き、農林、水產、牧畜、工、商、鑛の行政事務を分掌して居る。東三省及熱河竝察哈爾の都統管區に於ては各々衙門內に實業廳の設けあつて、省長監督の下に夫等の地方產業事務を主宰して居る。又別に農商部直轄にて哈爾賓に東三省林務局、長春に第二鑛務監督署の設けがあり、前者は東三省國有林の調査、管理、經營、處分を掌り、後者は東三省の鑛務一切を管理して居る。日本側こしては關東廳に殖產課があり、滿鐵には調査課、商工課、農務課があつて調査課は一般政治經濟の調査を管掌し、商工、農務の二課は農工商業助長の爲めに盡しつゝある。

交通行政　交通に關する支那の中樞機關は北京政府の交通部なることは云ふ迄もないが、其の內鐵路總局支配の下に京奉鐵路管理局は天津に、吉長鐵路管理局は長春に、四洮鐵路管理局は四平街にあり。又東支鐵道本社は哈爾賓に、吾が南滿洲鐵道の本社は大連にある。次に通信機關には同じく交通部の下にある郵政總局の支配を受け、東三省郵務管理局竝電政管理局が奉天に置かれてある。我が遞信局は大連に在つて關東州竝鐵道附屬地の遞信事務を管理して居ることは本國內と異る所がない。

稅制　中央には財政部各省には財政廳があり、其の所管の下に各地に稅捐徵收局を設け各所轄管內の徵稅事務を掌り、各局は必要に應じ分局及分卡を置いて徵收事務の分擔或は監視を掌らしめて居る。今主要稅目を列記すること、田賦、印花稅、漁業稅、契稅、出產稅、銷場稅、菸酒稅、牲畜稅、各稅帖稅、木稅、繭糸稅、船稅、糧貨



旅順工科大學

税、鑛税等があり、此外に鹽税及關税がある。關東廳の租税は國費に屬するものと地方費に屬するものとあり、前者は地租、鹽税、所得税、取引所營業税、取引税　酒税及煙草税にして其税額大正十二年度豫算額三百八十萬圓、後者は營業税及雜種税にして其税額同二百二十六萬圓である。何れも民政署長又は民政支署長に於て之を賦課徵收する。

度量衡　度量衡は農商部の權度製造所に於て製作せられて居る民國政府の現行條例により定めたるもので、之れを我が度量衡に換算すると次表の如くになる。

度	一寸—一〇分—吾一寸〇五六	一丈—一〇尺—吾一丈〇五六
	一尺—一〇寸—吾一尺〇五六	一引—一〇〇尺—吾一〇五尺六
	一歩—五尺—吾五尺二八	一里—一八〇〇尺吾五町二八
量	一勺—一〇撮—吾五撮七四〇一	一斗—一〇升—吾五升七四〇一
	一合—一〇勺—吾五勺七四〇一	一斛—五斗—吾二斗八七〇〇五
	一升—一〇合—吾五合七四〇一	一石—二斛—吾五斗七四〇一
衡	一分—一〇厘—吾九厘九四四四	一兩—一〇錢—吾九匁九四四四
	一錢—一〇分—吾九分九四四四	一斤—一六兩吾一五九匁一一〇四
地積	一厘—一〇毛—吾一歩八五八五六	一畝—一〇分—吾六畝一九五二
	一分—一〇厘—吾一八歩五八五六	一頃—一〇〇畝—吾六町一九五一

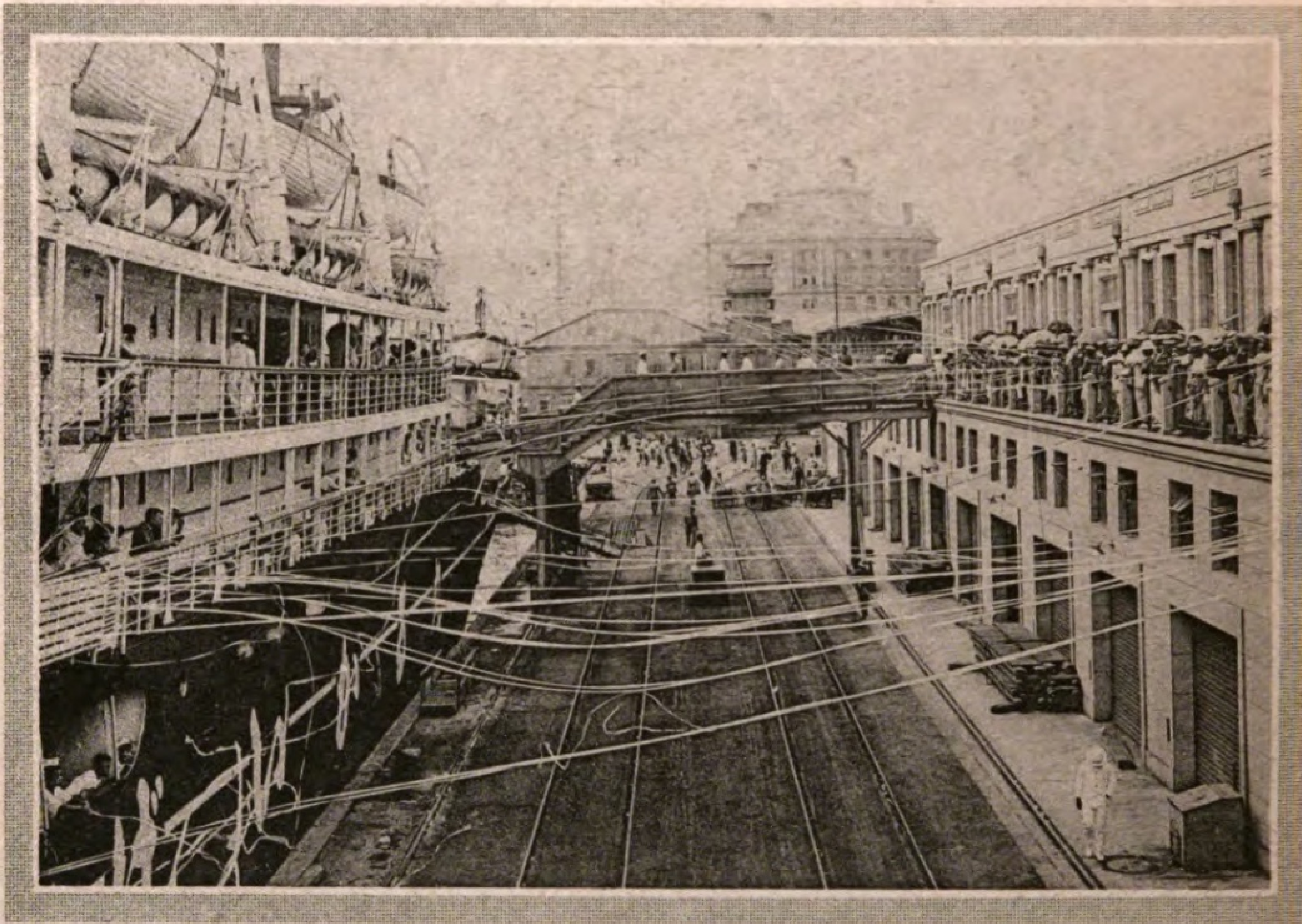
現行條例の定むる處は右の如く、隨つて滿洲に於ても之が實行せらるべき筈なれども實際は毫も行は

れずして依然舊來の度量衡を其の儘用ひて居る。其の舊來の度量衡なるものは各地各樣で一々爰に記述することは煩雜に堪へぬ。

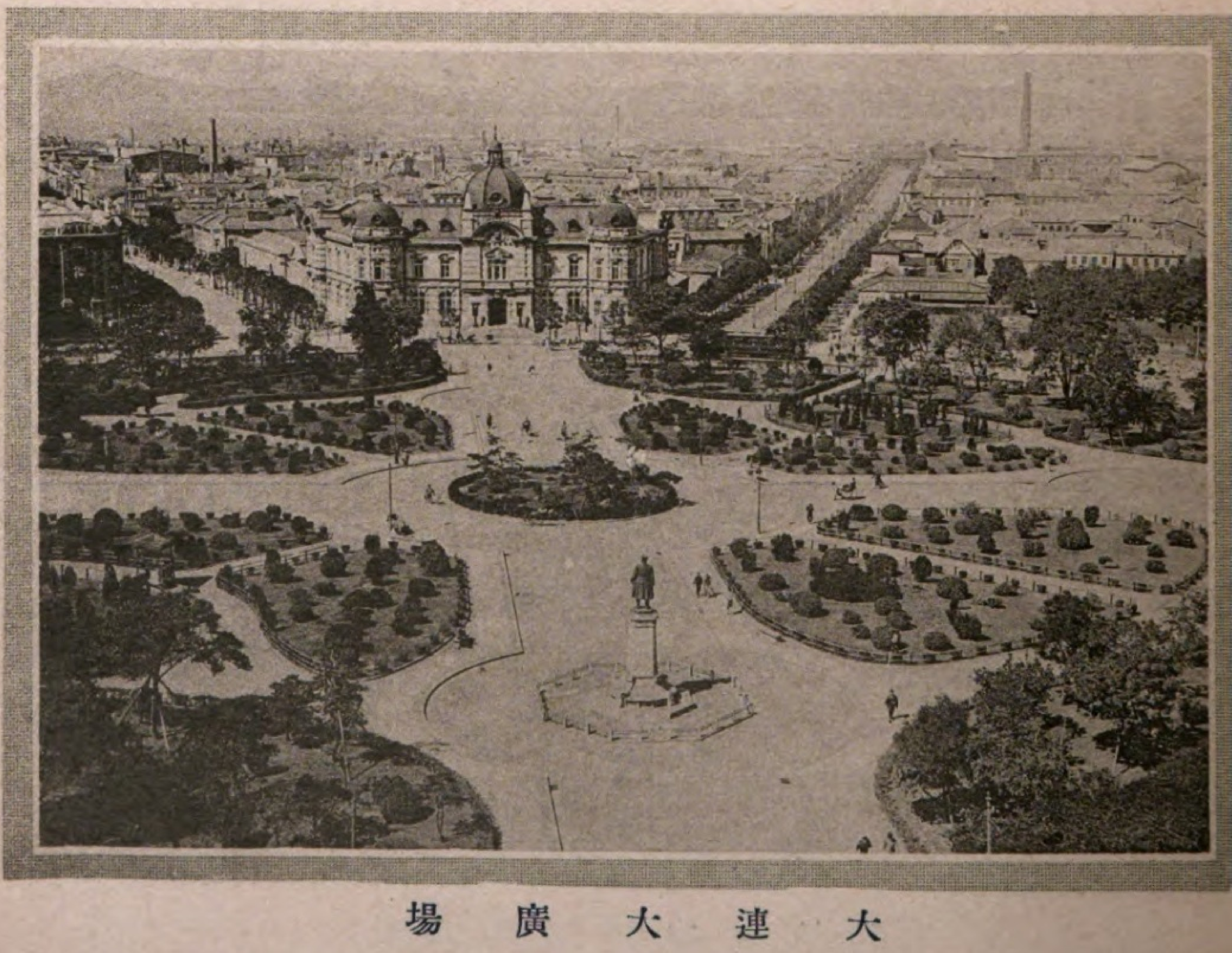
土地丈量法 滿洲に於ける土地面積の丈量には木尺と云ふを用ひ、五尺平方を一弓(コン)とし、地方によりて二四〇弓(小畝と稱す)、二八八弓(中畝と稱す)、又三六〇弓(大畝と稱す)、を以て各一畝(ムウ)とし、更に又地方により小畝の六畝或は十畝を以て一天地又は一日地と稱し、中畝の十畝を一晌(シヤン)と稱し、概して南滿は天地、北滿は晌を用ふるを普通とする。而して又十天を一頃とし、四五晌を一方と呼稱する。木尺一尺は吾邦の約一尺〇五六に相當する。民國政府は小畝一〇畝一天を採用してゐる。

今日の満鉄





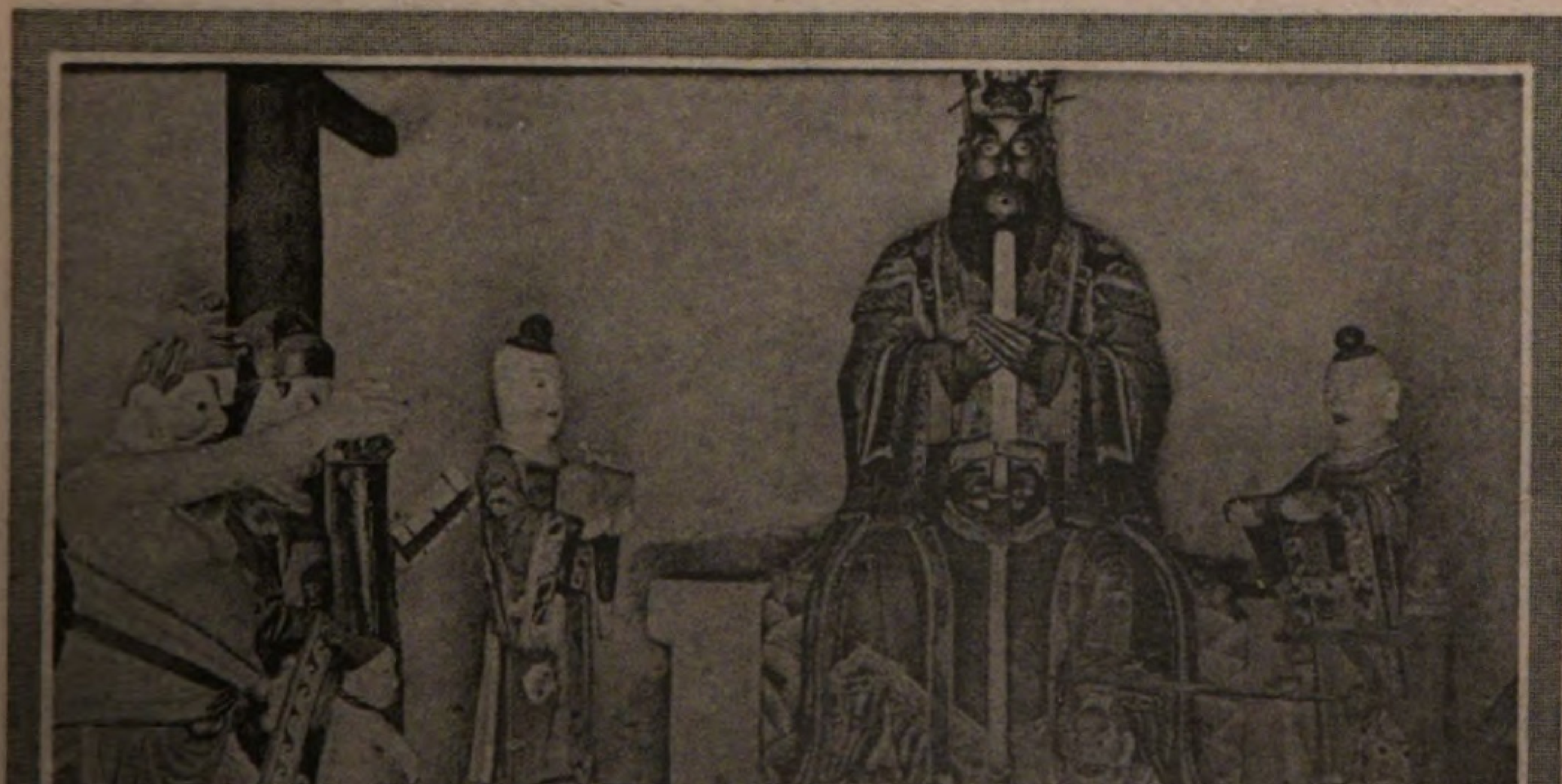
大連埠頭待合所と定期船



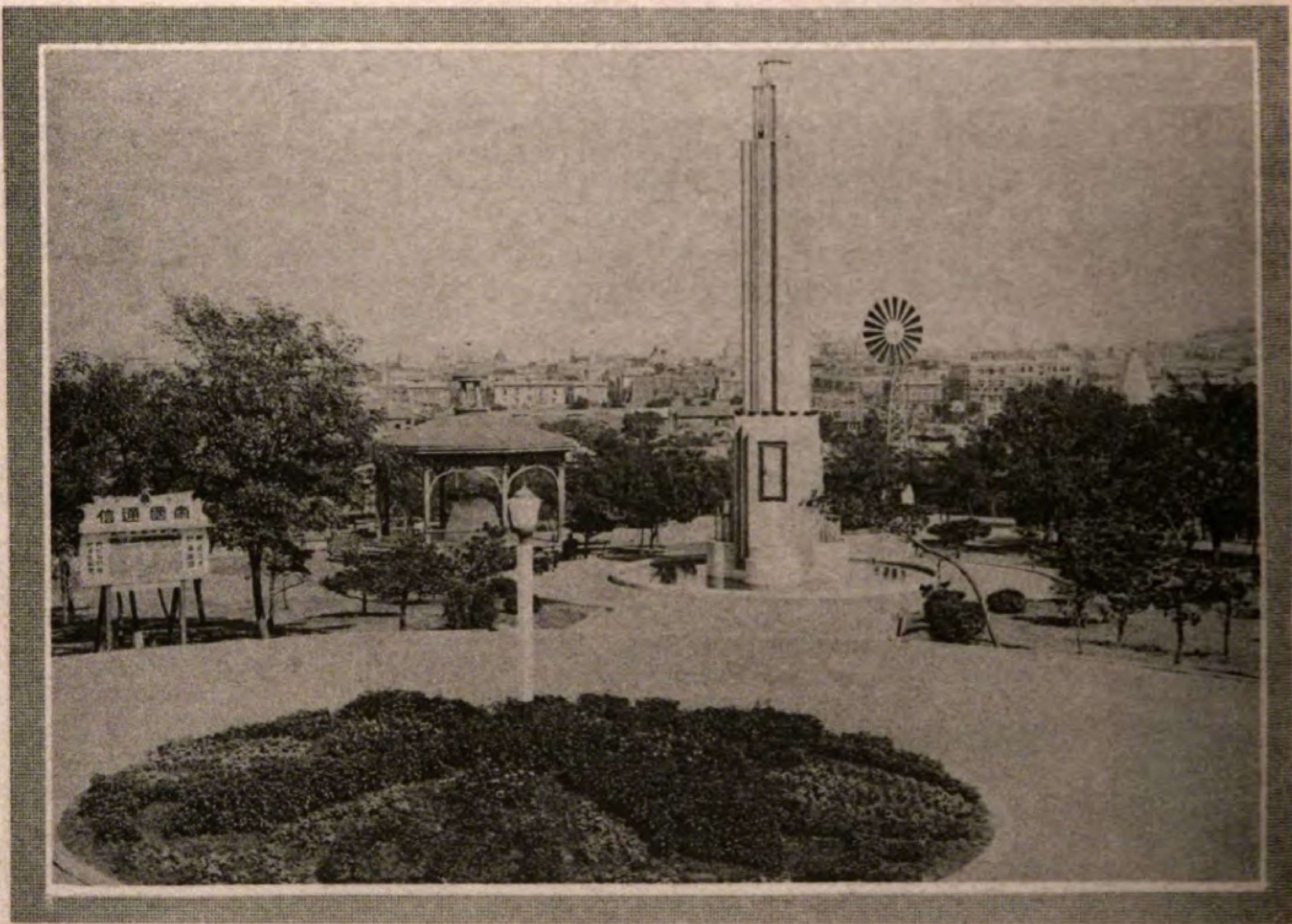
大　連　大　廣　場



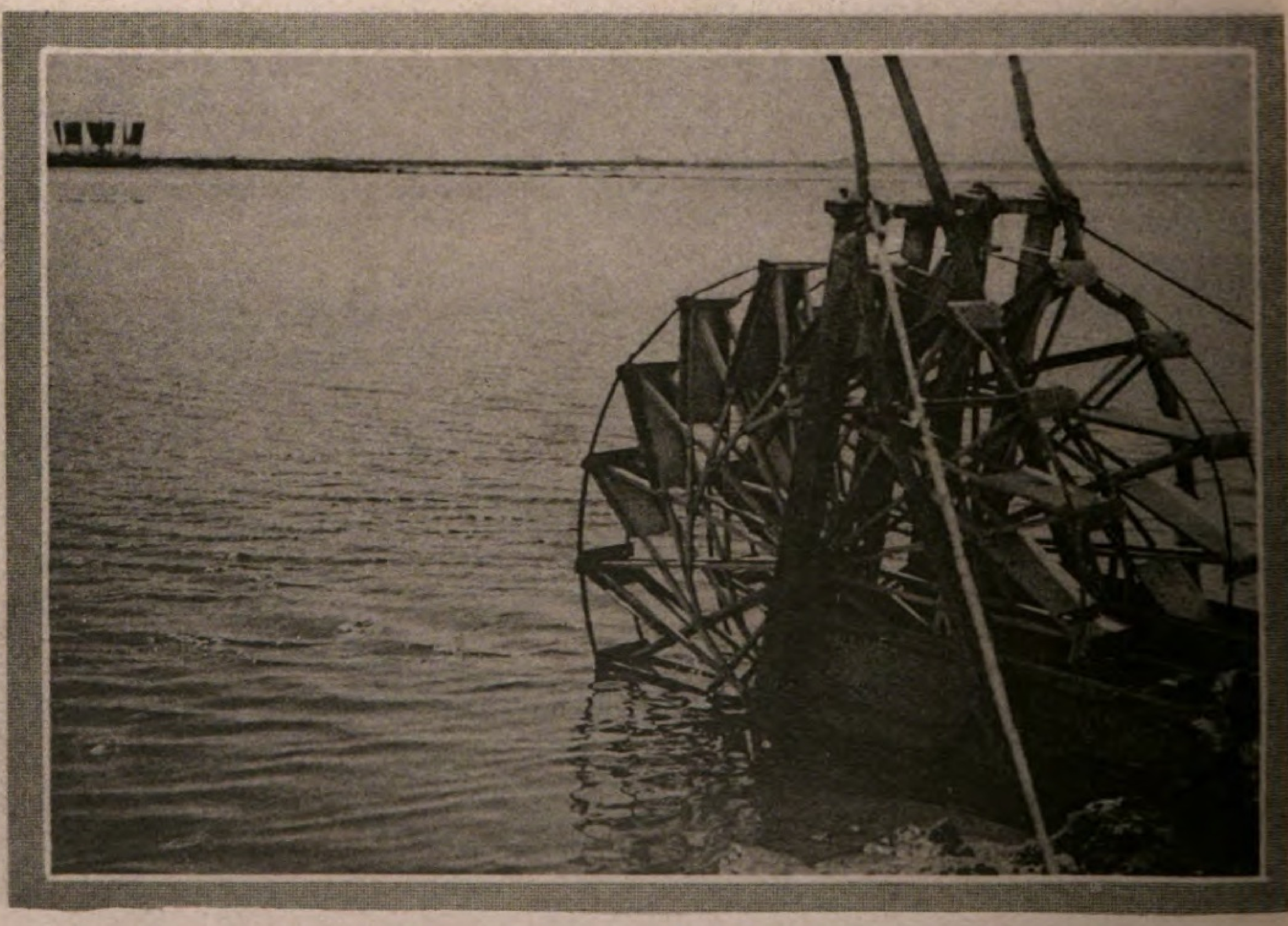
奉天喇嘛塔



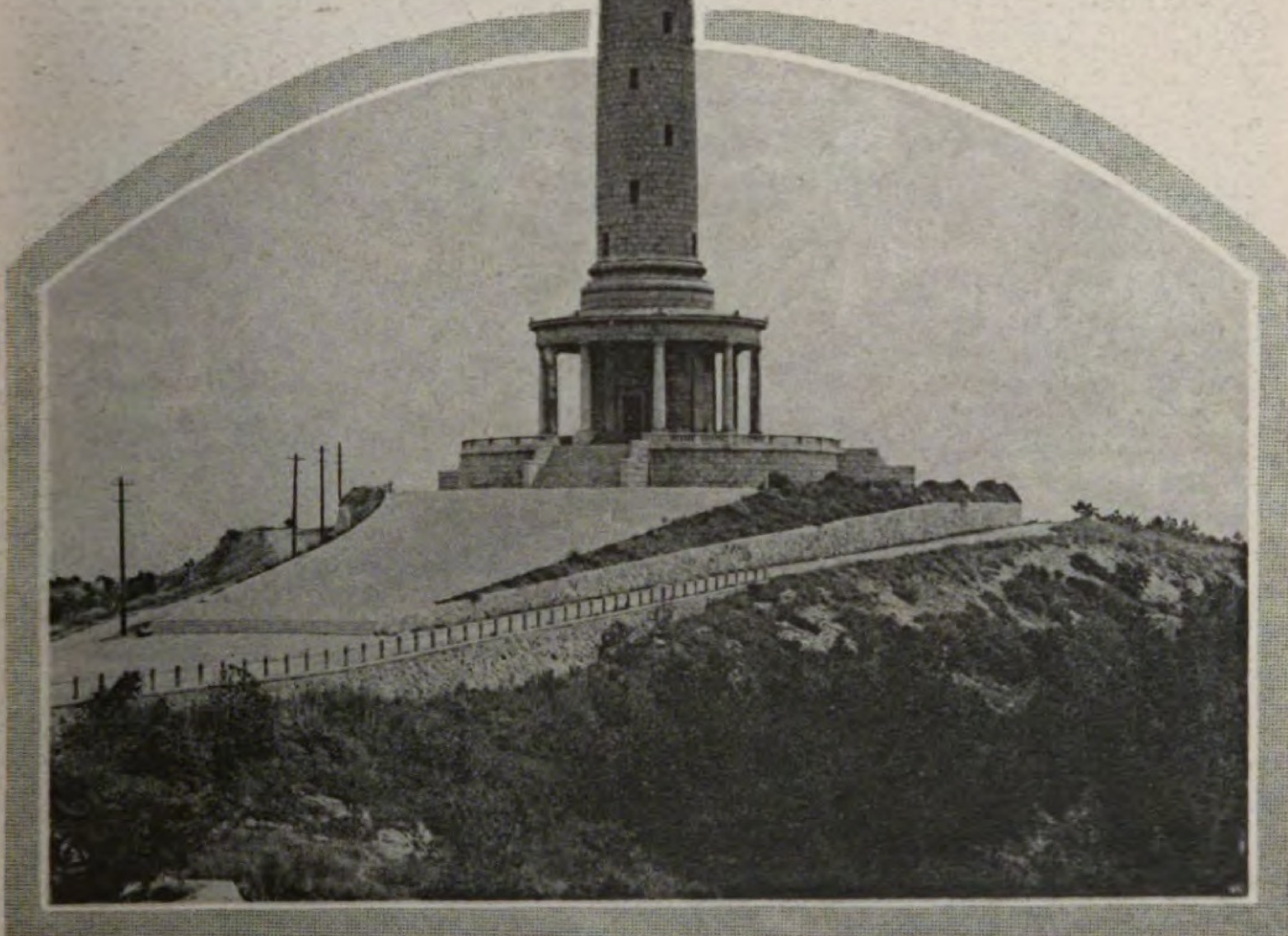
金州天齊廟の地獄



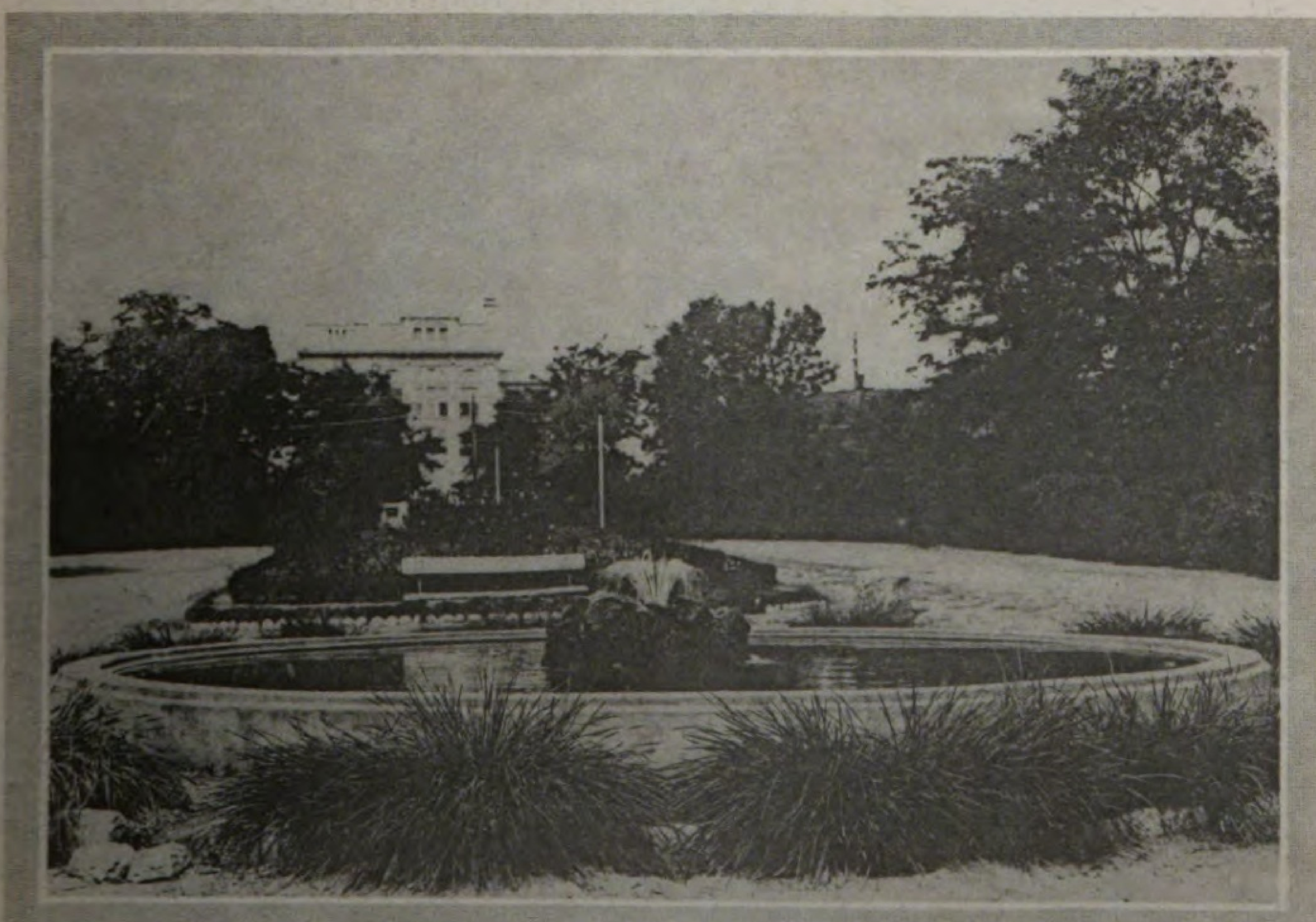
大連電氣遊園



普蘭店の鹽田



旅順表忠塔



旅順後樂園



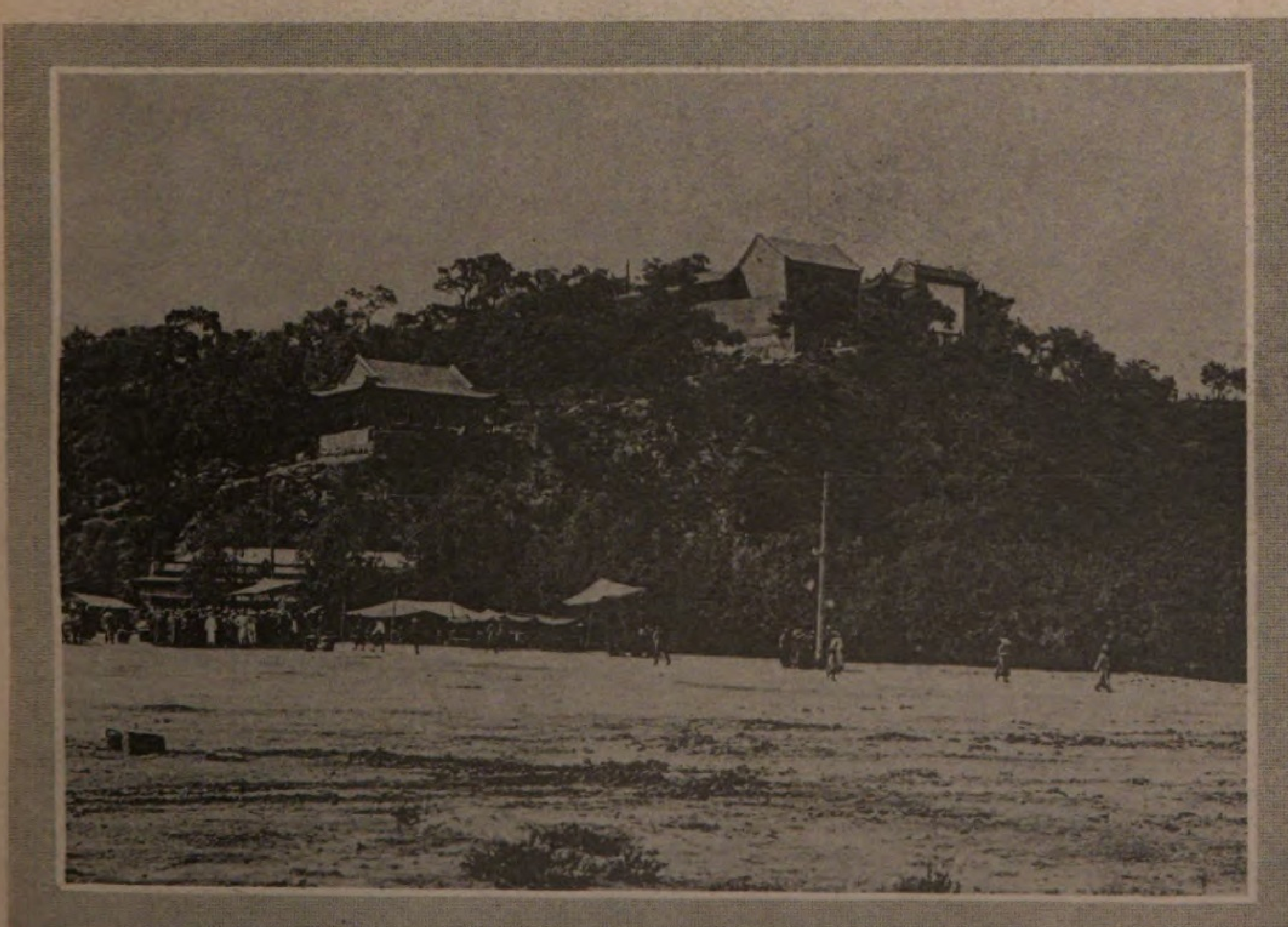
千山龍泉寺



支那婦人麻雀競技



安奉線鳳凰山



吉林北山

今日の滿鐵

一、沿革

會社の設立　帝國政府は明治三十八年九月五日の日露媾和條約に據り、東淸鐵道會社に屬してゐた長春、旅順間の鐵道及び其の一切の支線竝之に屬する權利、特權、財產及炭坑を讓受け、越へて三十九年六月七日勅令を以て當會社設立に關する規定發布され、同年十月一日會社設立の認可を得。同月二十六日創立總會を開き、翌二十七日東京に本社を設置し、設立委員長から一切の事務及び財產目錄の引繼を受け、同年十二月七日設立の登記を了つた。爾來開業の準備に從事すること四箇月、明治四十年四月一日野戰鐵道提理部其の他の官憲から鐵道其の他の引繼を受け、大連に本社事務所を設置し（同年三月勅令改正せられて本社を大連に支社を東京に置く事となる）業務を開始した。

會社の組織　當會社の組織は社長、副社長各一名、理事四名以上、監事三名乃至五名の役員を置く

事としたが、今歴代會社首腦者の氏名及任命年月日を記せば次の通りである。
一、明治三十九年十一月十三日男爵後藤新平總裁仰付けられ、同月二十六日中村是公副總裁仰付けらる。
一、總裁後藤男爵は明治四十一年七月十四日遞信大臣に親任せられたるを以て、同年十二月十九日中村副總裁は總裁に、國澤理事は副總裁に昇任した。
一、大正二年十二月十八日中村、國澤正副總裁滿期退任し、同月十九日野村龍太郎は總裁を、伊藤大八は副總裁を仰付けられた。
一、大正三年七月十五日政府は正副總裁を退任せしめ、新に男爵中村雄次郎を總裁に、國澤新兵衞を副總裁に仰付けられた。
一、大正六年七月三十一日總裁、副總裁を廢し、理事長を置く事となり、中村總裁は關東都督に親任せられ、國澤副總裁は理事長を仰付けられた。
一、大正八年四月十一日理事長を廢し、社長、副社長を置く事となり、翌十二日野村龍太郎は社長を、中西清一は副社長を仰付けられた。
一、大正十年五月三十一日野村、中西正副社長依願被免、新に早川千吉郎は社長を、理事松本烝治は副社長を仰付けられ、越へて十一年三月二十四日松本副社長依願其の職を免ぜられた。
一、大正十一年十月十四日社長早川千吉郎逝去し、同日理事島安次郎は社長事務取扱を命ぜられた。
一、大正十一年十月二十四日川村竹治新に社長を仰付けられ、同日島理事は社長事務取扱を免ぜらる。
一、大正十三年六月二十二日川村竹治依願被免、同日安廣伴一郎社長を仰付けらる。
一、大正十三年十一月十一日大平駒槌副社長を仰付けらる。
次に當會社の分課組織は創業以來屢々改正されたが、大正十一年一月十七日之を改めて重役合議制と

なし、各部の部長は社員中から拔擢任用する事とし、現在に至つてゐる。現在會社の職制は大正十二年四月二十一日に制定されたもので、本社を社長室、庶務部、鐵道部、地方部　興業部及經理部の五部に分ち、其の下に課を置いて業務を分掌させてゐる。其の他地方機關は事務系統に依り之を地方、運輸の二種に分ち、卽ち地方事務所及鐵道事務所の二と爲し　從來分立せる地方諸機關を統一した。

從事員　會社の從事員人員は大正十四年五月末に於て職員九千六百十七人、傭員二萬七千七百二十六人囑託百三十七人、計三萬七千四百八十人を算する。以上傭員中一萬五千二百三十四人は中國人であつて實に其の過半數を占めてゐる。

資本　會社の資本は初め金二億圓であつて內一億圓は政府の出資に係り、殘り一億圓は日支兩國人から募集した。然るに歐洲戰後社業の發展に伴ひ益々資金增加の必要に迫り、大正九年四月遂に增資を決行した。卽ち資本總額二億圓を四億四千萬圓とし、其の增加額の半額一億二千萬圓は政府が引受け、殘額一億二千萬圓は增資前の未募集株として殘つた二千萬圓と合せ、一億四千萬圓の新株を發行し、一般民間から募集する事とした。

配當　會社の會計は當初一箇年を二期に分ち、株主に對する利益の配當をしたが、會社の營業收入は運輸其の他の關係上前半期と後半期とは甚しい相違があるので、一箇年の決算を二期に區分するは妥當でない事を認め、大正元年度から全一箇年(四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る)を一會計

年度に改正した。會社の配當に關しては毎營業年度の利益配當が一般株主の拂込金に對し年六分の割合に達せない時は　設立登記の日から十五箇年間日本政府からその不足を補給される事となつてゐる。右補給を受くる期間内毎營業年度經過前一回を限り　政府以外の株主に對し中間配當として毎年十二月一日現在の株主名簿に依つて其の拂込金額の年三分に當る金額を分配し、爾後は株主の異動に拘らず六月一日現在の株主名簿に依る事となつた。利益配當金は中間配當金を控除した殘額を以つてする事とした。

然るに大正十年十二月六日を以て前記補給期間は自然消滅したけれども、中間配當の制に就いては從來通り存續する事とした。

尚政府に對する配當としては、利益金が一般株主に對し年六分の配當を爲し、且社債利子を支拂ひ尚殘餘あるときは該殘額は總株式の各拂込高に對し、配當割合均一に至る迄政府持株に配當するの定ではあるけれども、特例を以て政府持株に對する利益配當が年四分三厘の割合に達したときは、一般株主の拂込金に對し年四分の割合を超へない範圍内で第二配當をなす事とした。

二、會社の事業

會社本來の業務を概括すれば鐵道(倉庫及工場を含む)、海運、港灣、鑛山　製鐵　電氣、旅館及地方

經營事業に大別する。今其の各事業に關する概況を擧ぐれば次の樣である。

鐵道

南滿洲鐵道は其の營業哩六九四・八哩にして、起點を大連に發して北延し、京奉線の起點奉天を通過し四平街を四洮鐵道と丁字形に結び、更に大小幾多の都邑を點綴して遼河及松花江流域の分水嶺を越へ、長春で東支及吉長兩鐵道と聯絡する四三九哩の幹線と、鴨綠江畔安東を起點とし、蘇家屯で南滿洲幹線に合する安奉線一六二哩と、其の他の五支線九五哩を有して滿洲の動脈をなし、東支鐵道と共に歐亞聯絡世界交通路の一部を爲し、且つ豐富な農產物の輸送機關として滿洲及蒙古開發に當つてゐる。

建設 會社が明治四十年四月一日政府から引繼を受けた鐵道は大連、長春間本線、旅順支線、柳樹屯支線、煙



奉天驛の汽車



五龍背溫泉

臺支線、撫順支線、安奉線の七線であつて、會社は上記鐵道の引繼を受くると共に、安奉線を除くの外、全線を四呎八吋半の廣軌式に改築を計畫したが、旅順支線の廣軌先づ成り、明治四十年十二月一日初めて廣軌車の運轉を行ひ、翌四十一年五月三十日から本線及撫順、營口兩支線共に總て廣軌列車の開通を了つた。複線工事も亦改築工事と同時に著手し、竣工するに從ひ區間運轉を開始し、明治四十二年十月二十七日大連、蘇家屯間二百三十八哩三分の開通を見るに至つた。此の改築及複線工事に要した費用は約千九百十一萬二千圓である。

安奉線は前記の各線とは全く其の成立を異にし、日露戰役中我が第一軍の急設した二呎六吋の輕便軍用鐵道であつて、帝國政府が明治三十八年十二月の滿洲善後協約第六條に依り我國に於て各國商工業の貨物運搬用

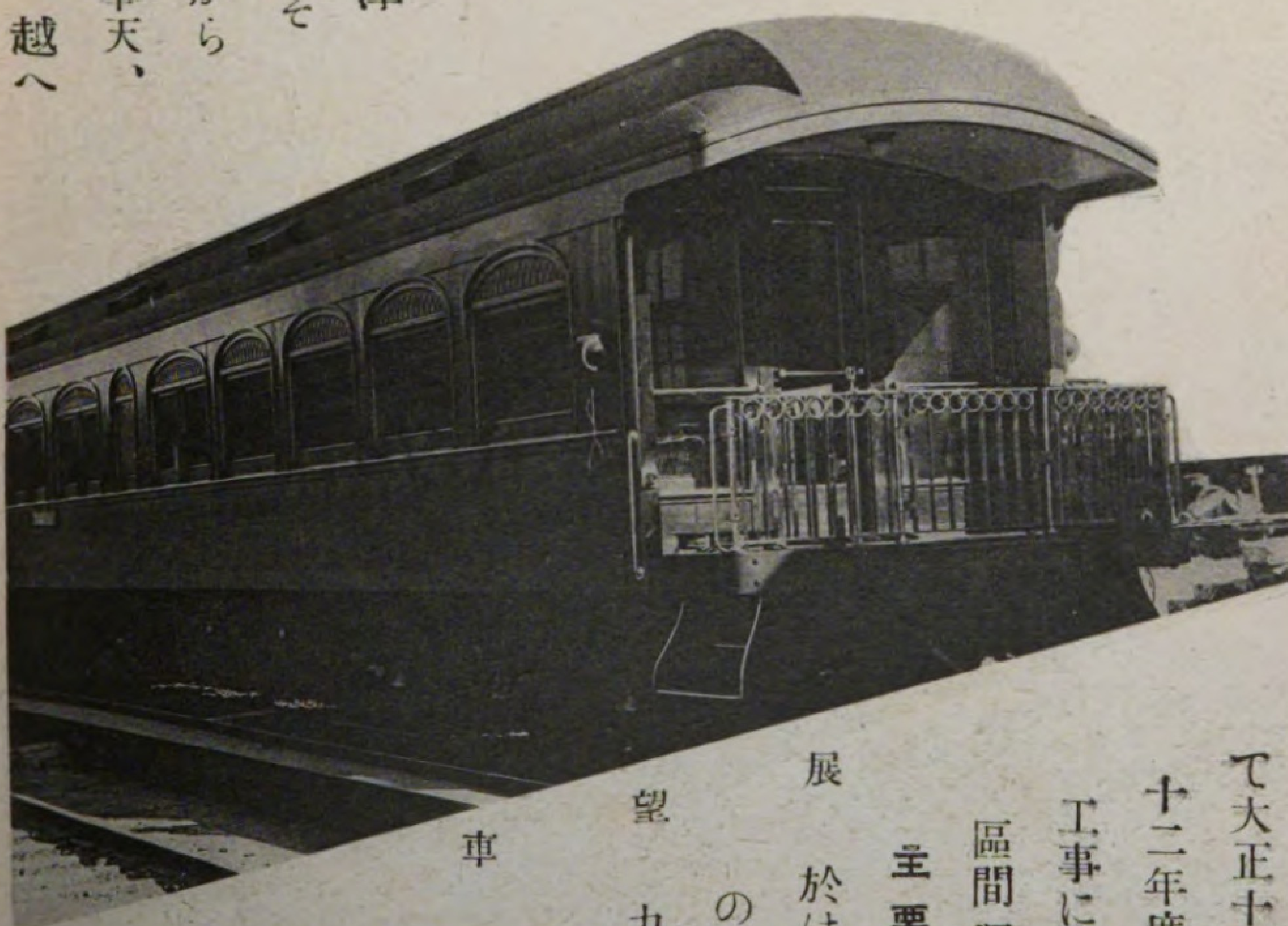
鐵道に改築し、引續き經營する事を清國政府と協約したものである。而して該鐵道は前記鐵道本線と共に野戰鐵道提理部から會社に引繼がれたのである。然るに安奉線は山嶺重疊、溪谷の地に在るので線路の選擇は容易でないのみでなく、施工に關しても清國政府との協議が纏らなかつた爲め起工を遷延し、漸く明治四十一年七月になつて初めて福金嶺の隧道工事に著手する事が出來た。爾來奉天及安東の兩端から工を起し、輕便線の兩側に廣軌條を敷設し以て工事中輕便線の運轉を妨げない事の方法をとり、又同時に清國官憲と交涉して用地買收に從事し工成るに從ひ漸次兩端から廣軌列車の運轉を開始して工事の進捗に努めた。而して福金嶺（四、八八四呎）、鷄冠山（三、二五四呎）の二大隧道を初め、太子河の橋梁（一、七七一呎）其の他多數の隧道及び大土工を要し、工事甚だ困難を極めたけれども、二年三箇月にして竣成し、明



一等寢臺車

治四十四年十一月一日全線百六十哩の開通式を擧行した。此の工事に要した費用は約二千五百萬圓である。更に蘇家屯以北も亦複線に改むるの必要があつたので、先づ蘇家屯、奉天間に之を施工する事とし、大正四年六月に著手し、大正九年十一月渾河橋梁の架設を竣り、遂にその全通を見る事を得た。之から先大正八年度に於て更に奉天、長春間の複線工事に著手し、越へて大正十年に吳家屯、蘇家屯間大正十二年度に蘇家屯、撫順間の複線工事に著手し、之亦竣工に從つて區間運轉を始めた。

主要設備 大正十三年度末に於ける主要設備を擧ぐれば次の通りである。營業哩數六百九十四哩八分、停車場數、百十七驛、機關庫及客車庫數、機關庫十二箇所、客車庫三箇所、倉庫營業驛所數、大連埠頭外三十二驛所、車輛數、機關車四百五輛、客車數四百一輛、貨車類六千五百九



展望車

輛。

運轉　廣軌複線工事の完成、特產物輸送增加、歐露客貨聯絡等の事由に依り運轉狀態に一大革新を招致したのは勿論であつて、旅客列車では車輛の改善こ相俟つて漸次其の設備の完美に意を注ぎ、且つ運轉回數を增加し、又發著時間に就いても種々考慮を廻らして旅客の便を圖り、殊に內地この交通に於て大連埠頭では大阪商船株式會社定期船出帆當日に限り埠頭まで列車を運轉して船車の聯絡を圓滑にし、又奉天・釜山間には直通旅客列車を運轉し關釜聯絡船に依つて日本內地鐵道こ接續する。而して大連、長春間及奉天、釜山間の直行旅客列車には食堂車竝一、二等寢臺車を連結して長途旅客の便に供してゐる。現在大連、長春間及奉天、釜山間直行旅客列車は一日三回で、內一回は急行列車であるが、奉天、釜山間の急行列車には三等寢臺車を連結した。又貨物列車に就



奉天停車場

では逐年激增する出貨に適應すべく、列車回數の增加と牽引力の加重及運轉時間の短縮等、輸送の敏活、擴大の施設に就いて最善の努力を拂つてゐる。

運輸 旅客及貨物の輸送竝運輸收支は開業以來著しい進步を來した。今其の毎年の成績を記せば次の通りである。

年度	乘車人員	客車收入	貨物噸數	貨車收入	總收入	支出
明治四十年度	一、五三三、三三一人	三、五九四、三三九円	一、四八六、四三四米噸	六、一六〇、三七四円	九、七六八、八八七円	六、一〇一、六一五円
同四十一年度	一、八六八、一四〇	二、九六四、五八七	二、六〇九、〇三六	九、五四二、三六二	一三、五三七、一四二	五、一六一、四〇八
同四十二年度	二、一七九、〇六二	三、二五〇、四一二	三、五六八、五二七	一一、二四一、八五九	一五、〇一六、一九八	五、八一八、三三三
同四十三年度	二、三四九、〇八八	三、二六四、六三九	三、九二三、一六四	一一、六四一、五二九	一五、六七一、六〇五	六、五四二、六四〇
同四十四年度	三、一五八、二七〇	四、二七三、四二三	四、七〇五、六九〇	一三、四七一、四一五	一七、五二六、二八八	六、九〇八、三五四
大正元年度	三、九〇五、八二三	五、〇〇八、六三三	四、六八一、六九八	一三、九一三、三四一	一九、九〇七、四五六	七、八四六、九二三
同二年度	四、一四三、六八七	五、〇六九、一二七	五、七八二、一六一	一六、一五九、一七一	二二、二七五、一三二	七、九一三、九四八
同三年度	三、六一七、五四七	四、三六七、一六八	五、七〇五、九四八	一七、五五〇、一五〇	二三、二一六、七三三	八、三四五、二八六
同四年度	三、七〇八、一六五	四、八四二、三三八	五、八六〇、七一六	一七、二六〇、六五五	二三、五三二、一一八	八、一七四、五二〇

同五年度	四、四一〇、八一六	六、〇四〇、四五三	六、二三九、七五七	一九、八八二、四七六	二七、八一五、三四九	八、四三五、九三九
同六年度	五、八四四、九二九	八、一三六、七〇七	七、二七四、一七七	二三、七九三、〇五六	三四、四五七、九二三	一〇、八五八、七三四
同七年度	七、四九一、九四六	一〇、九一一、三八二	八、三三四、〇八四	三〇、三七七、六八二	四四、九九二、八七二	一七、〇三八、一五七
同八年度	九、二七四、一一四	一四、二四三、七九〇	一〇、〇九六、六七二	四六、三〇五、七五九	六七、〇六〇、七二〇	三〇、五二八、九三八
同九年度	八、一三三、四一一	一四、六五九、三三七	一〇、一五四、二五九	六三、八六七、〇三〇	八五、三一六、八〇六	三六、七六〇、二六四
同十年度	六、九二六、六一九	一二、一九四、二八八	一〇、四〇〇、二〇八	五九、六一五、八三五	七八、二〇四、一三一	三三、一七二、七一六
同十一年度	七、六四五、〇六八	一二、三八九、四六四	一二、〇四三、八七〇	六九、五一八、一一一	八七、八一三、〇二九	三四、一六九、二八五
同十二年度	八、七六二、八六二	一三、四三一、八五六	一三、三七一、六七三	七二、五八二、七五七	九二、二六九、七〇四	三五、七八七、五八九
同十三年度	八、七三二、七一八	一三、六四五、五三八	一四、五八八、四三七	七七、〇一九、三六八	九二、五六一、七三三	三六、五五三、二九七

備考　總收入中には雜收入を含む

卽ち鐵道收入の約八割は貨車收入の占むる所であつて、客車收入は僅かに二割内外に過ぎない。而して輸送貨物の主なるものは大豆、豆粕、雜穀の樣な滿洲特產物竝當會社の撫順炭であつて、大部分は輸出品に屬し、爲に特產物の出廻り時期である冬期には貨物輸送の繁忙は甚大なものである。近來又奥地の開發に伴ひ輸入品たる綿糸、絹布、砂糖、石油、機械、金物類、建築用品等の輸送が次第に增

加して來たのは注目に値する。又旅容に對しては特に待遇の方法を講じ、且又國際鐵道といふ地位からして隣接各線の間に聯絡運輸の成立を期し、著く豫定の方針を進めてゐる。

倉　庫　會社は明治四十一年埠頭保管なる名目の下に小規模の倉庫營業を開始し、埠頭に送致の貨物保管を爲すを目的とし、之に對し倉庫證券を發行した。而して鐵道沿線では主要驛の倉庫上屋及野積場の修築完成を俟ち、明治四十二年十一月以來主として輸送貨物の輻輳を緩和するといふ目的で發送貨物保管なる名目の下に、滿洲特產物の野積保管（無料金）制を設け、之に一種の證券を發行して、金融を得るの途を開いた。然し、以上二種の倉庫業は共に規模狹小で、組織、制度も亦甚だ不完全なので、明治四十四年九月以來、大連埠頭と共に沿線三十二驛所に漸次正則の倉庫營業を開始して、荷主の金融を容易ならしめ、併せて奥地各驛に於て發送の目的で貨物を寄託した場合には倉敷料を免除するの方法を設け、以て冬期各驛の貨物輻輳を緩和するの策を樹てた。又、穀物に對しては大正元年囤積保管の制を開き、其の後更に輸出大豆、豆粕、豆油及小麥に對しては、品質、重量の統一及保管の便宜を圖つて、所謂混合保管の制を設けた。然し現在之が實施されてゐるのは、大豆、豆粕のみである。而して大正十三年度に於ける倉庫營業は貨物の受入四百五十九萬噸、拂出四百五十四萬噸、一日平均在庫數二十六萬二千噸に達した。會社は又倉庫營業の開始と同時に、明治火災保險會社

外二十社と特約し、引渡し未了の船舶陸揚貨物の外、寄託物は荷主の委任を受けずして之に火災保險を附し、保險料は當分會社に於て負擔する事とし、先づ大連埠頭に保管する貨物に對し實施した。而して其の保險契約金額は大正十三年度末に於て三千二百五十九萬八千百圓を算した。

工場　鐵道に關する工場は引繼當時に於ては大連驛構內に極めて粗造なものがあつたが、明治四十一年度の後半期から北沙河口に一大工場を設立すべく同事業に着手し、明治四十四年八月九日全部の作業を開始するに至つた。此の工場は規模甚だ廣大で獨立の水道を敷設し、敷地約二十七萬七千坪、煉瓦二階建事務所の外、建物七十三棟、約一萬九千坪に達し、最新式の設備を具へ、機關車二十七輛、客車三十六輛、貨車百三十輛を同時に收容し　傍ら諸機械及び諸用品の製作修理を爲すの能力を有



沙河口工場

してゐる。

工場の新設と同時に之に隣接してゐる土地約三十一萬三千坪に市街建設の計畫を爲し、工場從事員の社宅を建築し、道路、溝渠、排水、給水一切の市街施設をなし、小學校、診療所、郵便局、貸店等を附設し、大連との交通には電車の便を開き、既に工業市を形成してゐる。

右新設工場の外、遼陽に分工場があつたけれども、大正八年十一月職制上之を獨立の工場と爲した。

其の他蘇家屯に木材防腐場を置き、鐵道、枕木、電柱、杭木等各種會社用材に「クレオソート」油を注入し、防腐作用を行ひ、又大連に電氣修繕場を置いて電信、電話に關する機械、器具の修理竝電氣用品の試驗を掌る。

海　運

廣軌列車の開通に伴ひ歐亞交通上の便宜を圖るべく明治四十年八月十日大連、上海間の定期航路を開始したが、



大連埠頭待合所の玄關

此の航路は滿洲を經由して上海と歐洲との間に於ける最捷通路であるから、此の施設は極めて樞要なものであつた。後本航路に青島を加へ、且日清汽船會社航路、楊子江主要港竝膠濟鐵道線との相互間に於ける貨物の聯絡運送を開始し、逐年順調な發達を來した。會社は又船車接續及大連中繼貨物吸收の必要上撫順炭の香港及廣東行の便船と相俟つて香港航路を開始し、途中芝罘及青島に寄港させる事とし、又大連と渤海沿岸各地の發展に資する爲淺吃水船數隻を建造し、大連汽船株式會社に貸與して近海航路に從事させてゐたが、大正五年就航船全部を同會社に讓渡し、次で大正七年には前記香港航路の經營を同會社に移讓し、大正十一年七月一日上海航路も同會社に經營させる事とした。大連汽船株式會社は資本金三百萬圓（六萬株）であつた會社は其の金額を出資してゐる。



大連埠頭大豆野積

港灣

引繼當時の大連港は露國時代の計畫が殆が進捗してゐなかつた爲、殆ど見るべき程のものはなかつた。然し會社が引繼いでからは、大體に於て露國の計畫を踏襲すると共に、深く想を將來に馳せ既成部分の改善修築竝未成工事に對する適應の進捗を計り、或は新規の方途を案じ著著其の工程を進め、今日では其の大半を了し、現に延長一萬千九百尺の西北防波堤と千二百二十一尺の東防波堤で包擁する内港岸壁延長一萬四千百九十六尺を有し、水面積は九十五萬坪（實際使用し得べき水面積約九十三萬坪）で、一日に十八萬噸の船舶を收容し、年額約六百萬噸の貨物を呑吐するの能力を具備してゐる。更に會社は將來に對する擴張計畫を立て、已に大正十二年度から丙埠頭及第四埠頭の築造に著手し、大正十八年度には完成の豫定である。之が完成の曉には繫船岸壁五千五百尺を



大連港口より滿鐵埠頭事務所を望む

增加する筈である。

大連港内の浚渫工事は明治四十一年からの經續工事であつて、內港を干潮面下二十三尺乃至三十五尺に、港外航路を同三十六尺に浚渫するのである。

埠頭施設の主要なるものを擧ぐれば、倉庫及上屋七十七棟、九萬三千四百四十八坪、野積場約七萬五千坪、小蒸汽船十七隻、ライター二十九隻、給水船、殺鼠船、給炭船等の船舶並に荷役用揚貨機（一噸半乃至四十五噸）十基、荷繰用自働車六臺、自働給炭機一臺、機關車十四臺、貨車二百五十輛等を設備し、且浮標信號裝置等を改良し、現在では船舶の出入著離、貨物の積卸保管等に隨分こ便利になつた。

會社は繫船岸壁著離の安全を期し、總噸數千噸以上の船舶に對して强制水先制度を設けてゐる。然し其の船舶には水先料を負擔させない。更に岸壁使用料をも徵收せず、只著離に際し使用する小蒸汽船其他の費用こして發著手數料を徵收するのみで、斯うした事は東洋諸港に其の類例を見ない所である。而して埠頭の荷役噸數は大連港の發展に伴ひ逐年增加するので、玆に「クレーン」裝置及大規模の石炭棧橋架設の計畫を樹て目下之等を設備中である。

今埠頭荷役直營後大連埠頭に於ける著埠汽船數、船舶及貨車積卸噸數及其の營業收支を擧ぐれば次の通りである。

年度	著埠汽船數	船舶積卸噸數	貨車積卸噸數	埠頭營業收入	同上支出
明治四十年度	隻 一、一四三	米噸 九一九、九五二	米噸 四一七、八六〇	円 五七二、四九三	円 五六〇、一五一
同四十一年度	一、三九七	一、〇七〇、一三一	一、〇八二、六八一	一、〇三〇、八二八	八四六、六七六
同四十二年度	一、三七六	一、三六六、五九八	一、二六三、九四六	一、三八〇、七三一	一、一三三、二九二
同四十三年度	一、五七四	一、四八四、七一九	一、二四八、三九六	一、一六七、八一八	一、〇二六、二七六
同四十四年度	一、七五二	一、四〇七、九六八	一、二〇二、八七一	一、〇九一、三九九	九七一、四二九
大正元年度	一、九六八	一、九七七、八八七	一、六六二、三一一	一、三八八、五六八	一、一七二、五五八
同二年度	二、〇八三	二、三六〇、七六六	二、〇三五、八〇〇	一、五〇〇、三三三	一、二八三、七四五
同三年度	二、二八〇	二、六六八、三三〇	二、四二一、〇〇二	一、八六〇、一〇七	一、五五四、三〇二
同四年度	二、〇一一	二、四〇四、八七九	一、九九一、一五九	一、八一一、三八七	一、四七八、六二九
同五年度	一、九二五	二、七三三、八九六	二、四五八、三六〇	二、〇一四、〇三〇	一、六九八、五三五
同六年度	二、〇七二	三、三二一、一八六	二、八一三、一八六	二、八一三、四九一	二、五四五、七一五
同七年度	二、七二九	三、八九七、二五五	三、一八五、三二〇	三、七九四、二二九	三、八九七、五八三
同八年度	二、九六九	四、六三五、七二九	三、五四二、一二五	五、二九五、五六五	六、六五二、二一三
同九年度	二、九四四	四、三六一、五六三	三、七九九、三五八	六、九一〇、七七八	六、八〇二、一五〇
同十年度	二、八二五	四、八四二、四八三	四、六八五、一四八	七、一七四、二七一	五、六八九、二二三
同十一年度	三、一七一	五、九四六、四〇七	五、三七〇、六七三	八、二二二、八七八	六、〇三二、七六七
同十二年度	三、〇〇五	六、一七〇、二一八	五、五九九、三〇三	七、五二三、五九四	五、八九五、三八四
同十三年度	三、二一四	六、五七七、九五〇	六、四五二、八七二	八、二八〇、二五九	六、八一一、六四六



滿鐵安東埠頭

此の他會社は又石炭の積出に便する爲、明治四十三年一月四日旅順港内の海面使用、石炭積出假棧橋の新設及海底一部の浚渫を爲す事を其の筋から許可されたので、右假棧橋の築造及石炭船の碇泊に必要な浚渫を了し、既に石炭の積出を爲し得る樣になつた。營口にも亦明治四十三年十一月以來埠頭事務所支部を設け、護岸棧橋其他の工事を施行し、倉庫及上屋八棟、六千九百十五坪を建造し、鐵道と聯絡して鐵道其他輸出入貨物を取扱つてゐたが、大正三年組織改正の爲營口驛に引繼をなした。安東にも明治四十五年四月から支所を開設し、護岸、貯木池其他工事を施行し、倉庫及上屋九棟、二千七百十五坪及貯木池面積三萬餘坪を設備し木材其他輸出入貨物の取扱を爲したが、是亦組織改正の爲安東驛に引繼いだ。上海にも同航路の發展及貯炭等の目的の爲それに必要な埠頭設備をなし、明治四十

四年十月から埠頭事務所上海支所を開設したが、大正十三年二月十九日上海事務所と改稱し、鐵道部の管理に之を移した。

船渠は大連に露國時代の築造に係るものが一つある。長三百八十一呎、底幅三十二呎餘、深さ二十五呎、渠口は兩開扉式にして工場其他の建物二十八棟が附屬されてゐる。會社は明治四十年他の財産と共に當時之を管理せる海軍から引繼を受け、一時は其の從事員をも繼承し、會社自ら事業を經營したが、明治四十一年七月川崎造船所に貸付け、それを經營させる事とした。該船渠は僅に二三千噸級の船舶を入渠させ得るに過ぎなかつたので、會社は時代の要求に應じ、大正二年三月、六千噸級迄の船舶を入渠させるの擴張工事に著手し、大正三年三月竣工した。然るに大正十一年十二月一日、會社は旅順要港部修理工場の設備一切を繼承したので、之を旅順工場と命



滿鐵營口埠頭

名し業務を開始したが、大正十二年三月三十一日限り之を廢止し、前記船渠と合せて其の業務一切を滿洲船渠株式會社に引繼いだ。滿洲船渠株式會社は資本金二百萬圓(四萬株、拂込額八十萬圓)で、當會社の全出資に係るものである。

礦　　山

會社が當初政府から引繼を受けた炭坑は撫順、煙臺及瓦房店附近に於ける炸子窯の三坑であつたが、明治四十年七月露國政府から長春附近の石碑嶺及陶家屯炭田の引渡を受けた。現に會社の採掘する炭坑は撫順、煙臺の二坑であつて、炸子窯坑は邦人某に賃貸し、石碑嶺、陶家屯の二炭田は其後經營に著手しなかつたが、大正七年南滿鑛業株式會社に經營させる事とした。

撫順炭礦　奉天省撫順縣下奉天の東約二十哩の地點に位し、渾河と隔てゝ撫順城と相對してゐる。礦區の面積は約千八百二十萬坪であつて、炭層の厚さは平均約百三十尺、含有炭量は少くも九億噸に上るの測算である。而して政府から炭坑の引繼を引受けた當時は、千金寨、楊柏堡、老虎臺の三坑のみであつて、而も其設備は總て軍事の必要に應ずる急造的のものであつたから、會社は初め九百二十萬圓の豫算を以て第一期計畫を立て、千金寨、楊柏堡に大山坑及東鄉坑の二大竪坑の開鑿を完成すると共に各種設備の改善を行ひ、一日能く五千噸の出炭をなすに至つた。然し其の後需要の增進に伴つて第二期計畫を樹て、主として萬達屋斜坑の開鑿、古城子露天掘、灑砂充塡法の實施、モンド瓦斯發



撫順炭礦大山坑

電所の建設、運炭線、採砂線の電化、龍鳳斜坑の開鑿、千金寨露天掘、新屯斜坑開鑿等であつて、其の結果一日平均約一萬五千噸、年額五百萬噸內外の出炭能力を持つやうになつた。

然るに一方支那住民の燃料は漸次高粱稈から石炭に移りつゝあると同時に、鞍山製鐵所の完成と各種工業の勃興に因り、從來の狀態では到底其の需要に應じ得ない事に想到し、更に之が增掘の一大計畫を立てた。先づ其の一部として大正八年九月龍鳳坑で大竪坑の開鑿に著手し、大正十一年十月之が掘進作業を終了し、又古城子村落以東楊柏堡川に至る炭層の殘部は、露天掘に依り全部之を開掘する所謂大露天掘の計畫を以て、九年度から急速に千金寨露天掘を擴張して、古城子露天掘に連結しやうとしてゐるから、之等計畫が完成の曉には總採炭額坑內掘で三百萬噸、露天掘で三百萬噸

の出炭を見るであらう。尙撫順礦區に接續する塔連坑は東洋炭坑株式會社が經營してゐるけれども、同坑の炭質は新屯坑及龍鳳坑と其の炭質を同ふして粘著性に屬し、「コークス」製造用として好適なので、會社は製鐵所其他の用として大正九年十二月一日同坑の經營一切を買收した。

撫順炭は日本炭と同じく第三紀層に屬し、其の色は漆黑で光澤强く揮發分に富み、燃燒熾盛で七千百カロリーの火力を有する有煙炭である。其の特色としては灰分極めて少量でクリンカーを化すること少く、又硫素分を含有することが少いから汽罐を損傷することはない。即ち撫順炭は揮發分に富むが故に瓦斯製造用としては日本產一等炭に比肩し、更に機關車及船舶用にも大いに適用されてゐる。撫順炭は概して粘結力に乏しく爲に骸炭製出には不適當として認められて來たけれども　同炭田の東に進むに從ひ漸次粘結力を加へ　萬達屋坑炭は本溪湖炭の樣に粘結炭と混合すれば骸炭用に供する事が出來るが、此の性質は東端に近づくに從つて益々向上される。

煙臺支礦　煙臺停車場の東北約十哩の地點に在つて其の間に鐵道の便がある。炭田は東西約十三町、南北約五十町に亘り、炭量約二千萬噸に上る見込である。同坑は當初探礦其の他の豫備工事を爲すに過ぎなかつたが、明治四十三年十月一日から營業坑と爲し、現今一日の出炭力は三百噸內外、其の質は半無煙炭で特殊の需要がある。

現今每年度に於ける撫順炭及煙臺炭の出炭高を記せば次の通りである。

年度	撫順（英噸）	煙臺（英噸）	計（英噸）
明治四十年度	二三三、三二五	—	二三三、三二五
同四十一年度	四九〇、七二〇	—	四九〇、七二〇
同四十二年度	七〇六、〇四二	—	七〇六、〇四二
同四十三年度	八九八、四八二	一五、二三一	九一三、七一三
同四十四年度	一、三四三、一九八	三九、三二六	一、三八二、五二四
大正元年度	一、四七〇、一五〇	四三、一〇四	一、五一三、二五四
同二年度	二、一八五、四五三	九五、三〇〇	二、二八〇、七五三
同三年度	二、一四七、四三二	九六、八一五	二、二四四、二四七
同四年度	二、一六九、二四五	七一、〇二六	二、二四〇、二七一
同五年度	二、〇三九、五七八	九一、六四五	二、一三一、二二三
同六年度	二、二七五、九〇五	一一三、六七九	二、三八九、五八四
同七年度	二、五二一、一六四	一〇六、三六八	二、六二七、五三二
同八年度	二、九二八、一八六	一一〇、一六七	三、〇三八、三五三
同九年度	三、一二九、八三五	七九、五四八	三、二〇九、三八三
同十年度	二、七二七、七〇〇	五〇、七七七	二、七七八、四七七
同十一年度	三、八五八、六二九	六三、〇九八	三、九二一、七二七
同十二年度	四、九二九、五八五	九九、九七六	五、〇二九、五六一
同十三年度	五、五三八、六一四	一〇三、八五〇	五、六四二、四六四

販　賣　會社は普く海外に撫順炭の性質を廣告するに力を盡すと同時に滿洲内部の需要を喚起するに努め、殊に大正九年度以來踏襲して來た輸出炭竝船舶焚料炭の積極的販賣政策は愈々成功し、我撫順炭の聲價は益々昇がつて大連港石炭の積出は空前の活況を呈する樣になつた。從來會社は日本内地及海外への輸出炭は三井物產、三菱、南昌洋行に委託販賣させてゐたが、石炭需要の增掘計畫と共に東京に撫順炭販賣株式會社を新設して前記輸出炭を取扱はせ更に販路を擴張させてゐる。撫順炭販賣株式會社は資本金參百萬圓の半額拂込である。

市街經營と附帶事業　撫順炭礦の開發と共に同炭礦の附帶事業として一大市街を建設し、之に電氣鐵道を敷設し、水道、瓦斯、電燈、電話等諸般の施設を行ひ、外に副業として發電工場、硫酸工場、骸炭工場等を經營し、以て炭價の低減を圖つてゐる。

油母頁岩　本工業は撫順炭礦に埋藏せられてゐる無慮五十億噸餘の油母頁岩を利用し、採油事業を企圖するものであつて、先づ以て露天掘に伴ふ約五億噸の同岩から採油を始めやうとするものである。

本岩の工業的價値に就いては明治四十年來當會社の大いに研究を重ねたものであつて曩に中央試驗所で研究調査したところに依れば、充分な工業的安全率を見込んで之を工業的に實施作業しても採算の見込ありとの結論を得たのであるが、會社は更に地下採掘に依る原料で果して經濟的に操業し得るや

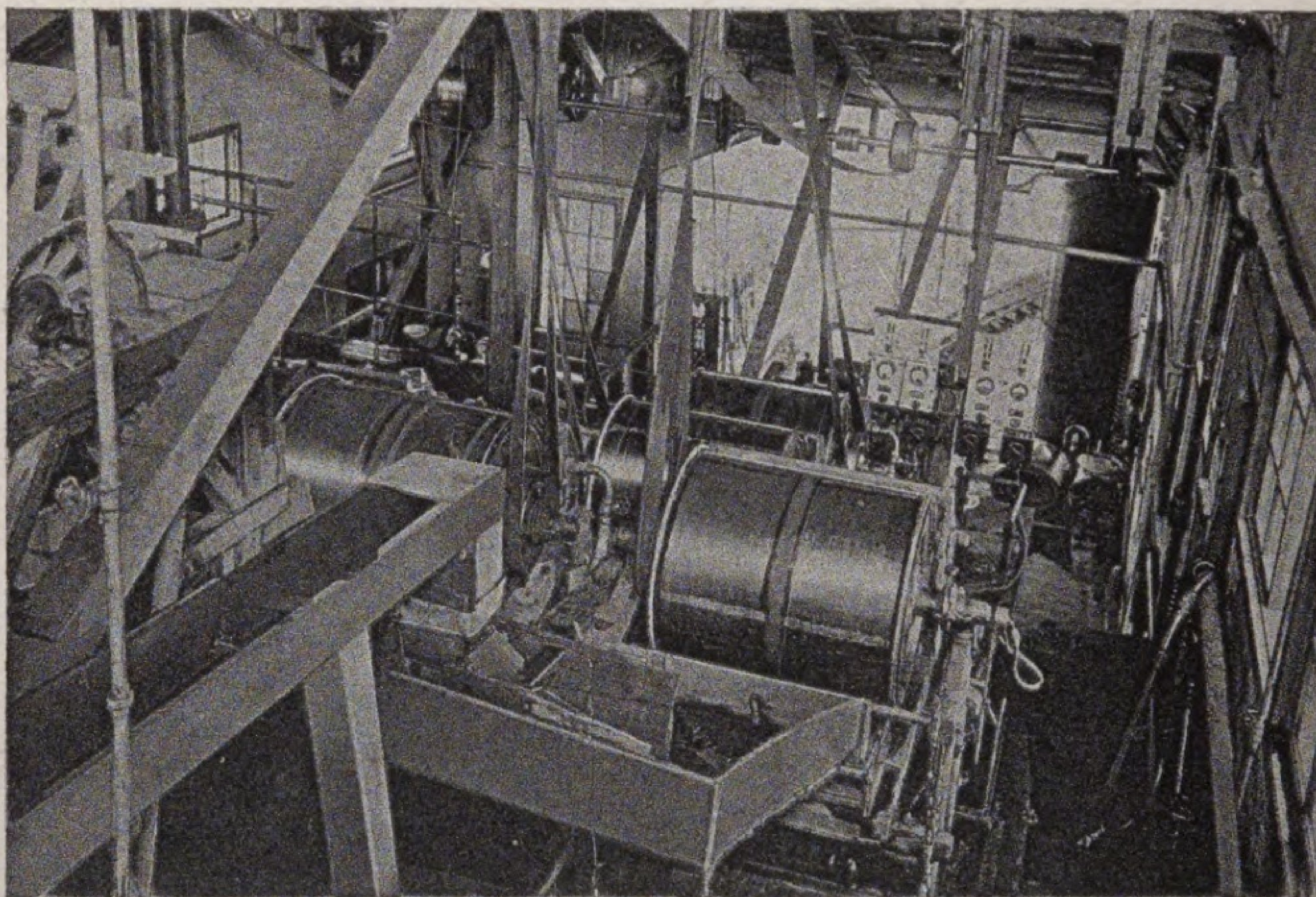
否やを調査させる爲に頁岩五百噸を蘇格蘭に送付し、同時に社員を派遣して充分に學術的調査及海外に於ける實地工業的企劃に就き調査させてゐる。右の結果採算の見込が付くならば一日二千噸、年額七十萬噸處理の工場を撫順に建設するのであるが、粗油、精製程度は成る可く限定し、單に揮發油及「パラフヰン」の搾取に止めやうとして目下之が設備竝計畫上考慮してゐるの狀態である。今右に依る諸製品及其の生產豫想年額を擧ぐれば先づ次の樣である。

重油	約五萬噸	揮發油	約百萬「ガロン」
石蠟	約四千噸	硫安	約九千四百噸

撫順炭礦露天掘擴張計畫に伴ひ、現在市街地は他に移轉するの必要を生じ、會社は市民側と折衝の結果大正十二年一月四日之が買收を了し、一方會社は礦區中央部の北端で炭層を全く離れた永安臺に新設市街地を選定し、十二年度から水道、道路等の施設工事に著手した。

鞍山製鐵所

鞍山鐵鑛區の存在する事は明治四十二年會社地質研究所員に依り發見せられたのであるが、大正四年五月、日支條約關係公文に依り鑛山採掘が出來るやうになつたので、大正五年三月、日支合辦鞍山鐵鑛振興無限公司を設立し、鑛石及石灰石は同公司から供給するの契約の下に滿鐵本線鞍山驛と立山驛との中間に一大製鐵工場を經營し、將來一箇年銑鐵百萬噸(製品八十萬噸)を製出するの計畫に基き、



鞍山製鐵所選鑛工場

差當り大正八年四月二十九日鎔鑛爐一基に火入れを爲し、五月一日初めて出銑を見た。作業開始後今日に至る迄六箇年餘、其の建設投資額約四千萬圓で、現在設備の大要を擧ぐれば用地約二百萬坪、鎔鑛爐二基、骸炭爐四基、其他工場に必要な水道設備、動力設備を完備してゐる。然し開設以來鎔鑛爐は其の一基のみを操業し、現在一箇年生産量約七萬噸乃至八萬噸に過ぎない。斯うして生産量を制限したのは全く次に述べやうとする貧鑛處理の問題が未解決であつた爲である。鞍山一帶の鑛區は鑛量に於ては他に比類少ない程豐富であるけれども、其の含鐵分は大抵三十五乃至四十%の貧鑛で、此の儘之を使用する時は鎔鑛作業をなすに多量の燃料を要し、出銑量は少く從つて生産量が高價なので作業も亦甚だしい困難を來すのである。そこで現在では各鑛區中に少量散在してゐる比較的含鐵分の高い鑛石を撰擇採集し、平均五十二%内外の鑛石を使用

したけれども、其の量は既に幾何もなく鎔鑛爐一基を操業しても尙三年以上を持續する事は困難なので、玆に製鐵所は大正九年以來之が貧鑛處理の研究に力を致し、遂に世界に誇り得べき還元焙燒法及磁力選鑛法を發見し、經濟的に操業することの可能なるを確認したので、大正十三年度から十四年度に至る二箇年の繼續事業として現在鎔鑛爐二基に必要な銑鐵を生産すべき選鑛工場の建設に著手した。之が完成の曉は銑鐵生産額は一箇年二十萬噸とされてゐる。

鞍山一帶の鑛區は十一鑛區で、總面積約四百萬坪、製鐵所を中心に半徑約九哩を以て東北から西南に向け半圓形内に點在し、埋藏量は實に三億噸を産する。

市街經營　製鐵所諸施設の進捗と共に會社は從事員の住宅を中心とする市街地の計畫を樹て用地内市街地區の内四十萬坪に地區割を定め、之に道路、水道、下水の諸設備を施行し、一般に宅地を貸付けて家屋の建築を許し、小學校、醫院、簡易圖書館等諸般の公共施設を爲し、大正九年五月から製鐵所で製出の瓦斯を市街に供給してゐる。更に同市街地の電燈、電力は營口水道電氣株式會社の經營に係るも、之に要する電力は全部製鐵所發電所から供給してゐる。

電　氣

目下會社の經營する電氣營業は大連、奉天、長春及安東の四箇所であつて（撫順は炭礦、鞍山は製鐵所で何れも經營してゐる）。

大　連　明治四十年十月電燈及電力供給の營業を開始し需要の增加に伴つて漸次供給設備の擴張を行

ひ、目下發電所は濱町及天の川の二箇所であつて一は六千キロワット、一は一萬キロワットの發電能力を有し、大正十三年度末の電燈供給口數は二萬七千、十燭光換算燈數四十五萬燈を算し、又同年度中に供給した電力は千百四十三萬千餘馬力時である。

更に會社は大連市內の交通機關として、明治四十二年九月から電氣鐵道を敷設、營業を開始し、星ヶ浦並老虎灘方面に市外線を延長し、現在軌條延長六萬五千六百五十一米を有してゐる。大正十三年度の客貨取扱數は乘車人員二千七十八萬三千人、貨物四千二百八十噸である。

奉天　明治四十一年六月から電燈營業を開始し、大正十年度末には四千キロワットの發電能力を有するに至つたけれども、大正十一年度當初撫順奉送電線が開通したので從來の發電所は不要に歸したけれども、變電所故障若くは其他手入等の際に於ける豫備として千キロ發電所を存置する事とした。大正十三年度末の電燈供給口數は



天の川發電所

六千七百、十燭光換算燈數は十三萬八千で、供給電力は三百三十六萬餘馬力時である。

長　春　明治四十三年二月營業を開始し、目下三千二百五十キロワットの發電能力を有し、大正十三年度末の電燈口數は四千五百、十燭光換算燈數七萬九千にして供給電力は二百七十一萬馬力時である。

安　東　明治四十四年一月安東電燈株式會社を買收して開業し、目下七千キロワットの發電能力を有し、大正十三年度末に於ける電燈供給口數は八千二百、十燭光換算燈數十萬五千であつて、供給電力は三百六十二萬馬力時である。

各地共市街の膨脹竝工業の發達に伴ひ、電燈、電力の需要が著しく増加してきたので、土地廣く勞銀低廉なる滿洲の土地は漸く內地企業家に注目され、奉天、遼陽及金州等には紡績工場の建設せられ、更に奉天には近く電鐵の開業を見る機運に到達し、目下著々準備中にして電氣



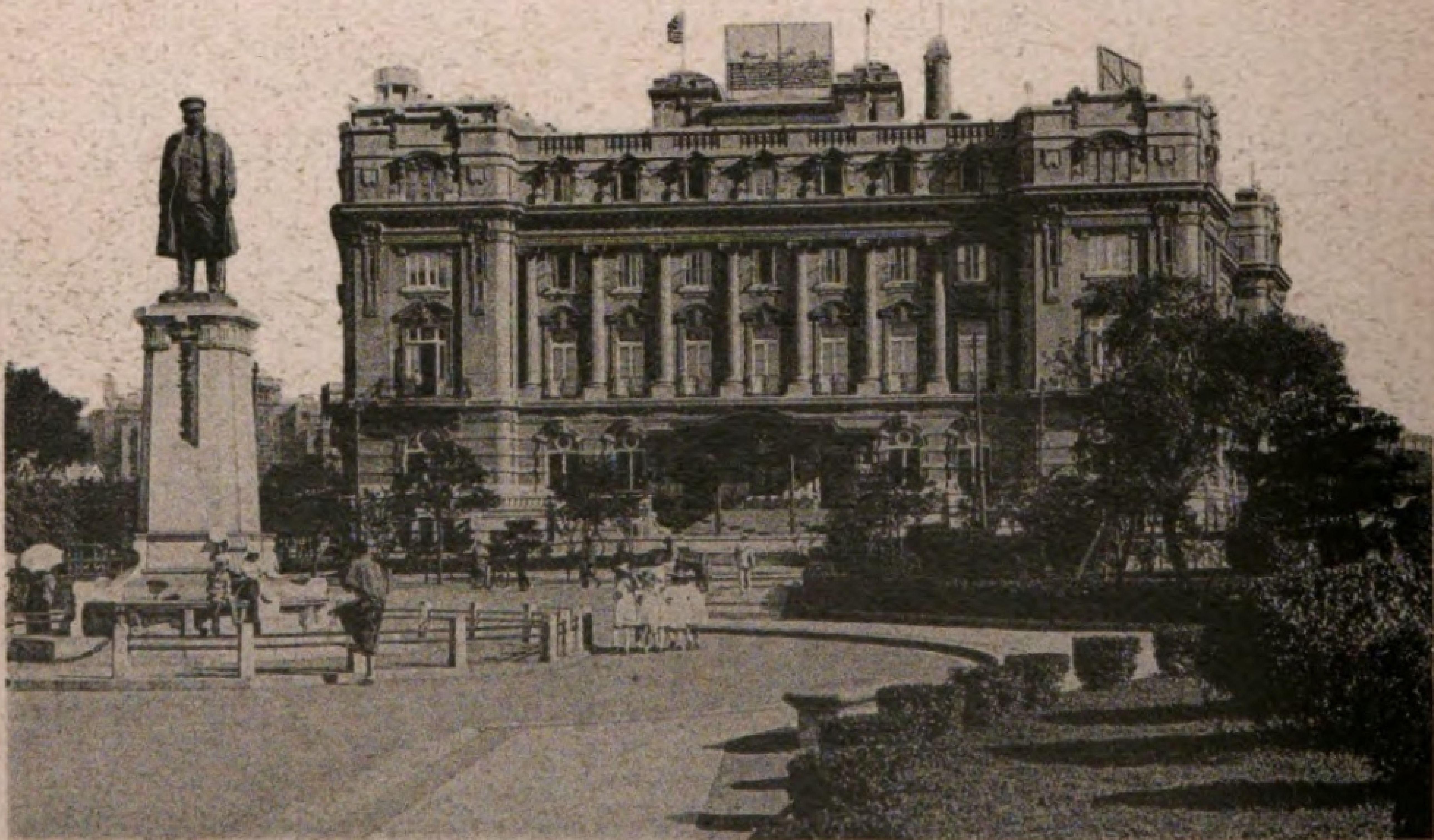
大連常盤橋の電車

事業の前途は誠に洋々たるものである。

撫奉送電　本社は撫順から奉天に送電の目的を以て撫奉送電所を計畫し、日支合辦組織の形式で大正十年七月工事に著手し興業費五十四萬六千餘圓を投じ翌年二月竣工したので營業を開始し、專ら電流を奉天電燈營業所に供給した。以上の外會社は沿線其の他各地の電氣事業の爲めに、或は株式に投資して其の創業を助け或は興業費を貸付くる等、其の發展の爲めに隨分と盡力してゐる。是等諸會社は大半當會社の出資に依つて成立したのであるが、各社共社長及技術主任は本社の推薦に依るものである。

旅館

會社は鐵道交通の便益を思ひ、沿線主要地に「ヤマトホテル」の名稱の下に旅館業を經營する事とし、即ち明治四十年八月大連、同四十一年三月旅順、同四十三年十月奉天、同四十一年十月長春の各地に營業を開始し、其の他内外の避暑客を招致しやうとして明治四十三年八月大連郊外の風光明媚な星ケ

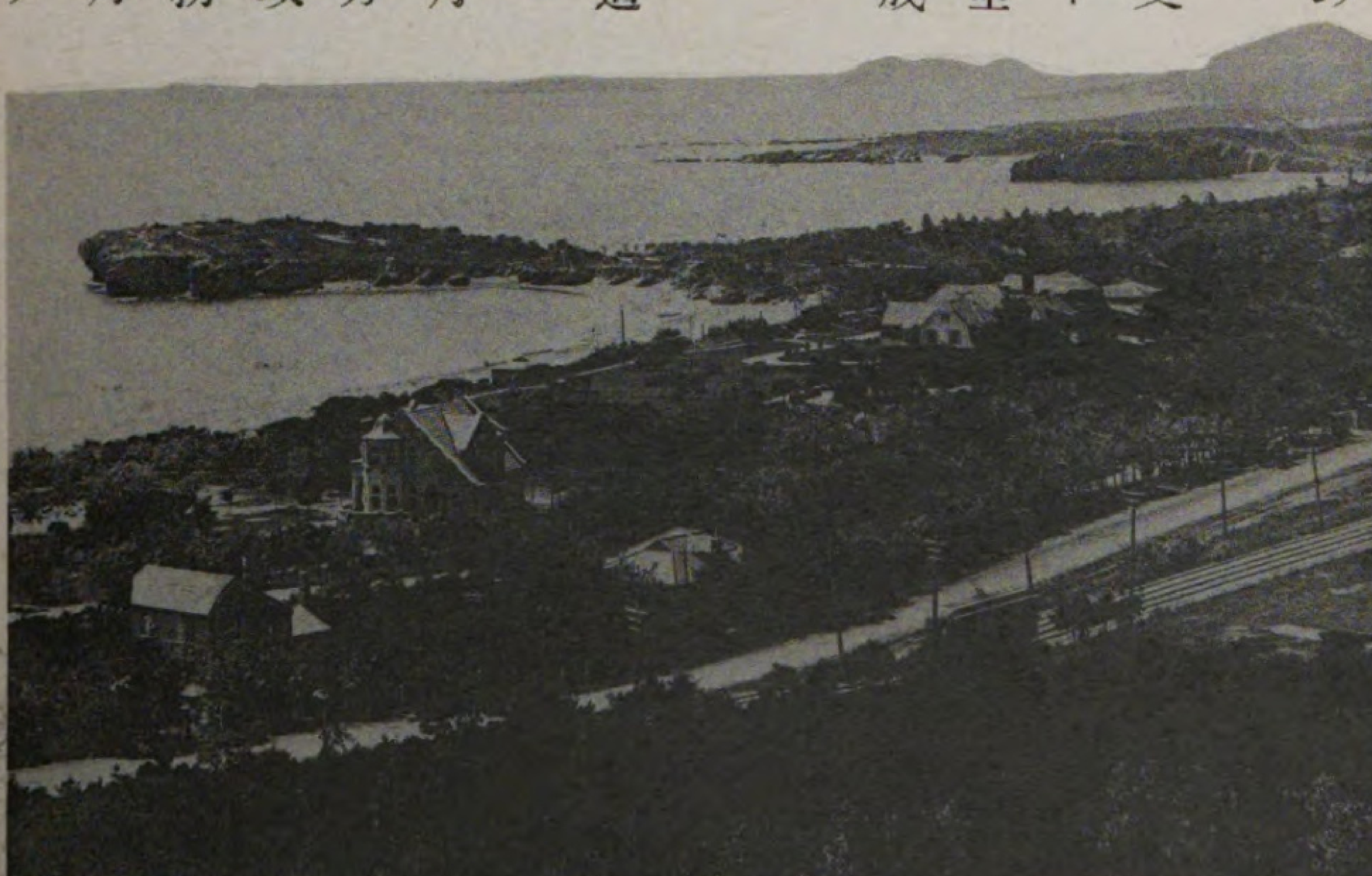


大連ヤマトホテル

浦海岸に「ホテル」及貸別莊を開設し、貸別莊は目下洋風のもの二十三棟、和風のもの三棟、中國風のものが一棟ある。又大正七年六月から旅順黃金臺の官有貸別莊の經營を引受けた。「ホテル」の設備は何れも完備を圖り、殊に大連ヤマトホテルは近世「ルネッサンス」式で、建坪六百六十坪、客室百十五を有せる宏大なる建築であつて、大正三年新築落成したもので、設備、調度洵に善美を盡したものである。

地方事業

明治四十年會社の初めて地方經營に著手した時は、鐵道沿線各地には居留民會といふのがあつたので、會社は一時の便法として之を地方機關としたけれども、同年十月全く之を廢して、鞍山、奉天、長春安東の四箇所に地方事務所を置き、各其の下に地方區を配し以て各地の行政を管掌させ、此の他沙河口では工場で、撫順では炭礦庶務課に於て地方經營の任に當らせた。然し大正十四年四月從來の地方區を地方事務所に改め、各管轄區域を行政す



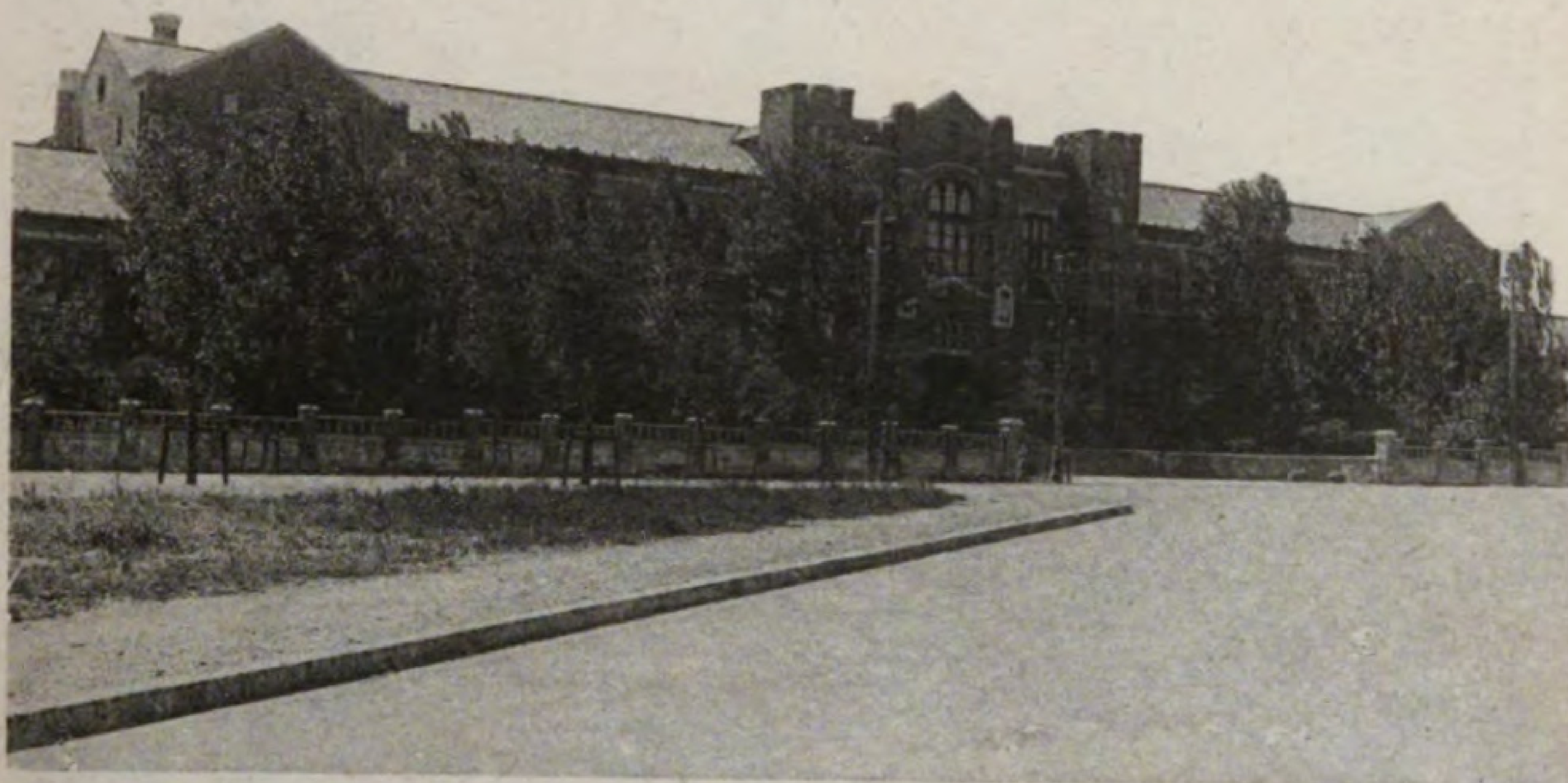
大連郊外星ヶ浦

る事となつた。

地方經營に要する費用に關しては、附屬地内公共事業の施設に屬するものは總て會社の負擔とし、經常費は居住者の納付する公費を以て之に充て、其の不足部分は會社から補給することとした。而して地方費の賦課は附屬地の發展及居住者資力の狀況に鑑み現在其の課率を甲、乙、丙の三樣とし、各地共其の一に依り、納付者の資力收入等を參酌して賦課してゐる。

地方事業として會社の經營してゐるものは、土地、建物、市街經營、教育、衞生、警備、產業及試驗所に關するもので、其の概要を記せば次の樣である。

土地及建物 大正十三年度末に於ける會社所屬の土地は關東州内で七百六十萬坪、州外で（州外中には哈爾賓、天津、上海、東京等を含む）八千六百三十九萬坪、合計九千三百九十九萬坪、約十八方里に當つてゐる。此の中には官用地として使用さるゝものもあれば、會社が直接に社用地（停車場及事務所用地、線路、工場用地及工業用地等）として使用するものである。或は市街地、宅地若くは耕地として有料で個人に貸付けたものなどもあつて、大正十三年度末の土地貸付面積は千八百五十三萬坪に達してゐる。又會社所有の建物は大正十三年度末に於て約一萬六千四百棟、六十五萬九千坪に及び社用並諸官衙等特殊の用途に充つるものを除く外、有料で貸付くるの方針で現在五百餘棟、二萬二千坪の貸付家屋がある。



南滿洲工業專門學校

市街經營 會社の地方經營は業務開始の最先に於て附屬地の繁榮と人口の扶殖とを劃して先づ樞要の地たる長春、鐵嶺、奉天、遼陽、其の他に市街地としての諸施設を整備すべく、上下水道、公園、市場 屠獸場、墓地及火葬場其の他學校、醫院等を設け、今や附屬地の戸數は約五萬二千、人口約二十七萬七千人を算し、逐年内容外觀共に充實されつゝある。

教育施設 會社は沿線の各須要地に二十七箇所の小學校を設置し、日本人兒童に教育し、且中間驛の附屬地から小學校に通學する者に對しては、無料で汽車通學の便を與へ、或は兒童寄宿舍を設け努めて兒童就學の便を圖つてゐる。會社は又瓦房店其の他九箇所に公學堂を設けて支那人兒童を教育し、鐵嶺には日語學堂を設けて支那人に日本語を教授し、尚大正六年から支那人に中等教育を施すの目的を以て、奉天南滿中學堂

を設置した。更に邦人中等教育の爲めに中學校を奉天、鞍山、撫順及安東に、高等女學校を奉天、撫順、長春及安東に、商業學校を長春、營口及遼陽に（營口及遼陽は支那人）、工業學校を大連に設立した。又高等教育機關としては奉天に醫科大學、南滿洲教育專門學校（當分大連の假校舍に於て教授す）がある。大連には工業專門學校が設けられてゐる。其の他幼稚園、實業補習學校、家政女學校を各地小學校に附設してゐる外、撫順には鑛山學校、公主嶺、熊岳城には農業學校を設けてゐる。社會教育機關として大連其の他に圖書館を設置してゐる。殊に大連圖書館の如きは規模宏大で資料の豐富なることは、洵に中外に誇り得るものである。

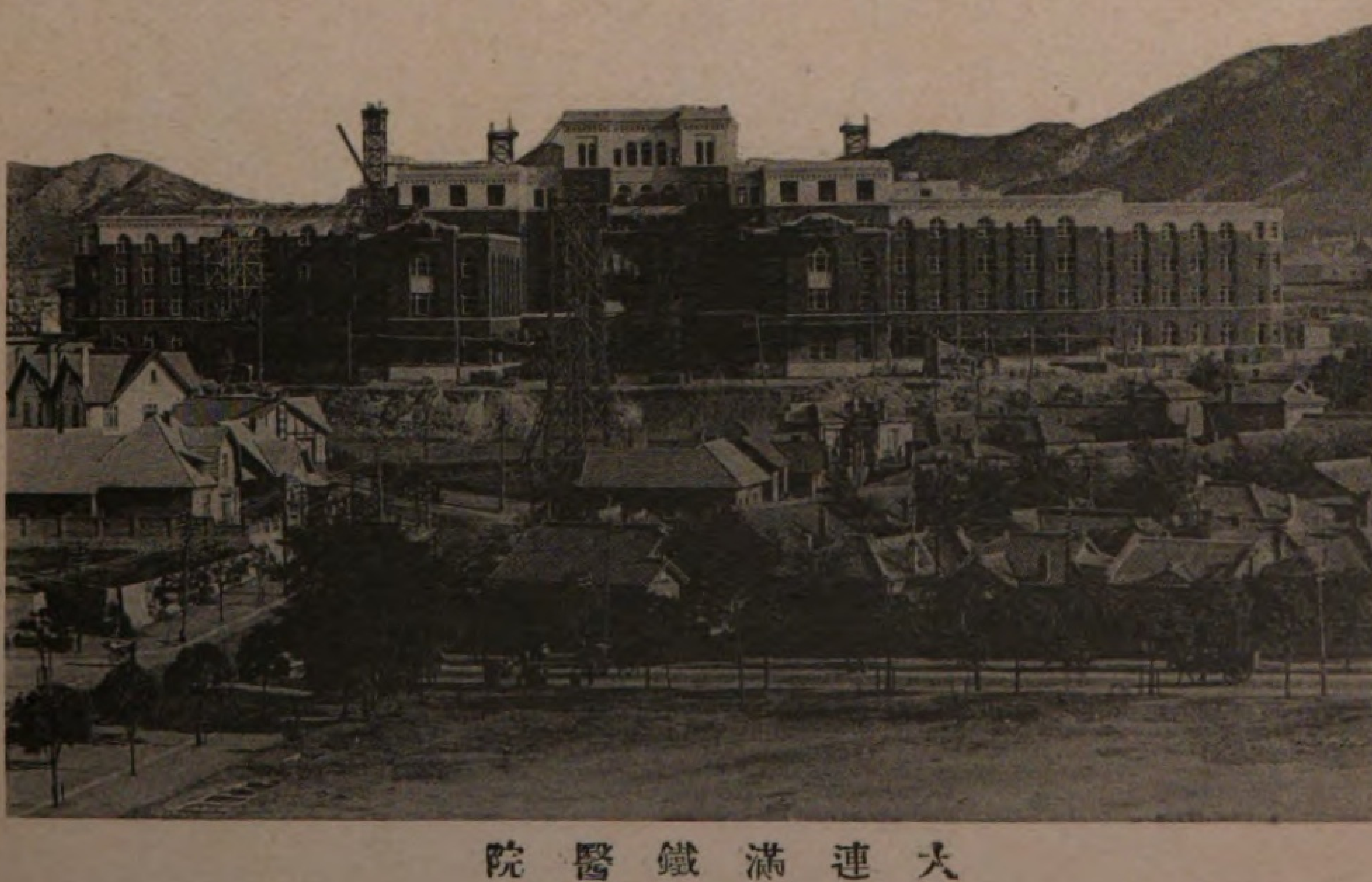
衞生施設　衞生施設の完備と衞生思想の普及とは會社の最も焦慮する所で、諸般の設備は愈々遺憾なきを期してゐるが、殊に醫院に於て其の設備の整頓してゐる事は



滿洲醫科大學



吉林東洋醫院



大連滿鐵醫院

支那全國に冠たるものである。現在醫院の所在地は大連、瓦房店、大石橋、營口、鞍山、遼陽、奉天、鐵嶺、開原、四平街、公主嶺、本溪湖、長春、安東、撫順及吉林の十六箇所で、大連、沙河口、西營口、奉天城內、長春城內の五箇所に分院を設け一般住民の診療に從事してゐる。就中沙河口同壽醫院、西營口、奉天城內、長春城內分院は善隣國民に我醫術の恩澤を普及させやうとして設けたものである。其の他附屬地內で醫院の設けのない熊岳城外五箇所、附屬地外には新民府外七箇所に公醫を配置してゐる。尙將來必要に應じ漸次之を配置する事としてある。

大連醫院は內科、外科、眼科、產婦人科、小兒科、皮膚科、耳鼻咽喉科、齒科、口腔科等各分科を網羅してゐる外、研究部(病理、細菌醫化學)及一般治療部を備へてゐる。殊に近く落成の新築本院の如きは工費四百萬圓の豫算を以て著手せられたもので、其の規模は頗る宏大なものである。其の他の地方醫院でも各分科殆ど完備してゐる。

警備施設 附屬地警備に關するものは消防及警戒の業務で、消防は沿線各地に消防隊を設け、警戒は巡視又は夜警を配置し、民政署、警察署、守備隊、憲兵隊と氣脈を通じ、又樞要の地に請願巡查を配置し、賊難、火災、其の他の危害防止に努めたけれども、警備機關統一の目的を以て請願巡查は大正十年度限り之を廢止した。

產業施設 滿蒙開發の要義は、農、牧、林業の改良增殖を計り、商工業の殷盛發達を期するにある。會社は夙に之等の研究調査を進め各地に試驗場を設けて各種試驗鑑定を爲し、且つ其の成績を廣

く一般に知らせて、傍ら良好な種苗、樹苗及種畜を育成配布し、優良品種の普及を圖る等鋭意之が施設に努力した。今之等施設の種類を示せば左のやうである。

農事試驗場　公主嶺に本場、熊岳城に分場がある。公主嶺本場は專ら畜産、農藝、化學、病理、昆蟲科並種藝に關する試驗及調査研究を行ひ、熊岳城分場は園藝、種藝、林産、養蠶の四科を置く。

農事試作場　鄭家屯及海龍の二箇所で、一つは東蒙古、就中鄭家屯方面に於ける農作物、家畜、植樹に關し、一つは柳河縣、海龍縣地方の大豆、其の他の農産物に關する改良施設及一般農業經營に關する模範を示す目的を以て設立した。

湯崗子「アルカリー」試驗地　アルカリー土壤に適する作物の種類、肥料の影響、天然洗滌による土地休閑狀態等の試驗。

煙草試作場　滿洲に於ける煙草作の改良發達に資する爲め、鳳凰城及得利寺に開設したが、其の成績は頗る良好であつたので、米國種試驗に重きを置いた鳳凰城試作場は、東亞煙草會社の希望を入れて大正八年度から其の設備一切を貸與し經營を繼承させた。

其の他原種圃二箇所、採種田一箇所、苗圃十五箇所、種羊場一箇所、委託試驗地十一箇所及獸疫研究所等である。

商工施設　會社は滿蒙に於ける企業の勃興に就ては特に意を用ひ、事業の性質及び必要によつては保護助長に努力してゐる。卽ち企業家に對し低利資金を融通し、又は補助金を與へ或は目論見に對する本社の意見を披瀝する等、極力事業の助長を計ると共に其の經營に對しては必要の監督を怠らない。

又滿蒙の商工業に關し時々具體的調査を發表して商工業者の參考に資し、尙其の質疑に應答し、事業の紹介等に力を致してゐる。

地質調査所　地質調査所の事業は當初撫順炭礦の開發に資する爲め同炭田の地質調査を主とし、明治四十年四月事務所を撫順炭礦に置いたが後大連に移し、一般的に南滿洲の組織的地質調査を行ふことゝした。而して從來の事業中主なるものは鞍山外七鐵鑛の發見、蓋平及海城兩縣下に於て菱苦土鑛の發見、加里長石產地の發見、各地炭田の地質調査及地形測量等で、此の他炭坑、隧道、溫泉、水源、鑿井、其の他各方面の應用地質、窯業、冶金、機械、土木等に要する諸原料の調査を爲し、滿洲開發の資料に供してゐる。

中央試驗所　中央試驗所は明治四十一年七月關東都督府の設立に係り、滿洲に於ける天與の富源を開發し、將來事業計畫の基礎を學術的硏究と其の結果の實行とに因り確立せなければならないとして主に殖產工業及衞生に關する試驗を施行する機關であつたが、明治四十三年五月會社が之を繼續するやうになつた。爾來會社は漸次之を擴張し、其の組織を變革して大正六年十月、庶務、分析、應用化學、製絲、窯業、釀造、衞生、電氣、化學の八科を設け、益々學術的の硏究を進むると共に、一般の分析、試驗及鑑定の依賴に應じ、汎く企業者の計畫を確立するの便宜を圖り、以て滿洲に於ける工業及衞生上の改良進步に努力してゐるのである。而して硏究の結果工業として成立の見込あるものは、工

場作業採算的の基礎調査を爲さうとして試驗工場を設立し、明治四十三年四月以降大正六年十一月に亘つて既に實施したものを擧ぐれば、製絲工場、陶磁器工場、耐火煉瓦工場、高粱酒釀造工場、染織工場、豆油製造工場、脂肪酸工場、硝子製造試驗工場、「リグノイド」製造試驗工場等である。上記の內豆油製造工場及脂肪酸工場は大體所期の試驗を終つたので之が經營を他に讓り渡し、そうして抽出式豆油、豆粕の製造作業及脂肪酸「グリスリン」製造事業の經營に一段落を告げた。又製絲工場は大正六年十月其の組織を改正した際、工場的試驗は擧て之を他の經營に委托し、「リグノイド」試驗工場も豫期の試驗を了つたので、是れ又大正七年九月他の經營に移した。尙之等試驗工場の中最近會社組織によつて獨立の營利事業となつたものに、大連窯業株式會社及昌光硝子株式會社の二がある。其の他研究の結果新に企畫したもの



滿鐵中央試驗所

に硬化油製造、「サルバルサン」製造、加里鹽類製造等の事業がある。殊に特筆すべきは當所に於て研究した結果發明したものの内特許權を得たるものは左のやうなものである。

特許番號	名稱	
二八六二號	高粱酒より乳酸石灰を製造する方法	大正四、一一、一九
三二七七三號	モンド瓦斯「タール」を利用せる新消毒臭劑	同　七、六、三
三三六九七號	柞蠶繭處理法	同　八、一、二一
三四五九三號	高粱酒釀造用として高粱酒蒸餾粕を利用する方法	同　八、六、二八

然るに大正九年六月職制に變更があつたので從來の各課を廢止し、新に試驗課竝研究課の二課を置き、試驗課は諸般の分析試驗、分析、檢定及鑑定に關する事項を掌理し、研究課は工業に關する理化學的研究及調査の事項を掌理することなり、是等の二課に依つて中央試驗所の使命に努力してゐる。

受託經營事業

吉長鐵道　從來會社と重要な關係にある支那國有吉長



吉林城門

鐵道は更に借款契約を改訂し、會社に於て其の經營を引受くることなり、大正六年十二月三十一日を以て諸般の引繼を了し、大正七年一月一日から其の業務を開始した。會社は運輸主任、工務主任及會計主任各一名を社員から推し、其の他五十名の社員を派し、他は總て在來の支那人を使用し經營してゐる。

三、經理

以上の各事業に對し大正十三年度末に投じた興業費、毎年度に於ける營業總收支金額を表示すれば次のやうである。

興業費事業別表

（大正十三年末現在）

鐵道	二一一、四五七、〇九二円	工場	一一、八〇二、四一一円
船舶	三、七四五、二一二	港灣	四三、四八〇、七〇六
鑛山	一二五、一二九、〇二三	製鐵所	三九、五〇四、二八五
電氣	一八、七四五、一六九	瓦斯	七、八五〇、四五四
窯業工場	二、五二二、一一二	旅館	二、六六八、八〇九
地方	六〇、〇六二、三六四	雜施設	四六、三二〇、四六九
計	五七三、二八八、一〇五		

營業收支表

年度	總收入	總支出	純益金
明治四十年度	一二、五四三、一一六円	一〇、五二六、五三一円	二、〇一六、五八五円
同四十一年度	一七、六一五、六八三	一五、五〇二、一〇一	二、一一三、五八二
同四十二年度	二三、一一三、九三三	一七、三四二、二三四	五、七七一、五九九
同四十三年度	二四、七七七、六八五	二一、〇六九、三六八	三、七〇八、三一六
同四十四年度	二八、一五五、〇八〇	二四、四八七、六五二	三、六六七、四二八
大正元年度	三三、五四六、四七七	二八、六二〇、四三三	四、九二六、〇四五
同二年度	四二 四一七、一二三	三五、二四九、八四四	七、一六七、二七九
同三年度	四四、六七〇、六一六	三七、一二九、五二五	七、五四一、〇九一
同四年度	四三、七八六、〇二五	三五、七〇五、五二六	八、〇八〇、四九九
同五年度	五二、四〇二、四〇八	四二、二九四、八〇一	一〇、一〇七、六〇八
同六年度	六九、四二九、二五二	五四、五〇三、六一〇	一四、九二五、六四三
同七年度	九六、二五七、八七八	七四、〇六四、七〇六	二二、一九三、一七一
同八年度	一五三、一三三、三八七	一二八、七五八、四二三	二四、三七四、九六四
同九年度	一七四、七三八、二八七	一四七、三四六、三〇三	二七、三九一 九八五
同十年度	一四七、一〇〇、六〇三	一一五、七一四、四六四	三一、三八六、一三九

同十一年度	一六九、九五六、六四六	一三四、八七六、四〇二	三五、〇八〇、二四四
同十二年度	一八五、六九八、三二四	一五〇、九〇二、七三二	三四、七九五、五九二
同十三年度	一九四、一八一、七八五	一五九、六二八、八七二	三四、五五二、九一四

大正十五年三月二十日印刷
大正十五年三月二十五日發行

南滿洲鐵道株式會社
調査課編

東京市日本橋區兜町二番地
印刷人　神谷岩次郎

東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社